



アンテルナシオナ
ル・シチュアシオ
ニスト 第1号

シチュアシオニスト・イン
ターナショナル

目次

『アンテルナショナル・シチュアシオニスト』に発表されたすべてのテキストは、出典を明記しなくても、自由に転載、翻訳、翻案できる。

1. シュルレアリスムの苦い勝利
2. 響きと怒り
3. 何を読むための自由？ くだらないもの。
4. 新しい操作技術の管理のための闘い
5. 映画とともに、映画に反して
6. 遊びのシチュアシオニスト的定義試論
7. 状況の構築のための予備的諸問題
8. 定義
9. 新しい都市計画のための理論定式
10. 文化革命に関するテーゼ
11. シチュアシオニストとオートメーション
12. 無益な寛大さはごめんだ
13. インターナショナル・ニュース
14. あるフランスの内乱
15. 付録資料 状況の構築とシチュアシオニスト・インターナショナル潮流の組織・行動条件に関する報告 1
16. 付録資料 状況の構築とシチュアシオニスト・インターナショナル潮流の組織・行動条件に関する報告 2
17. 解説 いま現在の運動へつらなるラディカリズム 小倉利丸

訳者改題

1939年に第二次世界大戦が勃発すると、ブルトン、エルンスト、バンジャマン・ペレ、アンドレ・マッソンら、シュルレアリストの多くは次々と合衆国に亡命し、大戦期のシュルレアリスムの活動はニューヨークを中心としたものとなる。ドイツ軍に占領されたフランスでは、既に1932年にコミンテルンに同調しシュルレアリストを除名されていたアラゴンや、大戦直前に再びフランス共産党に接近したエリュアール、プレヴェール、ルネ・シャールら、ブルトンから離反した者たちが対独抵抗運動（レジスタンス）に参加した。さらに、アルノー、ジャン＝フランソワ・シャブラン、ドトルモンら若い世代が中心になって、ナチス占領下のヨーロッパで唯一のシュルレアリストの雑誌『ペンを持つ手』（全30号以上）を非合法で発行し、エリュアールの反戦詩「自由」やナチスの禁書目録に載っていたブルトンの『黒いユーモア選集』を配布するなど、様々な形でレジスタンス活動を展開した。

戦後のフランスでは、帰国したブルトンやペレらが、アラゴンやエリュアールらのレジスタンス派（それは、戦後の共産党の躍進によって、フランスの文化政策を隠然と支配する勢力になり、アラゴンなどは出版界に強い影響力を持った）に対し、彼らは大戦期に愛国主義的精神で古い社会秩序の防衛に働き、芸術・文化の変革という面ではむしろ後退したと、それ自体では正しい批判を行ったが、今度はブルトンら自身が、戦後の状況の中で生まれた新しい質の運動に次第に対応できなくなってゆく。シュルレアリストは、ベルギーとフランスの「革命的シュルレアリスム」（その中心は、自然消滅した『ペンを持つ手』のノエル・アルノーとドトルモン）やシュルレアリスム自体の革命を唱えるルーマニアの「新しいシュルレアリスム」などフランス以外の国々で発展してきた運動には冷淡で、その後のコブラやレトリストの運動には関心を示さなかった。これは、これらの運動の担い手の多くが共産党に近い立場でレジスタンス活動を行っていたということもあるが、何よりもそれらの運動が、戦後、冷戦構造が確立されていく中で、50年代の大量消費社会の到来を予感して生まれてきた新しい質の運動であり、同時に、文化領域での新しい実験を挺子にして、高度資本主義社会へ向かう戦後の社会秩序を打ち破る全体的変革をめざしたからにはほかならない。つまり、戦後のシュルレアリスムが、神秘主義や相変わらずの自動運動（オートマティスム）と夢の理論に基づいた仲間内の活動に埋没し、理論的にも実践的にも1930年代のような豊かさは失い、時代の変化に対応できなくなっていたのに対して、ルーマニアの「新しいシュルレアリスム」やレトリストは、オートマティスムの内容は既存社会の無意識であり、保守的で退屈である、それゆえ「新しい欲望」を作り出さねばならないと主張し、とりわけ言語の MATERIAL そのものに文字どおり唯物論的に働きかけ、レトリスト・インターナショナルは、社会生活から切り離された文化や自律した（それゆえ消費される）芸術作品を認めず、日常生活批判、都市計画批判としての漂流や心理地理学、スキャンダルといった形のない活動を自らの「芸術作品」とし、コブラもまたレトリストにならって既存の要素の転用に積極的な価値を見出し出していった。シュルレアリストは、こうした新しいアヴァンギャルドの意味を理解で

きず、依然として戦前スタイルに固執したために、1958年には、公認の芸術ジャンルとして固定化し、完全に停滞してしまっていた。ダリやマグリットの絵は高い値段で売り買いされ、シュルレアリスム風の絵が、化粧品や広告の形で街中に氾濫し始めたのである。

本質的な変化を遂げなかった世界の枠内においては、シュルレアリスムは成功した。その成功は、ひるがえって、支配的な社会秩序の転覆以外のなにものをも期待していなかったシュルレアリスムを裏切ることになる。しかし同時に、その転覆に携わる大衆の行動に生じた遅れは、先進資本主義の他の諸矛盾と相伴って文化的創造の不能症そのものを維持しまた悪化させながら、シュルレアリスムの現状を維持しているのであり、またシュルレアリスムの墮落した繰返しにすぎない様々なものを助長しているのである。

シュルレアリスムが遭遇した生活条件は破廉恥にも今日まで存続しているが、その生活条件においては、シュルレアリスムは乗り越えられない性格のものである。なぜならば、シュルレアリスムはすでに、全体的にみて、ダダイスムによって清算された詩と芸術に付け加えられた補遺であるからであり、また、シュルレアリスムの序章全体は、芸術の歴史についてのシュルレアリスムによる後書きの彼方、構築すべき真の生をめぐる諸問題のうえにあるからである。したがって、技術的にシュルレアリスムの後に位置することになるものは全て、前の諸問題（ダダイスムの詩ないし演劇とか、詩集『慈悲の山』の文体における形式上の探究とか）を再び見いだすことになる。そういうわけで、先の戦争以後注目を集めた絵画の新機軸のほとんど全ては、単なる末梢事であり、孤立していて大げさであるが——密かに——一貫した数多くのシュルレアリスムの成果の中に組み込まれている（マックス・エルンストは1958年初めのパリの展覧会の折りに、1942年にポロックに何を教えたかを改めて語っていた）。

シュルレアリスムが先行していたのは歴然だったが、いまや、現代世界は、それに追いついた。実際に進歩している諸分野（あらゆる科学技術）における新機軸の出現は、シュルレアリスム的な様相を示している。例えば1955年にマンチェスター大学のロボットに書かせたラブレターは、あまり才能のないシュルレアリストの自動運動（オートマティスム）の試作としても通るようなものであった。とはいえ、この発展を統御している現実とは、次のごときである。すなわち、革命はなされなかったのであり、シュルレアリスムにとって自由の余地であったものは全て、シュルレアリスムがかつて闘いを挑んだ抑圧的世界によって絡めとられ、利用された、ということである。

睡眠中の被験者の教育のためにテープレコーダーを使用するのは、生にとって夢のためにとって置かれている領域を、くだらない、あるいはおぞましい、実利目的に矮小化する企てである。しかし、シュルレアリスムの体制転覆的な発見の明らかな逆用としては、自動運動（オートマティスム）及びそれに基づく集団的な遊びを、米国で「ブレン・ストーミング」と名付けられたアイデア発掘方法に利用することに優るものはないだろう。ジェラルド・ロザンは、『フランス・オブセルヴァトゥール』誌の中で、ブレン・ストーミングの進め方を次のように記している

。――「時間の限定された会議（10分間から1時間）において、限定された数の人々（6人から15人）が、全く思いのままにアイデアを口に出せる。アイデアは、できるだけ多い方がよいし、奇抜なものであってもなくてもよく、いかなる検閲の恐れもない。アイデアの質はあまり重要ではない。参加者の誰かが口にしたアイデアを批判したり、あるいは人が話しているときに微笑することさえも、絶対に禁じられている。そのうえ、人は皆、既に出たアイデアを剽窃し、それに尾ひれを付ける絶対的な権利を、あるいはそうする義務さえをも、持っている。（中略）軍、官庁、警察も、その方法に頼っている。科学研究自体が、学会や討論会の代わりにブレン・ストーミングの会をおこなっている。（中略）CFPIの映画脚本家とプロデューサーにとって1つの題名が必要である。すると、8人が15分間に70もの題名を提案する！次はキャッチフレーズだ。34分間に140ものアイデアが出る。そのうち2つが採用される。（中略）無思考、非論理、非常識、支離滅裂、それが規則だ。質は量に取って代わられる。この方法の第一の目的は、様々な障壁、つまり、社会的制約とか、遠慮とか、あるいは、しばしば会議や官庁の委員会において誰か個人に発言や突飛な提案を禁じる声があがることがあるが、そういう声に出くわす恐怖とか、そういった障壁を取り除くことである。というのも、逆にそんな突飛な提案の中に宝物が埋まっているかもしれないのだから！ここでは、障壁がなくなれば人々が発言し、また、なによりもまず、1人1人が何か言いたいことがある、ということが確証される。（中略）おまけに、アメリカの経営者の何人かは、従業員との関係の面で、この技術の持つ利点をすぐに理解した。思ったことを言える人は、大きな要求を迫らないからである。だから、『私たち経営者のためにブレン・ストーミングを設定してくれ！』と経営者は専門家に注文する。『そうすれば、私たちが社員のアイデアを重視しているってことが、社員にも分かってもらえよう。だって、私たちは社員のアイデアを求めているのだから！』かくしてこの技術は、革命というウィルスを抑える治療法になったのである。」

訳者解題

1950年代後半は、ここに触れられているように、世界各地で若者たちの反抗が相次ぎ、ジェームス・ディーン主演の『理由なき反抗』（1955年）やエルヴィス・プレスリー（54年デビュー）の世界的ヒットに見られるように、「反抗」の身振りがモードとまでなった時代だ。

イギリスの「アングリー・ヤング・メン」は、1951年発表のL・A・ポールの自伝的小説『怒れる若者』に端を発するが、その後、1953年のジョン・ウェインの小説『急いで下りろ』、1956年のジョン・オズボーンの戯曲『怒りをこめて振り返れ』などによって、ブルジョワ社会の閉塞性に絶望的に反抗する労働者階級や中産階級の若者たちの姿を描き、一躍脚光を浴びた。合衆国でも、大衆消費社会の到来とともに、画一化された物質文化に背を向け、放浪とドラッグの生活に明け暮れ、一様にインドやチベットの精神文化や仏教に逃避する、「ビートニク」呼ばれるグループがカリフォルニアを中心に誕生していた。ジャック・ケルアックの小説『路上』（1957年）やアレン・ギンズバーグの詩『吠える』（56年）、ウィリアム・バロウズの『裸のランチ』（59年）は、いずれも、当時の若者たちに競って読まれ、60年代のヒッピーを予告する彼らの生活スタイルは多くの若者たちに真似された。

こうした無軌道な反抗を気取る生活スタイルは、イギリスや合衆国より以前に、すでに、戦後すぐから50年代初めのパリのサン・ジェルマン・デ・プレの周辺に出現していたものであり、髪の毛を伸ばし、破れたズボンをはいた若者たちが、サルトルやカミュらの実存主義者が出入りするドゥー・マゴなどのカフェの周りにたむろしていた。ドゥポールらのレトリストは、こうした環境のなかで、通りへの落書きやスキャンダルの創出、都市の心理地理学的漂流といった活動を、集団で意識的に行い、混沌とした反抗の気分を状況の構築へと結び付けようとしたが、その運動スタイルの過激さは、サルトルのエピゴーネンとして反抗を気取る若者たちからは煙たがられたようである。例えば、当時の様子を伝えるエド・ファン・デル・エルスケンの写真集『サン・ジェルマン・デ・プレの恋』（1955年）には、こうした反抗的な若者のポートレイトが写されているが、その中の1つ「街でたむろする若者たち」（1953年）には若い男のカップルの一方のズボンに「シチュアシオニスト・インターナショナルを通すな」、「サドのための叫び」（これはドゥポールの映画のタイトル）などと落書きされている。こうした活動を経て生まれてきたシチュアシオニストにとってみれば、文学流派のひとつにすぎず、個人的反抗にすぎない「アングリー・ヤング・メン」や「ビート・ジェネレーション」はまったく時代遅れな反抗の身振りに見えたに違いない。

怒れる若者たちとか、今日の若者の怒りとかが、よく話題になる。人々は気軽にその話題を口

にする。なぜならば、スウェーデンの青少年の理由なき暴動から、文学運動として続く気配のあるイギリスの「アングリー・ヤング・メン」が作成した声明文に至るまで、一様に、根本的には無害な性格、恐れるに足らぬ脆弱さが、見て取れるからである。支配的な思想と生活様式の解体の時代、自然に対する圧倒的な勝利が日常生活の現実的可能性の拡大に結びつかず、逆に、ときに粗暴に、そのための条件に反する方向に働いている時代から生まれた、これら若者の激昂は、おおざっぱに言って、シュルレアリスム的心情に相通ずるものである。しかし、彼らの激昂には、シュルレアリスム的心情が持っていた、文化に働きかける点も、革命的な希望も、欠けている。したがって、諦めが、このようなアメリカやスカンジナビアや日本の若者の自然発生的な否定主義のバックグラウンド・ミュージックになっている。サン・ジェルマン・デ・プレ*1は、かつて戦後まもなく、すでにこのような行動（マスコミは誤って実存主義的と名付けた）の実験室であった。そのことによって、現在のフランスにおけるこの世代の知的代表者たち（フランソワーズ・サガン＝ドルーエ*2、ロブ＝グリエ*3、ヴァディム*4、あのおぞましいビュッフェ）が皆、諦めを絵に描いたようなものだということの説明がつく。

この知的世代が、フランスの外で、より多くの攻撃性を現しているとするれば、その世代がそれについて持つ意識は、単なる馬鹿馬鹿しさと、非常に不十分な反乱に対する早まった満足との間に位置づけられる。神という観念が放つ腐った卵の臭いは、アメリカの「ビート・ジェネレーション」の神秘主義的な馬鹿者どもをすっぽり覆い込んでいるし、また、「アングリー・ヤング・メン」の声明にさえ、ないわけではない（コリン・ウィルソン*5を参照のこと）。「アングリー・ヤング・メン」は、一般的に言って、30年遅れて、イングランドがその間完全に彼らに隠してきた体制転覆的な精神風土を発見し、自分たちが共和政支持者であると宣言することによって、スキャンダルの最先端に立とうと考える。ケネス・タイナン*6は次のように書いている。「人々はいまだに王室、帝国、教会、大学、上流社会といったものを畏れ敬っているという滑稽な考えに基づいた芝居が上演され続けている」。この言葉（いま引用した文）は、「アングリー・ヤング・メン」のこのグループのありきたりに文学的な観点を暴露している。彼らは、単に、幾つかの社会慣習について意見を変えるに至ったにすぎないのであって、今世紀のどの前衛芸術派のうちにも認められる、文化活動全体の場の変化を理解していないのである。「アングリー・ヤング・メン」は、文学の実践に、特別の価値、すなわち贖いの意味を認めるという点で、部分的に反動的でさえある。つまり、彼らは今日、ヨーロッパでは1920年頃糾弾されたある欺瞞の擁護者になっている。そしてその欺瞞の存続は、英国王室の存続よりも重大な反革命的影響力があるのである。

これら全てのざわめき、いわば革命表現の擬音は、シュルレアリスムの意味と重要性に気づかないという共通点をもつ（シュルレアリスムのブルジョワ芸術的成功は、もちろん、それらを歪曲するものであったが）。実際、もしもうまくシュルレアリスムに代わりうる新しいものが何もないとしたら、シュルレアリスムの継続こそが最も首尾一貫した態度であろう。しかしながらまさしく、シュルレアリスムの根源的な要求を知っていてしかもその要求と不動の似非-成功との間の矛盾を乗り越えられないがゆえにシュルレアリスムに加わる若者たちは、シュルレアリスムが成立以来もともと内包していた反動的な方面に逃避している（魔法とか、歴史における前方とは別のところにあるかもしれない黄金時代の存在を信じるとか）。結局、人は、戦闘の後じつに長

い間、相変わらずシュルレアリスムの凱旋門のもとにいることに満足してしまい、そしてそこに、依然として伝統通り、ちょうどジェラルド・ルグラン*7が誇らしげに言うように（『シュルレアリスム・メーム』*8誌 第2号）、「シュルレアリスムの本当の炎を絶やさないことに頑固なまでにこだわる若い人々の核……」のままでとどまるだろう。

1924年のシュルレアリスム*9より以上に解放をめざす運動——ブルトンはもしそのような運動が現れたらそれに参加することを約束した——は、容易に生まれうるものではない。というのも、その解放運動としての性格は、いまや、現代世界のより優れた物質的手段の掌握に依拠しているからである。しかし、1958年のシュルレアリストたちは、そのような運動に参加する能力を失っており、そのような運動に反対して闘う決意さえしている。それゆえ、文化における革命運動が、シュルレアリスムによって主張された精神の自由、風俗習慣＝暮らし方の具体的な自由を、より効果的に自らのものにする必要性は、少しも減っていないのである。

われわれにとって、シュルレアリスムは、文化における革命の実験の端緒にすぎなかった。その実験は、実践的にも理論的にも、ほとんど即座に頓挫してしまった。さらに先に進む必要がある。なぜ人はもはやシュルレアリストになりえないのか。それは、常に「前衛」に対してなされる、シュルレアリスムのスキャンダルとは袂を分けてという警告に従うためではない（誰しも、われわれが不断の斬新さを取り入れるのを見たいとは思わない。それもそのはずだ。いったい、われわれにどんな新たな方向を提示できるというのか。逆に、ブルジョワジーは、われわれが選びたくなくなるような退行を、拍手喝采で迎えるつもりである）。人がシュルレアリストでないのは、退屈したくないからである。

退屈は、廃れかけているシュルレアリスムと、情報に乏しい怒れる若者たちと、気楽な青少年の展望はないが理由なしとは言えない反乱とに、共通の現実である。シチュアシオニストは、今日の余暇が彼らに対して言い渡す判決を執行するであろう。

*1：サン・ジェルマン・デ・プレ パリ6区の地名。1950年代、この界隈のカフェは実存主義者や不良たちのたまり場として有名だった。

*2：フランソワーズ・サガン＝ドルーエ フランスの小説家フランソワーズ・サガン（1935-）のこと。1954年にパリ大学在学中に発表した『悲しみよこんにちは』でデビュー。これはフランスで84万部、合衆国で130万部のベストセラーになり、東欧圏も含めて世界中で翻訳されて読まれた。1957年には、ハリウッドでオットー・プレミンジャー監督、ジーン・セバーグ主演によって映画化され好評を博した。ドルーエは、マスコミによって作られた作家サガンを、ヴィクトール・ユゴーが偏愛した女優ジュリエット・ドルーエになぞらえた言い方かもしれない。

*3：アラン・ロブ＝グリエ（1922-）フランスの作家。1953年に発表した『消しゴム』によってヌーヴォー・ロマンの推進者となる。1961年にはアラン・レネの映画『去年、マリエンバートで』の脚本を書くが、これはシチュアシオニストからレネの映画の革新性を後退させたと激しく非難された。その後、映画作家として『不滅の女』（63年）などの作品を制作した。

*4：ロジェ・ヴァディム（1928）フランスの映画監督。そのデビュー作『素直な悪女』（1956年、ブリジッド・バルドー

主演)は、ステレオタイプの恋愛物語だったが、バルドーの小悪魔的魅力で興行的には大ヒットした。他に代表作『危険な関係』(59年)がある。ブリジッド・バルドーやジェーン・フォンダらと結婚したことで有名。

*5: コリン・ウィルソン(1931) イギリスの作家、批評家。1956年刊の『アウトサイダー』は「怒れる若者たち」を代弁するものとして話題を呼んだ。

*6: ケネス・タイナン(1927-80年) イギリスの劇評家。

*7: ジェラルド・ルグラン(1927-) 戦後、シュルレアリスムに参加し、1950年代から60年代末まで、戦後のシュルレアリスムの最も積極的な活動家として『クピュール』、『ピエフ』(1958-60年)などの雑誌の編集をする。ブルトンと共著で『魔術的芸術』(1957年)を著したことで有名。1963年以降、映画批評誌『ポジティブ』の発行にも深く関わっている。

*8: 『シュルレアリスム・メーム』 1956年から59年まで発行されたシュルレアリストの雑誌。全5号。編集者はブルトンとシュステル。

*9: 1924年のシュルレアリスム 1924年は、ブルトンの『シュルレアリスム宣言』が発表され、『シュルレアリスム革命』誌が創刊、グルネル街15番地に「シュルレアリスム研究所」が開設された年で、この年を機に、ブルトンらは、ダダからシュルレアリスムへと公式に移行した。

訳者改題

1956年のソ連共産党第20回大会でのフルシチョフによるスターリン批判以降、東欧でも各国で政治の自由化に伴う文化・思想の自由化が現れた。ポーランドではポズナン暴動によって生まれたゴウムカ政権によって文化政策が緩和され、多くの新しい作家が作品を発表した。この記事に名前が出て来るマレク・フワスコもそうした1人で、他にも、ルポルタージュ小説で知られるノバコフスキや詩人のカルポビチ、風刺作家・戯曲作家のムロジェク、映画『尼僧ヨアンナ』の脚本で知られる作家・映画監督のコンビツキらがいる。ダダイストを自認した演出家カントルがクラクフで「新時代美術家グループ」を結成し、実験劇場「クリコ2」を創設したのもこの時期である。チェコスロヴァキアでの自由化は68年の「プラハの春」まで待たねばならないが、スロヴァキアのムニャチェコ、ベドナールら文学の領域で社会主義リアリズムのくびきを脱する試みが行われ、68年を準備するものとなっていった。

東欧のこれらの地域では、1920年代から30年代に、表現主義やダダイスム、シュルレアリスムなどのアヴァンギャルド芸術が次々と生まれ、西ヨーロッパとは異なる独自の色彩を生み出していた。だが、56年以降の自由化の中では、こうした傾向を継続発展させる試みはごくわずかで、SF小説やスパイ小説が許容されたり、「意識の流れ」の手法を用いた小説が発表されたりといった程度だった。ジャンルや手法の自由化という点で、社会主義リアリズムの制約が緩んだにすぎず、シチュアシオニストが求めるような個々の芸術ジャンルの変革を超え、社会変革をも目指したアヴァンギャルドな文化運動に発展するには程遠かった。

文学と芸術への逃避、昔のブルジョワ的観点に従って定義されたこれらの活動の重要性の過大評価は、ヨーロッパの労働者国家 [= 東欧共産圏諸国] において非常に広まっている考え方のようなのである。それらの国においては、世界の現実的変化の企ての警察的転用に対する反動として、失望した知識人たちは、結局、解体された西洋文化の亜流ないし繰返しに対して、無邪気な寛容さを示すに至っている。それは、議会民主制に関して彼らが再び見いだしている幻想と同種の幻想である。若いポーランド人作家マレク・フワスコ*1は、『レクスプレス』誌*2（1958年4月17日付）にインタビューされた際、彼が発した確かな意見によれば、ポーランドでは、生活は耐え難く、いかなる改善も不可能であるにもかかわらず、彼がポーランドに戻るつもりであることを、次のような啞然とする動機を持ち出して、説明している。「ポーランドは作家にとって常軌を逸した国です。その国で生活しそれを観察するために、あらゆる重大事態に耐えてみるだけの価値はあるでしょう。」

西洋文化の終焉の最もくだらない面、つまり、もはや形式に関する解体の極限にはなく、純粹

な中立性にたどりついた表現——例えば、サガン＝ドルーエや、『ファーズ』誌*3の芸術的動機——が、チェコスロヴァキアやポーランドで遭遇している愚かな関心にもかかわらず、われわれは、ジダーノフ主義 [=社会主義リアリズム理論] の後退を惜しんだりはしない。われわれは、いまなお強力な社会主義リアリズム論に反対して、情報と創造の全面的自由を要求する必要を理解する。しかしながら、その自由は、いかなる場合にも、いま西欧で見いだされる「現代」文化への追従と混同されてはならない。その文化は、歴史的に、創造の正反対であり、一連の改竄の繰返しである。創造の自由を求めることは、環境のより優れた構築の必要を認めることである。労働者国家においてもここ西欧においても、本当の自由は同じものであり、また自由の敵も同一だろう。

*1：マレク・フワスコ（1934-69年）　ポーランドの作家。

*2：『レクスプレス』誌　フランスの有名な大衆週刊誌。

*3：『ファーズ』誌　1954年から1975年まで、エドゥアール・ジャゲの編集によって出された商業的前衛美術雑誌。シュルレアリスム、コブラ、イマジニスムなどの動向をよく伝え、東側も含めて世界の各国で読まれた。

新しい操作技術の管理のための闘い

「今後は、人間の反応を、前もって決めておいた方向に確実に引き起こすことができるようになる」と、両世界大戦間に革命派とファシストが共に集団に対して使用した感化方法に関して、セルジュ・チャコティーヌ*1は書いた（『政治プロパガンダによる群衆の凌辱』ガリマール社）。以来、科学の進歩はたゆむことがない。行動のメカニズムについての実験的研究は進展している。既存の装置の新しい利用法が見つかり、また、新しい装置が発明されている。かなり前から、見えない広告（映画の筋の展開の中に、それとは別個の24分の1秒の映像を何度も挿入する。その映像は網膜には感知されるが、識閾下にとどまる）とか、聞こえない広告（超低周波音による）とかの試みが行なわれている。1957年にカナダ国防省の諜報局は、退屈についての次のような実験的研究を実施した。被験者を、何も起こりえないように調整された環境（壁には何の飾りもなく、照明は遮断されることがなく、家具は心地よいソファだけ、臭いも音も温度変化も全くない小部屋）の中に隔離したのである。研究者たちは、被験者の行動の広範な障害を確認した。脳は、感覚刺激がないと、正常な働きに必要な標準的興奮状態に保たれることができないのである。それゆえ、研究者たちは、退屈な環境が人間の行動に及ぼす有害な影響を結論として引き出し、またそれによって、オートメーションの普及とともに必然的に増えていく単調労働の際に突発する不慮の事故を説明することができた。

ラヨシュ・ルフなる人物の証言によれば事態はもっと先に進んでいる。それはフランスのマスコミに取り上げられ、書籍としては1958年初めに書店に出た。彼の物語は、多くの点で疑わしいけれども、いかなる空想科学的な細部の描写も含んでいない。それは、1956年にハンガリーの政治警察が彼に施したとされる「洗脳」について記述している。ルフは、部屋の中に閉じこめられて6週間を過ごしたと述べている。そこでは、いずれもよく知られている諸手段の統一的な使用によって、彼が自分の外界知覚および自分の人格を信じられなくなるようにすることがめざされた——そして結局それに成功した。それらの手段とは次のようなものである。まず、その密室の徹底的に異様なインテリア（透明な家具、曲がったベッド）。照明は、毎夜外から入る光線によってなされ、そして、その光線が身体に及ぼす影響に気をつけろという警告がわざと彼に与えられているのだが、彼はその光線を避けることができない。また、日常会話の際に、医師により精神分析の諸技法が利用される。あるいはまた、様々な麻薬。そして、それらの麻薬のおかげで成功した初歩的なまやかし（彼はその部屋から何週間も出ていないと信じるだけの全く正当な理由があるにもかかわらず、あるとき目覚めてみると、服は濡れていて靴は泥まみれであったりする）。さらに、支離滅裂またはエロチックな映画が上映され、それはその室内で時おり起きる別のシーンとごっちゃになる。あげくに、訪問者が彼に、まるで彼が冒険物語——ハンガリーにおけるレジスタンス運動のエピソード——の主人公であるかのように話しかけ、別の一連の映画がその冒険物語を彼に見せる（細かな経緯がそれらの映画の中と現実の会話の中で再現され、彼はついにはその行動に加わる満悦感を感じるようになる）。

われわれはそこに、かなり複雑な段階に達した環境構築の弾圧的な使用を見て取らなければならない。非実利的な科学研究の発見は全て、これまで、自由な芸術家からは無視され、すぐさま警察によって利用されてきた。見えない広告は米国でいくらかの不安をかき立てたが、初めに放

映された2つの宣伝コピーは誰にとっても危険がないだろうと告げられて、皆が安心した。それらのコピーは次の2つの方向へ影響づけるだろう。「もっとゆっくり運転しなさい」——「教会に行きなさい」。不可侵にして不変の人格という、人間主義的、芸術的、法的な観念全体が、いまや破綻している。その観念が躊躇せず去っていくのを、われわれは目の当たりにしている。しかし、われわれは、これから、新しい操作技術の使用法の実験と開発をめざした、自由な芸術家と警察の間のスプリント競走に立ち会い、参加することになる、ということを理解する必要がある。その競走において警察はすでにかなり先行している。しかしながら、わくわくするような解放環境が出現するか、それとも、旧来の圧制と恐怖の世界という環境が強化される——科学的に管理され、突破口もなくなる——かは、その競走の結果次第である。われわれはいま自由な芸術家と言ったけれども、20世紀に蓄積された諸手段を奪取するまでは、芸術の自由はありえない。それらの手段は、われわれにとって芸術生産の真の手段であり、それらの手段を持たない人々は、この時代の芸術家たりえないのである。もしそれら新しい手段の管理が全面的に革命的でないならば、われわれは、文明化された蜜蜂社会の理想の方へと導かれていきかねない。自然の支配は、革命的であるか、それとも過去の勢力の絶対的な武器になるか、いずれかであろう。シチュアシオニストは、忘却の必要性に奉仕する立場に立つだろう。シチュアシオニストにとって何かを期待できる唯一の勢力とは、理論的に言って過去を持たず常に全てを再発明せざるをえないプロレタリアート、つまり、かつてマルクスがプロレタリアートは「革命的であるか、それとも何ものでもないかである」と述べたが、まさにそのプロレタリアートである。そのようなプロレタリアートは現代にあるのか否か。その問題は、われわれの論題、すなわち、プロレタリアートは芸術を実現しなければならない、という論題にとって重大である。

*1：セルジュ・チャコティーヌ 不詳。『政治プロパガンダによる群衆の凌辱』は1952年刊。

訳者解題

ここに主張されているような、「状況の構築」のための映画の積極的利用、またそのための実験映画への関心は、シチュアシオニストの前身であるコブラとレトリスト・インターナショナルの時代からすでに見られたものである。

コブラは、1949年6月から7月にかけて、ベルギーで、ドトルモンが中心になって「国際実験映画フェスティバル」を開催し、1951年10月の、リエージュでの「第2回実験芸術家インターナショナル展」でも、ジャン・レーヌが組織して「抽象映画フェスティバル」を開催している。これらの映画フェスティバルでは、ハンス・リヒターやマン・レイなどのダダイストやシュルレアリストの映画だけでなく、フィルムに直接イメージを彫り込むカナダの実験映画作家ノーマン・マクラレンの映画なども出品され、60年代のアンダーグラウンド・シネマをはるかに先取りしていた。また、リエージュのフェスティバルのために、コブラは自ら、『ペルセフォン』というタイトルの映画も作っている。これには、後にフランスのヌーヴェル・ヴァーグの後見人となるシネマテーク・フランセーズのアンリ・ラングロワが協力し、ベルギーのコブラのメンバーが総出演している。ゼウスと大地の女神ディメテルの娘ペルセフォネをもじったタイトルのこの映画は、ドトルモンによると電話（テレフォン）を主題としたもので、人（ペルソンヌ）が喋るとその声が違って聞こえるという物語になっていたらしい。ベルギーのコブラのメンバーはみな、ガスマスクをかぶって出演した。

これらの活動を中心的に行っていたベルギーのドトルモンやレーヌは、シチュアシオニスト・インターナショナルには参加しなかったため、S Iの映画理論のもとになっているのはレトリストの映画である。レトリストはドゥボールらのレトリスト・インターナショナルにしても、それ以前のイズーのレトリズムにしても、映画への関心は並々ならぬものがあり、映像と文字・言葉・音を総合的に実験できる映画を実際に数多く作った。カンヌ映画祭で「アヴァンギャルド観客賞」などを獲ったイズーの『涎と永遠についての概論』（1951年）、ジル・ヴォルマンのシネマトクローヌ『アンチコンセプト』（51年）、ドゥボールの反映画『サドのための叫び』（52年）など、レトリストの映画は、何よりも、音をイメージの随伴物にせず、互いに独立したものとして扱い、そのために、フィルム上のイメージに優先的な価値を与えず、シークエンスの不連続な接続や断絶の多用、既存の映画フィルムの使用、フィルムそのものへの直接の切り込み、といった傾向を持つことにおいて共通していた。これらは実験的というよりもむしろ、「反映画」と形容すべきものである。それは、第7芸術として多くの可能性をはらんでいた映画を、物語映画という固定したスタイルにおとしめ、スペクタクルとして受動的な観客に消費させる商業映画を解体しようとするものであった。またそれは、彼らが高く評価していたロシア革命当初にマヤコフスキーとジガ・ヴェルトフが行ったキノ・プラウダの試みを継承するものでもあった。ドゥボールは、レトリストの映画雑誌『イオン』第1号（1952年4月）の「未来の映画すべてへの前提原理（プロレゴメナ）」の中で自らの映画について次のように書いている。

「写真の切り貼りと文字の使用（レトリズム）（与えられた要素としての）とは、ここでは、反逆の表現そのものと見なされる。（……）

ナレーションは、ところどころ削除された文章——そこでは言葉を削除することによって弾劾されているのは反動的勢力だ（『理論的散文の破壊のためのアピール』を参照せよ）——と、より完全な解体の萌芽である1文字ずつ綴られた言葉によって、疑問にさらされる。

この破壊は、映像とそれに随伴する音の重ね合わせによってなされる。すなわち、文章は視覚的にも音響的にもずたずたにされ、そこで写真映像は言語表現の中に乱入するのである。声と文字による対話は、その文章がスクリーン上に書き込まれるとともに、サウンド・トラックの上でも続き、次いで互いに応え合う。

結局のところ、私は、2つの無意味（完全に意味のない映像と言葉）の関係、すなわち叫びを乗り越える関係によって、『支離滅裂な映画』の死に至りついたのである。

だがこれはすべて、すでに終わった時代、私にはもう何の関心もない時代に属するものである。

（……）未来の芸術は状況を転覆するものとなるだろう。さもなくば無であるだろう。

映画は現代社会の中心芸術である。映画の発展が、いろいろな新しい機械技術のたゆまぬ集積運動のうちに探求されているという意味においても、その通りである。それゆえ、映画は、逸話表現や形式表現としてのみならず、その物質的下部構造においても、いろいろな発明が無秩序に併置されている（有機的に組み合わせられているのではなく、単に付け加わっている）時代を最もよく表しているものである。ワイド・スクリーン、ステレオ音響の登場、立体映像の試みの後に、米国は、「サーカラム*1」という方式をブリュッセルの博覧会に出展した。『ル・モンド』紙 4月17日付が報じているように、その方式によれば、「観客は、スペクタクルの真ただ中において、スペクタクルを生きている。というのも、スペクタクルの一部になりきっているのだから。車内にいくつもの撮影カメラを搭載した自動車がサンフランシスコの中国人街に飛び込むと、観客は、車の乗客のとっさの反応と興奮を味わえる」。他方、最新の噴霧スプレーの応用によって、においのする映画も実験されており、有無を言わせぬ迫真の効果が期待される。

このように、映画は、現在可能な統一的芸術活動の受動的代用物という様相を呈している。映画は、いまだかつてない力を、参加なきスペクタクルという古くさい反動勢力に与える。くだらないスペクタクルの真ただ中に自由もなくいる「というのも、スペクタクルの一部になりきっているのだから」ということを理由に挙げて、観客は我々の知っている〔現実の〕世界に生きている、などと忌憚なく述べられている。しかし、生は、そんなものではないし、観客はいまだに世界に属していない。とはいえ、その世界を構築しようと望む人々は、映画において、状況の反一構築（奴隷の環境の構築、大聖堂の継承）を構成しようとする傾向と闘いつつも、同時に、それ自体において有効な新しい技術的応用（ステレオ音響、におい）の意義も認識しなければならない。

芸術の現代的徴候の出現が映画において遅れている（例えば、形式に関して破壊的な幾つかの映画作品は、美術や文学においては2, 30年前から受け入れられてきたことに相通ずるものなのに、まだシネ・クラブ*2においてさえ拒絶されている）原因はといえば、あからさまに経済的な軛や理想主義の粉飾をこらした軛（道徳的検閲）だけではない。現代社会における映画芸術の実際的重要性もまた、その原因である。映画のこの重要性は、映画が実行しうる優れた感化手段に依拠しており、それゆえ必然的に、支配階級による映画の管理強化を招くことになる。それゆえ、映画における真に実験的な部門を奪取するために闘わなければならない。

われわれには、映画の利用法として、次の2つが考えられる。まず、プレ・シチュアシオニスト的過渡期における一種のプロパガンダとしての利用。次に、実現された状況を構成する要素としての直接的な利用。

このように、万人の生における映画の今日的重要性の点で、また、映画に革新の道を閉ざしている諸限界の点で、しかしまた、映画が秘める革新の自由が持っているに違いない広大な影響力の点で、映画は、建築に比することができる。環境の心理学的機能に基づいて粗織された建築を見つけ出すことで、絶対酌機能主義の掃き溜めの中に隠された真珠を取り出せるのと同じように、商業映画の進歩的な側面を利用しなければならない。

*1：サーカラマ 原語 Circarama。不詳だが、全周（360度）映画のことか。

*2：シネ・クラブ 古典・前衛作品中心の映画上映会。通例、討論会や講演を伴う。

遊びという概念を取り巻く語彙的混乱と実際の混乱を免れるためには、遊びという概念をその運動の中で考察しなければならない。遊びのもともとの社会的機能は、2世紀にわたってたゆまぬ生産の理想化により否定され続けた後では、もはや退化した遺物という様相を呈しているのみであり、しかもそれに、そのような生産を現在のように組織するための諸要件に直接に起因する、より劣った諸形態が入り交じっている。しかし同時に、遊びの進歩的な諸傾向も、生産力の発展自体との関係において現れている。

遊びの肯定の新段階は、競争の要素いっさいの消滅を特色とするべきだと思われる。現在まで遊戯活動とほとんど不可分である勝ち負けの問題は、財の占有をめぐる諸個人間の緊張を表す他の全ての形態に結びついているように見える。遊びにおいて勝つことが重要だという感情は、実利的な満足感であれ、あるいはたいていの場合のように非実利的な満足感であれ、悪しき社会の悪しき産物である。そのような感情は、当然、あらゆる保守勢力に利用される。保守勢力は、自らが押しつけている単調でむごい生活条件を隠蔽するために、そのような感情を利用するのである。競争＝試合形式のスポーツは、まさに英国においてマニファクチャーの飛躍的發展とともに近代的な形のもとに幅をきかせてきたが、そのようなスポーツによって逸らされる〔＝転用される〕あらゆる要求のことを思い浮かべるだけで十分だろう。群衆は自分をプロの選手やチームと同一視し、選手やチームは、群衆に代わって人生を享受する映画スターや決定を下す政治家と同じ神話的役割を担っているわけであるが、ただ単にそれだけではない。さらに、それらの試合の相次ぐ得点結果が、試合に注目する人々をわくわくさせるのである。遊び＝ゲームへの直接の参加は、たとえそれがある程度の知的訓練を要するゲームの中から選ばれたものであっても、いざ、決められた規則の枠内で、競争それ自体のために競争＝試合を受けて立つとなると、これまた、あまり面白いものではない。遊びの概念が含まれる現代的侮蔑の発露として、タルタコウエルの『チェスのバイブル』の冒頭の思い上がった確言ほどのものはない。いわく、「チェス・ゲームは、世界中で、遊びの王様として認められています」。

競争という要素は、真に集団的な遊戯観のために、消滅するべきである。すなわち、精選された遊戯環境の共同創造、という遊戯観である。乗り越えるべき主要な区別とは、遊びと日常生活の間に立てられている区別、つまり、遊びを孤立した一時的な例外とみなすことである。ヨハン・ホイジンガ*1は次のように書いている。「遊びは、世界の不完全さと生活の混乱の中に、限られた一時的な完全さを実現する」。日常生活は、これまで生活の糧の問題によって条件づけられてきたが、合理的に支配されうるだろう——その可能性は、現代の全ての紛争の中心にある。そして、遊びは、限られた遊戯時間・空間との関係を根本的に断ち切って、生活全体を覆い尽くすべきである。完全さは、少なくともそれが生活に対立する停滞した構築を意味する限りにおいては、その目的になりえない。しかし、生活の美しき混乱を完全さの域にまで押し進めるようとすることはできる。かつてエウヘニオ・ドールス*2は、バロックを、最終的に限定して、「歴史の欠如」と形容したが、バロックおよび組織されたバロックの彼方は、余暇の来たるべき天下のうちに大きな位置を占めるであろう。

このような歴史的展望において、遊び——遊びの新機軸の永続的な実験——は、けっして、倫理学の外、生の意味の問題の外に現れることはない。遊びに認めうる唯一の成功とは、遊びの環境の直接の成功であり、また、遊びの力の恒常的な増大である。遊びは、現在、凋落期の残滓と共存しているせいで、競争的な面を完全に免れることはできないが、たとえそうであるにしても、遊びの目的は、少なくとも、じかに生きるために好都合な条件をもたらすことでなければならない。その意味において、遊びは、さらに闘争であり、表現でもある。すなわち、欲望に相応する生活のための闘争であり、そのような生活の具体的な表現なのである。遊びは、仕事の過酷な現実と比べて副次的な存在であることから、仮構（フィクション）であると感じられている。しかしながら、シチュアシオニストの仕事は、まさに、来たるべき遊びの可能性を準備することである。それゆえ、人々は、シチュアシオニスト・インターナショナルに壮大な遊び＝大ばくちの側面の幾つかを見てとる限りにおいては、シチュアシオニスト・インターナショナルを無視したくなるかもしれない。「しかしながら」とホイジンガは言う、「既に述べたように、『ただ遊ぶだけ』という観念は、この上なく厳粛にその『ただ遊ぶだけ』を実行する可能性を、まったく排除しないのである……」

*1：ヨハン・ホイジンガ（1872-1945年） オランダの文化史家。代表的な著作に『中世の秋』（1919年）、『ホモ・ルーデンス』（1938年）がある。後者は、1950年代初頭にフランス語に訳されている。

*2：エウヘニオ・ドールス（1882-1954年） スペインの哲学者、美術批評家。著書に『バロック論』など。なお、日本での姓の表記としては、ドールスの他に、オルス、デオルスなどとも記される。

「状況の構築は、スペクタクル概念の現代的展開を越えたところに開始される。非一介入というスペクタクルの原理そのものが、古い世界の疎外といかに深く結び付いているかは容易に見てとれる。それとは逆に、文化における革命的探求のなかで最も価値あるものが、スペクタクルの観客のヒーローへの心理的同一化を破壊し、その観客を積極的な行動に引きずり込むようにどれほど努めてきたかもよく知られている。（……）状況とは、したがって、それを構築する者たちによって生きられるために作られるものである。そこでは、受動的とは言わないまでも少なくとも単に端役的なだけの『公衆』の役割は、常に減少することになる一方で、もはや役者ではなく、言葉の新しい意味において『生きる者』と呼ばれる者の関与するところが増大する。」 『状況の構築に関する報告』

「構築された状況」についてわれわれが持つ理解は、環境の空間的・時間的拡がりや勢いがいかに大きかろうと、環境の構築に貢献する芸術的手段を統一的に利用することだけに限られるものではない。状況とは、同時に、時間のなかでの1つのまとまった行動でもある。それは、ある瞬間の生の舞台装置（デコール）のなかに含まれた一連の行為から成る。これらの行為は生の舞台装置とその行為そのものから生み出されたものである。そして、それらの行為がまた別の形の生の舞台装置と別の行為とを産み出すのである。これらの力をいかにして方向付けることはできるだろうか。機械的な挑発によって様々な驚きを産み出すことを期待するような環境実験の試みだけで満足するわけにはゆかない。シチュアシオニストの活動の真に実験的な方向は、程度の差こそあれははっきりと世に認められた種々の欲望から出発して、それらの欲望に好都合な当面の活動の場を作り出すことにある。それを作り出すことではじめて、原初の欲望が明らかになり、まさにシチュアシオニスト的構築によって構成された新しい現実物質的に根づいた新しい欲望が無秩序に出現するようになるのである。

それゆえ、シチュアシオニスト的目的にかなう一種の精神分析を考察せねばならない。この冒険に参加する各々の者は、環境に対する正確な欲望を、まさにそれを実現するために見つけ出さねばならないのであって、それはフロイト思想から生れた諸流派が追求している目的とは逆のものである。だれもが自分の愛するもの、自分を魅き付けるものを探さねばならない（そしてそこでもまた、現代のエクリチュールのある種の試み——例えばレリス*1——とは逆に、われわれにとって重要なことは、われわれの精神の個々の構造でもその形成過程を説明することでもなく、構築された状況のなかでそれを適用する可能性である）。この方法を用いて、建設すべき状況を構成する様々な要素、またそれらの要素の運動のための様々な計画を調査することができる。そうした探求は、状況の構築という方向で実践的に働いている諸個人にとってしか意味を持たない。彼らはみなその時、自発的にであれ、意識的かつ組織的なやり方でであれ、プレ・シチュアシオニストである。すなわち、1つの同じ文化欠如状態を通して、また自分たちに直接先行する実験的感性を同じように表現することを通して、この構築の客観的必要性を感じ取ってきた個人なのである。彼らは、1つの専門によって、また彼らの専門分野での1つの同じ歴史的・前衛への帰属

によって、互いに結び付けられている。それゆえおそらく、すべての者のうちに、シチュアシオニスト的欲望の共通のテーマを数多く見出すことができる。この欲望は、現実の活動局面に移るやいなや、常にそれまで以上に多様なものとなるだろう。

構築された状況は、その準備段階においても実際の展開においても、必然的に集団的なものとなる。しかしながら、少なくとも初期の実験の時期には、ある与えられた状況で個人がある種のヘゲモニーを取らねばならないこともあるように思われる。つまり、その状況の演出者となるのである。状況の計画——それを探求する者たちのグループによって研究された——を立て、それを、例えば何人かでの一夜の感動的な集まりと組み合わせて行うようになると、おそらく、指揮者または演出者と、状況を生きる直接的な行為者と、受動的な観客とを区別しなければならないだろう。指揮者は、生の舞台装置を構築するためにあらかじめ必要な要素を調整し、さらに、出来事のなかへのある種の介入を予見することも引き受ける（この後者のプロセスは、他の者の介入のプランをあまりよく知らない複数の責任者の間で分担されることもある）。状況を生きる直接の行為者は、集団での計画の創造に参加し、環境の実際の製作のために働いた者である。観客とは構築の仕事に無縁な者だが、その彼らを行動に走らせることが望まれる。

当然、指揮者と状況を「生きる者」との関係は、それぞれの専門家どうしとの関係となることはない。シチュアシオニストのグループ全体と孤立した実験の責任者との従属関係は単に一時的なものにすぎない。こうした展望、あるいはそのための仮の呼び方は、劇場の延長に関することだと思わせるようであってはならない。ピランデッロ*2やブレヒトは、演劇的スペクタクルの破壊と、それを超えたいくつかの主張を示して見せてくれた。状況の構築は、現実の生の構築が常にますます宗教に取って代わってきたという意味においてのみ、演劇に取って代わるだろうと言うことができる。明らかに、われわれが取って代わり成し遂げようとしている主たる領域は、詩の領域である。それは、現代の前衛のなかで自らを焼き尽くし、完全に消滅してしまったものである。

個人の実際の成就是、シチュアシオニストが発見した芸術的実験の場合と同様、必然的に世界を集団的に支配することを通して行われる。この支配以前には、まだ個人というものは存在せず、他人から無秩序に与えられたモノに取り憑いた影しか存在しない。われわれは、偶然の状況において、偶然に行き交う1人1人に分離された個人に出会う。彼らの多岐多様な情動は中和され、退屈でびくともしない環境を維持している。われわれは、高等な遊びの狼煙をあちこちで上げることによって、この状態を粉碎するだろう。

今日、技術の進歩の不可欠な表現である機能主義は遊びを完全に排除しようやっきになり、「インダストリアル・デザイン」の信奉者たちは、人々がますます遊びに向かう傾向にあることで、自分たちの活動が悪化していると嘆いている。インダストリアル商業はこの傾向を浅ましいやり方で利用し、この上なく有益な成果もたちまちなきものとしてしまうため、遊びへの傾向は新たな姿を取ることを余儀なくされる。われわれは、冷蔵庫の形を芸術的な仕方で次々とリニューアルすることを薦めてはならないと考える。だが、説教好きな機能主義は、この点に関して何も行えない。唯一の進歩的解決策は、それとは別の場で、さらに大規模に、遊びへの傾向を解放することである。それ以前には、インダストリアル・デザインの純粋な理論がもつ素朴

な憤りは、例えば、個人の自動車は主として愚かな遊びであり、交通手段であるのは不随的なことにすぎないという深い事実を妨げることはできないだろう。常に反動の政治と結び付き、幼児段階に回帰するあらゆる退行的な形態の遊びに反して、革命的遊びの実験的形態を支持しなければならぬのである。

*1：ミシェル・レリス（1901-90年） フランスの作家・民族学者。若くしてシュルレアリスムに参加した後、民族学研究を続けながら、『成熟の年齢』（1939年）など一連の自伝的作品で注目を集める。ここでは、後に『ゲームの規則』全4巻を構成する一連の著作、『ピフユール』（1948年）、『フルビ』（1955年）のなかで、言語を通して個人の生の深層を探る試みを続けるレリスの文学が示唆されている。

*2：ルイジ・ピランデッロ（1867-1936年）イタリアの劇作家。『作者を捜す6人の登場人物』（1921年）によって、従来の劇の制度に変革をもたらしたことで有名。1934年、ノーベル文学賞。

- 構築された状況 統一的な環境と出来事の成り行きを集团的に組織することによって具体的かつ意図的に構築された生の瞬間。
- シチュアシオニスト（状況派・状況派の） 状況の構築の理論もしくはその実践活動に関すること。状況を構築することに努める者。シチュアシオニスト・インタナショナルのメンバー。
- シチュアシオニズム（状況主義） 上の用語から派生して誤って作られた無意味な語。シチュアシオニズムなど存在しない。そんなものは、既存の事実に対する解釈の教義を意味するにすぎないだろう。シチュアシオニズムという概念はあきらかに反シチュアシオニストらの着想した概念である。
- 心理地理学 意識的に整備された環境かそうでないかにかかわらず、地理的環境が諸個人の情動的な行動様式に対して直接働きかけてくる、その正確な効果を研究すること。

- 心理地理学的 心理地理学に関係するもの。情動に対する地理的環境の直接的作用を示すもの。
- 心理地理学者 心理地理学的現実を探求し、それを伝える者。
- 漂流 都市生活の諸条件に結び付いた実験的な行動様式、すなわち、変化に富んだ環境のなかを素早く通過する技術。より特殊には、この実験を連続的に行う期間を指すこともある。
- 統一的都市計画 様々な実験的行動とダイナミックに結び付いた環境の完全な構築に与する芸術および技術の全体の利用の理論。
- 転用 前もって作られた美的要素の転用、という言い方を省略して用いられる。現在のまたは過去の芸術生産物を環境のより高度の構築に統合すること。この意味では、シチュアシオニストの絵画やシチュアシオニストの音楽というものはありえず、ただこれらの手段のシチュアシオニスト的使用があるだけだ。より原始的な意味では、昔の文化の諸領域の内部での転用は、プロパガンダの方法であり、それはこれらの芸術領域の衰弱と重要性の喪失のあかしである。
- 文化 それぞれの歴史的瞬間において、日常生活を組織する様々な可能性を反映し、予示するもの。美的なもの、感情、風習の複合体。それによって、共同社会は、その経済が自らに客観的に与えている生活に対応する。（われわれはこの用語を、諸価値の創造という展望においてのみ定義するのであって、それらの価値の教育という展望において定義するのではない。）
- 解体 より優れた文化の構築を可能にすると同時にそれを要求しもするより優れた自然支配の手段の出現の結果、伝統的な文化形態が自ら解体するプロセス。古い上部構造の実際の破壊という、解体の積極的段階——それは1930年ごろに終る——と、それ以来ずっと優勢で

ある反復の段階とを区別せねばならない。解体から新しい構築への移行の遅れは、資本主義の革命的清算の遅れと結び付いている。

陛下、私は別の国から来た者であります。

おれたちは街で退屈している。太陽神殿はもう存在しない。通りすがりの女たちの股の間に、ダダイストならモンキーレンチを、シュルレアリストならクリスタルグラスを見つけたいと思ったことだろう。もうそんなものは無くなった。おれたちは、人々の顔の上にどんな約束でも読み取れる。それは最後の形態学。貼り紙の詩は20年来続いてきた。おれたちは街で退屈している。道路の看板にまだまだ神秘を見つけるためには、くたばるまで疲れ果てねばならない。それが最後のユーモアで、それが最後の詩なのだ。

族長浴場

肉切り機械

ノートルダム動物園

スポーツ薬局

殉教者食品店

半透明コンクリート

黄金の手製材店

機能回復 [=機能主義回収]センター

救急車サンタンヌ*1号

5番街カフェ

ポランティア延長街（リュ・デ・ヴォロンテール・プロロンジェ）

庭の家族ペンション

外国人ホテル（オテル・デ・ゼトランジェ）

野生通り（リュ・ソヴァージュ）

それから、少女街（リュ・デ・フィエット）のプールに、出会い通り（リュ・デュ・ランデ・ヴ）のかどの警察署。金銀細工師河岸（ケ・デ・ゾルフェヴル）の外科医学クリニックと無料就職センター。太陽通り（リュ・デュ・ソレーユ）の造花。城の地下倉ホテルに太洋バー、往復運動（ヴァ・エ・ヴィアン）カフェ。時代ホテル（オテル・ドゥ・レポック）。

夏の終わりの夜に浮かぶ、精神病者の恩人フィリップ・ピネル*2博士の奇妙な銅像。パリを探険せよ。

そして忘れられた女よ、ありとあらゆる悲嘆の声を上げる地球儀によって荒らされた思い出を持つ女よ、音楽も地理もない八里橋（パリカオ）*3の赤い地下倉に紛れ込んだ女よ、おまえはもう、植物の根が子供に思いをさせ、ワインがカレンダーのおとぎ話になって終わる大農場（アシエンダ）に出かけることはない。もう、ゲームは終わった。おまえが大農場を見ることもないだ

ろう。そんなものは存在しないのだ。

大農場を建設せねばならない。

どんな都市でも地質学的であり、それぞれの都市の伝説の威光を鎧のように身に付けた亡霊に出会うことなく、その中を3歩たりとも歩くことはできない。われわれは閉ざされた風景の中で進化し、その風景の目印はわれわれをたえず過去に引き戻す。常に形を変えるいくつかのアングル、果てしなく広がるいくつかのパースペクティブのおかげで、われわれは空間の本来の把握の仕方を垣間見ることができるが、しかしそのヴィジョンも断片的なものにとどまる。フォルクローレのおとぎ話や、シュルレアリストの著作に書かれた魔法の場所に、それを探し求めねばならない。城、終わりのない壁、忘れられた小さなバー、マンモスの洞穴、カジノのウィンドウに。

これらの滅びたイメージにはわずかな触媒の力が保存されている。だが、そうしたイメージも、蘇らせ、新しい意味を与えることなしには、象徴的都市計画のなかで使うことはほとんど不可能だ。古いキー・イメージに取り愚かれたわれわれの精神生活は、洗練された機械よりずっと遅れている。現代の科学を新しい神話のなかに統合しようとする様々な試みは、いまだ不十分なままである。それ以来、抽象があらゆる芸術を、とりわけ今日の建築を覆い尽した。逸話も生气も欠いた純粹状態の造形的事象が、人の眼を休め、凍り付かせている。他の断片的な美は別の場所にあり、約束された総合の大地はますます遠ざかるばかりだ。誰もが、感情のなかに生きている過去と今からすでに死んでいる未来の間でためらっている。

われわれは、退屈な余暇に行き着く機械的な文明と冷たい建築を長引かせはしない。

われわれは、常に変化する新たな舞台装置を発明することを提案しているのだ。(中略)

暗闇は照明の前に姿を隠し、季節はエアコンの効いた施設によって消されてしまった。夜も夏も魅力を失い、夜明けは消滅してしまった。都市の人間は宇宙的現実から遠ざかることばかり考え、それ以上のことは夢みもしない。理由は明らかだ。夢は現実のなかに出発点を持ち、現実のなかで実現するのである。

最近の技術は、宇宙的現実の不快さをすべて取り除きつつ、個人と宇宙的現実との恒常的な接触を可能にした。ガラスの天井は、星も雨も透かして見せる。移動式の家は太陽とともに回る。レールの付いたその壁のおかげで、植物が生活のなかに入ってくる。家そのものもレールに乗って、朝には海まで進んで行き、夜になると森に帰ることもできるのだ。

建築は空間と時間を分節し、現実を変形し、夢を見させるための最も単純な方法だ。とはいえ、束の間的美の表現である造形的な文節と変形だけが問題なのではない。人に影響を及ぼす変化が問題であり、この変化は人間の様々な欲望とそれらの欲望の実現における進歩とが描く永久曲線のなか書き込まれている。

明日の建築は、それゆえ、時間と空間の今日の理解の仕方を変更する方法となるだろう。それは、認識の方法にして行動の手段となる。

建築物の集合体も変更しうる。その外観もそこに住む者の意志によって部分的に、あるいは完全に变化させうるだろう。(中略)

過去の共同社会は、大衆に絶対的真理と議論の余地のない神話の例を提供していた。現代精神に相対性の概念が導入されたことによって、次の文明が実験的側面——実験的という語に満足するわけではないが——を持つことを予感することが可能になった。より柔軟な、「楽しい」言い方をしよう。この移動式の文明に基づいた建築は——少なくとも最初の段階では——、生を变化させるいくつかの方法を実験する手段であり、伝説的でしかありえない1つの総合をめざす。

心の病が惑星全体に行き渡ってしまった。凡庸化という病だ。誰もが製品と快適な生活のとりこになっている。下水設備、エレベーター、浴室、洗濯機といった具合に。

こうした現状は貧困への抗議から生まれたものだが、そのはるかな目的——物質的心配からの人間の解放——を越えて、今のところ強迫的なイメージとなってしまった。どの国の若者も、愛とオートマチックのダストシュートを秤にかけ、ダストシュートの方を選ぶ。精神を完全に一変しなければならない。忘れられた欲望を明るみに出し、まったく新たな欲望を作り出すことによって。そして、これらの欲望を讃える徹底的なプロパガンダを行うことによって。

われわれはすでに、次の文明が築かれる基礎となる欲望の1つとして、状況を構築する必要を指摘した。この絶対的創造の必要は、これまで常に、建築、つまり時間と空間との戯れの必要と一体のものとなっていたのだ。(中略)

建築の注目すべき先駆者の1人は、いぜんとしてキリコ*4であろう。彼は時間と空間を通して不在と存在の問題に立ち向かったのである。

よく知られていることだが、最初に訪れた時には意識にはっきりととどめられなかった事物が、次に訪れた時にその不在によっていわく言い難い印象を喚起することがある。時間のなかで再構築されることによって、事物の不在は感覚しうる存在に変化するのである。むしろこう言ったほうがよい——印象の質は一般的には漠然としたものではあるが、取り除かれた事物がどんな性質のものか、また訪問者がそれにどれほどの重要性を与えているかに従って、穏やかな喜びから激しい不安まで多岐多様なものとなる(まさにこの場合、気分の媒体が記憶であることは、われわれには重要ではない。私がこの例を選んだのは便宜上のことでしかない)。

キリコの絵画(アーケードの時代)において、空虚な空間は満ち足りた時間を作り出している。このような建築家にわれわれが残す未来がどのようなものか、群衆に対する彼らの影響がどのようなものかを想像するのは容易い。こうしたモデルをいわゆる博物館に追いやってきた世紀は、今日、軽蔑するほかない。

来るべき構築物の理論的基礎となるべき時間と空間のこの新しい見方は、今現在、整っているわけではない。その目的に合った都市で行動様式の実験を行わないうちは、それはこれからも決して完全に整えられることはないだろう。そうした都市には、最低限の快適さと、安全に不可欠な施設のほかに、喚起の力と影響力に富む建物、過去、現在、未来の欲望と力と出来事とを表す象徴的な建造物が体系的に集められるだろう。昔の宗教システム、古いおとぎ話、そしてとりわけ精神分析を、建築の利益のために合理的に拡張することは、情熱を抱く理由が消え去りゆくに

つれて、日々、急を要するものになってきているのである。

いわば、誰もが自分個人の「カテドラル」に住むことになるのだ。ドラッグを使うよりもずっとすばらしい夢を見せてくれる部屋や、ただひたすら愛を育むだけの家ができるだろう。旅人を惹きつけてやまない家も建つだろう……

この計画を、だまし絵の効果を持った中国庭園や日本庭園——それらの庭園は中で完全な生活をするようにできていないということだけは別にして——や、パリの植物園にあるばかりの迷路——その入口には、ふざけたことに、「アリアドネー*5は失業中につき、迷路での遊びは禁止されています」と書いてある——になぞらえることもできる。

この都市は、城や洞窟、湖などを恣意的に集めた姿とみなすこともできるかもしれない。認識の一手段と考えられた都市計画のバロック的段階かもしれない。だが、そうした理論局面はすでに乗り越えられた。われわれは、現代では、中世の城の姿をまったくとどめないにもかかわらず、〈城〉というものの詩的な力を保持し、増大させるようなビルを建築できる（最低限の建物の線の保存、他のいくつかの線の移動、出入り口の設定、地形上の状況、などによって）ということを知っている。この都市の各地区（カルティエ）は、われわれが日常生活で偶然に出会う様々に類別された感覚と対応しうる。

〈風変わり地区〉——特に住居専用の〈幸福地区〉——〈高貴で悲劇的な地区〉（行儀のよい子供たちのための）——〈歴史地区〉（博物館、学校）——〈有用地区〉（病院、道具店）——〈不吉地区〉などである。それらに加えて、アストロレールが1つある。それは、星のリズムとの関係に従ってあらゆる植物種を集めた惑星規模の植物園で、天文学者トーマスが、ウィーンのローア・バークという場所に建設することを提案しているものに比肩する。これは、住民に宇宙の意識を与えるために不可欠なものである。ほかにもおそらく、〈死の地区〉もできるだろう。そこで死ぬためにではなく、静かに生きるために。ここで私が考えているのは、メキシコや、無垢のなかの残酷さの原理である。それは、日々、私には高価なものになってゆく。

例えば〈不吉地区〉はうまい具合に、かつてどの国の国民もがそれぞれの首都に持っていたあれらの穴、地獄の口の代わりになるだろう。それらは生の邪悪な力を象徴していたのだ。〈不吉地区〉では、罨や落とし穴、坑道などの現実の危険を隠す必要はまったくない。そこへの進入路は錯綜し、町には恐ろしい装飾がなされ（甲高い笛の音、警報ベル、不規則な間隔で鳴る周期的サイレン、怪物の彫像、オートモビールと呼ばれるエンジン付きの移動機械）、夜の照明はほとんどなく、昼は反射現象の濫用によってまぶしいほどの光りに満ちている。街の中心には、「恐怖の移動機停止場」がある。市場に1つの製品が溢れると、その製品は安くなる。子供も大人も不吉な地区の探検によって、生の不安な表出を恐れるのではなく、それを楽しむことを学ぶだろう。

住民の主要な活動は連続的な漂流となるだろう。刻一刻変化する風景が、日常からの完全な脱出の原因となる。（中略）

やがて行動の摩滅というものが避けられなくなるが、その時には、この漂流は体験の領域を部分的に去り、表象の領域に入るだろう。（中略）

経済的理由からの反論は、まったくもって議論に耐えない。ある場所が自由な遊びに充てられ

れば充てられるほど、ますますその場所は人の行動様式に影響し、その魅力はいっそう大きくなるのである。モナコ、ラスヴェガスの巨大な威光はそれを証明している。自由恋愛のカリカチュア、レノ*6もそうだ。しかし、これらの都市は、単なる金の遊びの問題でしかない。われわれのこの最初の実験都市は、観光を容認し管理することでかなりの収入を得ることになるかもしれない。アヴァンギャルドの次の活動と生産は、おのずとそこに集中されるだろう。数年の間に、この都市は全世界の知識人の首都となり、あらゆるところでそのようなものとして認められるであろう。

ジル・イヴァン

レトリスト・インターナショナルは1953年10月、都市計画に関するジル・イヴァンのこの報告を採用した。それは、実験的アヴァンギャルドによって当時取られた新しい方向の決定的要因となったものである。ここに発表したテキストはL Iのアルシーヴに保存され、その後、シチュアシオニスト・アルシーヴの文書番号103および108になった2つの連続した草稿から作成されたものであり、わずかな書式の違いを伴う。

*1：サンタンヌ パリ14区にある有名な精神病院の名

*2：フィリップ・ピネル（1745-1826年） フランスの医者。ピセートル収容院、ラ・サルペトリエール収容院での精神病患者の治療活動を通して、近代的精神医学を確立した。精神病患者を鉄鎖から開放したとして、ラ・サルペトリエール正門広場にはデュラン作の彼の立像が据えられている。

*3：ハ里橋（パリカオ） 中国、北京近郊の村。太平天国の乱の折、イギリス・フランス連合軍が攻撃したことで有名。

*4：ジョルジオ・デ・キリコ（1888?-1976年） ギリシャのテッサリア地方に生まれ、アテネの工芸研究所、ミュンヘンの美術学校に学び、ニーチェの影響を受ける。1911年から数年パリに行き、アポリネールや、ピカソ、ブラックらキュビズムの画家に惹かれる。イタリアに帰国後、メタフィジカルな絵画を唱えるカルロ・カッラらとともに不安定な遠近法を用いた神秘的・幻想的絵画を描く。1925年、第1回シュルレアリスム展に参加し、シュルレアリストらに接近するが、1933年以降は、現代絵画を否定して、古典的絵画に回帰する

*5：アリアドネー ギリシャ神話で、ミノスの娘。怪物退治に行ったテセウスに糸を与えて、迷宮から脱出する道を教えた。

*6：レノ アメリカ合衆国ネヴァダ州の商業都市。結婚と離婚の手続きの迅速さを呼び物にしている。

1. 美学の伝統的目的は、剥奪と不在の状態において、芸術的媒介を通して、外観の混乱を免れたある種の過去の生の要素を感じ取らせることにある。外観とは、その場合、時間の支配をこうむるもののことである。美学的成功の度合いは、それゆえ、時間的持続と不可分で永遠を気取ることすらある美によって測られる。シチュアシオニストの目的は、意図的に整備された滅びやすい瞬間を変革することによって、生の情動的豊かさにただちに参画することにある。この瞬間が成功するとしても、それは、それらの瞬間の一時的な効果でしかありえない。シチュアシオニストは、全体性の観点から見た文化的活動を、日常生活の実験的構築の方法と考える。この日常生活なるものは、余暇の拡大と労働の分割〔分業〕の消滅（まず手始めに、芸術的労働の分割から）によって常に発展しうるものである。
2. 芸術は諸感覚に関する関係であることをやめて、より高次の感覚の直接的組織化となることができる。われわれ自身を産み出すことが肝心であり、われわれを服従させるモノを産み出すことが問題なのではない。
3. マスコロ*1（『共産主義』）が、プロレタリア独裁体制による労働時間の短縮は「その革命の正当性について、それが与える最も確かな保証である」と言っているのは正しい。事実、「人間が1個の商品であり、彼がモノとして扱われ、人間どうしの関係総体がモノとモノとの関係であるとすれば、それは、人間から彼の時間を買うことができるからにほかならない」。しかしながら、マスコロが「自由に使われる人間の時間は」常にうまく使われ、「時間の売買だけが悪なのである」と結論づける時、彼はあまりに性急である。日常生活の構築のための近代的道具の所有なしには、時間の使用における自由は存在しない。そのような道具の利用こそが、ユートピア的革命芸術から実験的革命芸術への飛躍の印となるだろう。
4. シチュアシオニストの国際的結社は、文化の先進部門の労働者たちの団体とも考えられる。あるいは、より正確には、社会的諸条件によって今のところ妨げられている労働への権利を要求する者たちすべての団体である。したがって、それは、文化における職業的革命家たちの組織化の試みなのである。
5. われわれは、われわれの時代に蓄積された物質的力を現実に支配することから実際には切り離されている。共産主義革命は実現されていないのに、われわれはまだ古びた文化的上部構造の解体の枠内にいる。アンリ・ルフェーヴル*2は、この矛盾が進歩的個人と世界とのあいだのすぐれて現代的な不和の中心にあることを正しく見抜き、この不和に基礎を置く文化的傾向を革命的ロマン主義的と呼んでいる。ルフェーヴルの考えの不十分点は、不和の単純な表出を、文化における革命的行動の十分な基準としているところにある。ルフェーヴルは、解体の枠のなかではどのような形式をとっても表現しうる可能-不可能の（まだあまりにかすかな）意識という、ただひとつの内容で満足することによって、深い文化的変容の実験のすべてをあらかじめ断念しているのである。
6. 古い既成秩序を、そのあらゆる側面において乗り越えようと思う者は、たとえ文化の圏内においてであっても、現在の無秩序にわが身を結び付けるわけにはゆかない。文化におい

ても、もはや何も待ち受けることなしに、未来の揺れ動く秩序の具体的な出現のために闘わねばならない。われわれの間に既に存在しているその秩序の可能性こそが、既に知られている文化の形を取ったあらゆる表現の価値をなきものにするのである。あらゆる形態の疑似的コミュニケーションをその完璧な破壊にまで導かねばならない。いつの日か、直接的で現実的なコミュニケーション（高次の文化的手段の利用についてのわれわれの仮説では、それは構築された状況となる）に到達するために。勝利は、無秩序を愛することなくそれを作り出すことを知った者の手にあるだろう。

7. 解体の世界においてわれわれは、われわれの力を試みることができるだけで、それを利用することはできない。世界とわれわれとの不和を乗り越える実践的任務、すなわち何らかの高次のものを構築することによって解体を乗り越える実践的任務は、ロマン主義的ではない。われわれが失敗するまさにそのとき、ルフェーヴルが言う意味において、われわれは「革命的ロマン主義者」となるだろう。

G=E・ドゥポール*3

*1：ディオニス・マスコロ（生没年不詳） 戦後共産党を除名され、『アルギュマン』誌に拠った共産主義者・哲学者。1958年から60年まで同誌編集委員をしながら非共産党の左翼を糾合する『7月14日』などの活動を行った。著書『共産主義』はガリマル社から1953年に刊行。戦争末期から戦後の一時期、作家のマルグリット・デュラスと暮らして子供をもうけ、その後、アウシュビッツから生還してきたデュラスの元の夫ロベール・アンテルムの3人で同居していたことが原因で共産党を除名されたことでも知られる。

*2：アンリ・ルフェーヴル（1901-1991年） フランスの社会学者。1930年代にマルクス主義に接近し、58年にフランス共産党を除名されるまで、党の理論家の1人として活動。高度資本主義社会の日常生活を社会学的に研究し、正統派マルクス主義の変更を迫る大著『日常生活批判』（第1部、1958、第2部、61年。その『序説』は1947年に発表）や、スターリン主義を告発した『マルクス主義の当面の諸問題』（58年）により、左翼・知識人から芸術家までに大きな影響を与えた。

*3：G=E・ドゥポール（1931-） フランスのシチュアシオニスト。パリに生まれ、1950年代初頭にレトリズム運動に参加、レトリズムの主唱者イジドール・イズーの神秘主義化に反対してレトリスト左派を結集した「レトリスト・インターナショナル」を創設、「転用」、「漂流」、「心理地理学」、「新しい都市計画」などの芸術批判・日常生活批判を軸としたアヴァンギャルド芸術運動を展開。1956年に「シチュアシオニスト・インターナショナル」（S I）を創設し、1972年にS Iを解散するまで、一貫してその中心メンバーとして活動。著書に『スペクタクルの社会』（1967年、邦訳、1993年、平凡社）、『回想録』（59年）、『映画に反して』（64年）、『映画全作品集』（78年）、『「スペクタクルの社会」に関する注釈』（88年）、『称賛辞』（89年）、『イン・ジルム・イムス・ノクテ・エト・コンスミムール・イグニ（われわれは夜に俳搦しよう、そして、火で焼き尽くされんことを）』（90年）、『この悪しき評判……』（93年）など。映画作品に『サドのための叫び』（52年）、『比較的短い時間単位内の数人の人物の通過について』（59年）、『分離の批判』（61年）、『スペクタクルの社会』（73年）、『イン・ジルム・イムス・ノクテ・エト・コンスミムール・イグニ』（78年）など

訳者解題

元コブラの主唱者で、その後、「イマジニスト・バウハウスのための国際運動」(MIBI)を組織したアスガー・ヨルンのこの論文は、ここに初めて発表された後、1954年から58年にかけて書かれた他の9編の論文——「イメージと形態」、「機能主義に反対して」、「形態と構造」、「悲惨と驚異」、「構造と変化」、「魅力とメカニック」、「運動と形態」、「形態と意味作用」、「脱出口」——とともに、インターナショナル・シチュアシオニストの編集・発行による『形態(フォルム)のために』のなかに再録された。

コブラの時代から、古今東西の美術はもちろん、ヨーロッパの民衆芸術や北欧の人類学・民族学から言語学や哲学まで、広い領域にわたる膨大な著作を残しているこのルネッサンス的巨人は、これらの論文のなかで、人間の活動のなフォルムかに常に現れてきた「形態」というものを、人類学や言語学(意味論や記号論)、美術史、建築史、認識論、資本論、精神分析などを駆使して、様々な側面から考察している。ヨルンにとっての「形態」とは、主体と客体との相互関係のなかでとらえられたものであり、フォルマリズムや機能主義の固定した「形態」とは異なる。それは、「運動への抵抗」として事物の運動のなかに一瞬のあいだ形作られるものであり、運動によって初めて気づくことのできるものだとされる。「形態とは、観察の運動を凌駕する速度のことである」と定義されている(「形態と意味作用」)。

また、これらの論文は、ヨルンがコブラの活動を終えた後に、さらに実験的な芸術運動として展開したMIBIの理念と、そこから「シチュアシオニスト・インターナショナル」へと変貌を遂げるにいたった思想的経緯を知るうえでも興味深い。簡単に言うなら、MIBIによってヨルンが当初めざしていたものは、マックス・ビルらの機能主義的バウハウス復活の企てに反対して、形態の自由な実験と集団での芸術活動を通じた社会変革の試み(集団製作、環境実験など)であった。それゆえ、『形態のために』の論文は、過去の芸術運動(ウィリアム・モリスやラスキンからバウハウスにいたる工芸運動の流れ、ダダやシュルレアリスムなどのアヴァンギャルド芸術運動など)や、同時代の現代芸術(アンフォルメルや抽象表現主義)を総括すると同時に、都市計画やインダストリアル・デザイン、広告産業などによる前衛美術の囲い込みにきわめて強い危機感を表明している。ヨルンがMIBIによって行おうとした社会的な芸術運動は、現実の社会が芸術を社会的なものにする時に無力なものになりかねない。芸術の領域に関わってより攻勢的に既存社会を転覆するためには、「イマジニスト・バウハウス」という家から外に出て、都市の中での「状況の構築」を掲げる「シチュアシオニスト」へと移行せざるを得なかったのである。

現在まで、ほとんど誰ひとり、オートメーションについての思考をその最終的帰結までつきつめた者がいないというのはかなり驚くべきことである。まさにそれがゆえに、真の展望が見いだせないのである。むしろ、技術者も学者も社会学者も、オートメーションを社会のなかにこっそりと滑り込ませているような印象を受ける。しかし、オートメーションは今や、生産のみならず労働時間に対する余暇の優位までも社会主義的に支配する問題の核心をしめる。まさにオートメーションの問題は、積極的可能性と消極的可能性のどちらもを、最大限に抱え込んでいるのである。

社会主義の目的は豊かさである。最大多数の最大幸福という考えには、統計学的に、予期せぬものの出現を最低限に切り縮めることが前提とされている。幸福の数の増大はそれぞれの価値を切り縮めるのである。こうしてあらゆる人間的幸福の価値をいわば完璧な中和状態にまで低下させることが、社会主義の純粋に科学的な発展の避けがたい帰結となるだろう。多くの知識人が機械的再生産というこの考えを乗り越えることができないばかりか、無色で左右対称の未来社会に人間を適応させる準備に励んでいるのは残念なことだ。その結果、独自性の探求に専心する芸術家たちは、ますます多く、社会主義に敵意を抱き、それに背を向ける。逆に、社会主義を信奉する政治家たちは、芸術の力と独自性の現れにはことごとく不信感を持ち続けるのである。

これらの芸術家も政治家も、それぞれに自らの順応主義的立場から一步も出ずに、オートメーションへのある種の不機嫌を表している。オートメーションというものは、彼らの経済と文化への理解を根底から問い直しかねないからだ。「前衛（アヴァンギャルド）」と呼ばれる潮流はすべて、オートメーションを悲観的に見ている。あるいは、せいぜいのところ、オートメーションの開始によって、その到来の近いことが突如として明らかになった未来の積極的な側面を過小評価している。一方で、反動的な勢力はばかばかしいまでの楽観論をひけらかしている。

1つ意味深い逸話がある。去年、雑誌『第4インターナショナル』のなかで、マルクス主義者の活動家リヴィオ・マイタンが報告していたことだが、イタリアのある神父がかつて、自由時間の増大により日曜ミサをもう1日行う必要が生まれるだろうという考えを述べていた。マイタンはこれに答えてこう書いている。「誤りは、新しい社会の人間が現在の社会の人間と同じであると考えているところにある。実際は、それらの人間は、われわれには思いもつかないまったく多様な欲求と要求を持つようになるだろう」。だが、マイタンの誤りは、彼には「思いもつかない」新しい要求を漠然とした未来に委ねるところにある。精神の弁証法的役割は、可能性を望ましい形のものに向けることなのだ。マイタンは、「新しい社会を構成する要素はすべて古い社会のなかで形成された」という『共産党宣言』の言葉を、常に忘れている。新しい生の要素はすでにわれわれのなか——文化の領域において——で形成されているのであり、議論を活気付けるためにそれを用いるのはわれわれである。

個人のエネルギーと能力の完全な解放を目指す社会主義は、オートメーションをそれ自体においては反進歩的な一傾向と見ざるをえないだろう。社会主義にとっては、オートメーションを人間の潜在的エネルギーを表出する新たな魅力と関連づけることではじめて、この反進歩的傾向を進歩的なものとすることができる。学者や技術者が主張するようにオートメーションが新しい人間解放の手段だとすれば、そこにはそれまでの人間の活動の乗り越えが前提とされているはずである。このことは必然的に、人間にオートメーションそのものの実現をも乗り越えることを想

像させる。だが、人間をオートメーションの奴隷ではなく主人とするような、そうした展望はあったいどこに見いだせるというのか。

ルイ・サルロン*1は『オートメーション』という研究のなかで、オートメーションというものは「進歩についてはほとんど常にそうであるように、何かと置き換わったり何かを取り除いたりする以上に何かを付け加える」と説明している。オートメーションは、それ自体において、人間の行動の可能性に何を付け加えるというのか。われわれはオートメーションが自らの領域で人間というものを完全に取り除いているということを学んできたではないか。

産業化の危機は消費と生産の危機である。消費の危機は生産の危機に条件付けられているのであるから、生産の危機は消費の危機よりも重要である。個人の領域に移してみれば、このことは、物を貰うよりも与えるほうが、取り除くよりも付け加えることができるほうが満足だというテーゼに等しい。オートメーションはかくして2つの正反対の展望を持っている。それは、個人が進歩の凍結であるオートメーション生産に、何であれ個人的なものを付け加えることを妨げ、同時に、再生産的で非創造的な活動から大規模に解放された人間のエネルギーを節約するのである。それゆえ、オートメーションの価値は、オートメーションそのものを乗り越え、人間の新しいエネルギーをより高度な面に解放する企図に完全に依存している。

この領域において、今日、実験的な文化活動はかつてなく盛んである。一方で、ここでの悲観的態度、時代の可能性に対する屈服は、かつてのアヴァンギャルドが、エドガール・モラン*2の書いているように、「過去の骨を噛む」ことを欲し続けていることの現れである。ベナユーン*3という名のシュルレアリストが、その運動の最後の表現である『シュルレアリスム・メーム』誌のなかで次のように言っている。「余暇の問題はすでに社会学者の頭を悩ませている。(……)技術者はもう要らない。これから必要なのは、道化師であり、チャーミングな歌手であり、バレリーナであり、ゴム人間だろう。週休6日制になると、真面目と軽薄、怠惰と勤勉の釣り合いが覆される恐れが大いにある。(……)暇をもてあました『労働者』は、考えに不足し、タレントを探して茶の間に侵入する、ひきつった顔のテレビによって蒙昧化されるだろう」。このシュルレアリストには、週休6日は軽薄と真面目の「釣り合いを覆す」のではなく、軽薄と真面目のどちらもの性質を変化させるようになるということがわかっていない。彼が期待しているものは思い違いも甚だしい。それは、古くさいシュルレアリスムのイメージで、決して変化せぬ一種のボードビルとして彼が理解している既存世界のなかでの滑稽な変化にすぎない。なぜ、その未来が下劣な現在を肥大させたものでなければならないのか。なぜ、そこには「考えが不足」していなければならないのか。その未来には、1936年になって修正された1924年のシュルレアリスト*4の考えが欠けているとでも言いたいのだろうか。たぶんそうだ。あるいは、シュルレアリスムの模倣者に考えが欠けているという意味なのだろうか。われわれにはそれはよくわかっている。

新たな余暇は、現在の社会がでたらめなブリコラージュの偽の遊びをただひたすら増やすことで埋めようと思っている深淵のようにも思える。だがそれは同時に、かつて想像された最も偉大な文化的構築物を建設する基礎でもある。この目的は、明らかに、オートメーションの信奉者たちの狭い関心の輪の外にある。われわれは、それがオートメーションの直接的趨勢と敵対関係にあることさえ知っている。技師と議論しようと思うならば、彼らの関心領域に入って話さねばな

らない。ウルム*5で現在「造形大学」を運営しているマルドナドは、オートメーションの発達は危うい、なぜなら青少年のあいだに、総合的な展望を欠くオートメーションを目的とした専門家は別にして、理工系の道に自ら飛び込んでいこうとする熱意がほとんど見られないからだ、と説明している。だが、まさにその総合的な展望を示さねばならないはずのマルドナド自身が、次のことを完全に無視している。オートメーションが自らを確立したものと正反対の展望を目的として確立した時にはじめて、そしてまた、オートメーションの発達に応じてそのような総合的な展望が実現されるようになる場合にはじめて、オートメーションは急速に発達するのである。

マルドナドは逆のことを提案している。まず、オートメーションを確立し、次にその使い方を確立せよと。まさにオートメーションを目的としないならば、そのようなやり方を議論してもよいかもしれない。なぜなら、オートメーションとは、反行動を促すような1つの活動領域のなかでの一行動ではないからだ。それは、領域そのものを中和させ、矛盾した行動が同時に企てられない限りは、その外部の領域までも中和させてしまうであろう。

ピエール・ドゥルアン*6は、1957年1月5日付の『ル・モンド』紙で、労働者がもはや専門的職業活動に対して行使できなくなった潜在的能力を実現するものとして「趣味（ホビー）」の普及があるのだと語り、どんな人間のなかにも「眠っている創造者がいる」と結論付けている。この古くさい陳腐な言い回しのなかには、われわれの時代の現実の物質的可能性にそれを結び付けて考えるならば、今日、輝くような真理がある。眠っている創造者は起こさねばならない。そして、その覚醒状態はシチュアシオニストと呼ぶことができる。標準化という考えは、最大多数の人間の欲求を最大の均質性へと切り縮め、単純化するための努力である。標準化によって、それが閉じ込める経験の領域よりも興味深い経験の領域が開かれることになるのか否かは、われわれにかかっている。結果次第で、人間の生の完全な愚鈍化に行き着くこともあれば、数々の新しい欲望を常に発見する可能性にたどり着くこともできる。だが、その新しい欲望は、われわれの世界の抑圧的な枠のなかでは、単独で姿を現すことはない。それを発見し、暴き、実現するために、共同の行動をとらねばならない。

アスガー・ヨルン*7

*1：ルイ・サルロン フランスの経済学者。著書に『共有財産についての6つの研究』（1949年）、『企業における権威と命令』（79年）など。

*2：エドガール・モラン（1921-） フランスの社会学者。特に文化とその伝達手段を研究し、映画やマスコミについての研究もある。1956年から62年にかけて雑誌『アルギュマン』誌の編集長を勤める。著書に、『スター』（57年）、フランス共産党を離党する契機となった『自己批判』（59年）など

*3：ロベール・ベナユーン（1928-） モロッコに生まれ、1949年ブルトンと接触してシュルレアリストとなり、戦後のシュルレアリスム雑誌に協力。1951年、アド・キルーらと『映画時代』を、52年、映画雑誌『ポジティブ』を発行、シュルレアリストの中でも映画に造詣の深い人物として有名。ヌーヴェル・ヴァーグが現れた時には、アラン・レネだけを評価し、ゴダールやトリュフォーは無視するという独自の立場を取った。精神分析にも関心が深く、アーネスト・ジョーンズのフロイトの伝記に基づいた研究も著している。著書・訳書にエドワード・リアの『ナンセンスの本』など、映画

作品に『パリは存在しない』（1972年）、『気持ち良いまでに真面目』（75年）などがあり、コラージュ作品も多い。

*4：1936年になって修正された1924年のシュルレアリスト 1924年は、ブルトンが『シュルレアリスム宣言』を発表し、同時に『シュルレアリスム革命』誌が発刊された年で、ブルトンらがダダイズムから離れてシュルレアリスム運動を公式に開始した年。1930年代に入り、国際共産主義運動の高揚と帝国主義間戦争の接近という情勢のなかで、シュルレアリストは当初からその思想に含まれていた全体的な社会革命の路線を強め、『革命に奉仕するシュルレアリスム』を創刊する。同時にコミンテルンと接近し、1935年にはジョルジュ・バタイユらとともに「革命的知識人闘争同盟」（機関紙『反撃（コントロール・アタック）』の設立にも関わったが、1938年、トロツキーを擁護するブルトンらはスターリンの指導するコミンテルンと決裂し、バタイユらとも快を分かち、国際共産主義運動から離脱し、ロンドンで開催した「シュルレアリスム国際展」によって神秘主義化への第一歩を踏み出した。

*5：ウルム ドイツ南西部のドナウ川沿いの街。戦後、バウハウスの生き残りマックス・ビルが「造形大学」を設立し、バウハウスの継続を行った地。この新しいバウハウスは、かつてのバウハウスの創造性を失い、機能主義が支配する制度化された工芸大学になってしまった。1953年から「イマジニスト・バウハウスのための国際運動」を組織していたヨルンは、当初、この新しいバウハウスで、かつてのバウハウスにも欠けていた「絵画」部門を担当する提案をしていたが、ヨルンの構想していた文化による社会革命という考えは、マックス・ビルに受け入れられなかった

*6：ピエール・ドゥルアン（1921-） フランスのジャーナリスト。戦後、政府機関の法律顧問などをした後、『ル・モンド』の記者、編集次長などを勤める。

*7：アスガー・ヨルン（本名アスガー・オルフ・ヨルゲンセン 1914-73年） デンマーク生まれの画家、思想家、人類学者。コブラの創設者として北欧・ベネルクス3国からイタリアまで戦後ヨーロッパの前衛芸術運動に大きな影響を与えた。ヨルンはデンマークのユトランド半島のシルケボアに生まれ、1930年代に、バウハウスに参加したデンマーク人ヴィルヘルム・ビヤーク・ペーターセンや象徴主義的抽象絵画を唱えていたエイラー・ビレらが始めた前衛芸術運動『リニエン（線）』の影響を受ける。1936年にパリに行き、フェルナン・レジェの下で現代絵画を勉強し、ル・コルビュジエと共同で万国博覧会の建物の装飾などを行う。第二次大戦中は、デンマークに戻り、前衛芸術の雑誌ズルヘステン（地獄の馬）に拠りレジスタンスの活動を行う。戦後、「革命的シュルレアリスム」に参加し、パリでオランダ人コンスタントと、ブリュッセルでドトルモンと出会う中から、1948年、シュルレアリスムと抽象表現芸術の両方を乗り越え、生の直接的表現をめざす前衛芸術運動「コブラ」を創設。1951年、結核に冒され、「コブラ」を解散した後、53年から57年までイタリアのアルビソラで、芸術活動を生活全体にまで拡大し、建築・都市計画・都市環境の装飾など日常生活の場そのものの実験をめざした「イマジニスト・バウハウスのための国際運動」を組織する。1957年、ドゥポールらとともにシチュアシオニスト・インターナショナルを創設、そのフランスーセクションで活動。61年にSIを脱退した後は、「比較ヴァンダリズム・スカンジナビア研究所」を鍵点に芸術活動を続ける一方、故郷のシルケボアに象徴主義やシュルレアリスムからコブラ、シチュアシオニストに至るまでの作品と資料を収集した美術館を開設し、その運営を行った。

われわれのような探求に従事している集団において、いわば知的で芸術的な体裁の協力関係を持つためには、多かれ少なかれわれわれのような日常生活の利用の仕方をせねばならないが、こうした協力関係には、常に何らかの友情が混ざっている。

したがって、最初この合意に加わり、後にそこから除名された者たちのことを考える時、われわれは彼らもまたわれわれの友人であったと考えざるをえない。それは楽しいことであることもあれば、あきれ果て、困ったことであることもある。

全体的に見て、われわれの非難に十分な根拠があったこと、彼らがわれわれと行動を共にしえなかったのは抗いがたい性質のものだったことは、その後の事実によって証明されている。彼らのうちで教会や植民地部隊に加わった者はわずかしかなかったが、しかし結局、いたことはいたのである。他の者はインテリであることで満足している。彼らはそのまま年老いてゆくだろう。われわれの時代は、こういう者たちがそこで出世すらできない時代だからだ。フランソワーズ・ジルー*1は彼女の持ち場で完璧であり、そのジャンルが続く限りは、半分の才能しかない失業中の者たちが彼女に取って代わる理由などまったくないのである。そういうわけで、いくつもの偽名を使って正真正銘ポルノグラフィックな文学で仕事をしていたある男は、それに良い味付けをするために、「前衛芸術家」の身分を明かして、その種の新作を書いたり、昔の作品のいくつかを再版したりするようになった。もし彼が、たまたま巻き返しを計るとしても、その真面目な考えを表し、以前とは違うのだと信じさせるためには、隠れてそれを行わねばならないだろう。今度の人間は、おしゃべりたちのゴシップ話にある種の謎を提供して一躍有名になったあの男と同一人物ではなく、その男とごく親しい弟子だというわけである。しかし彼は、こうした野心から遠く離れ、人々からなおざりにされることを甘んじて受け入れた。その男とは、ベルギーの正直な理論家で、われわれの今の友人たちとかつて「実験芸術家インターナショナル*2」に加わったが、その後、青年期の趣味と思い出に閉じこもり、あるイデオロギー論争では愛国主義的な論拠を用いて議論するにいたった——もちろんベルギーを擁護してのことである。

まだ何も実現せず、何も言わず、ただいくつかの漠然としたばかげた振る舞いをしただけの者に、われわれは極端な寛容さを示した。にもかかわらず、われわれに合流するまでに至らなかった個人はさらに多い。何かがそこで起こっているはずだとぼんやりと感じ、自分自身は人を惹き付けることはできないのに、それに惹き付けられて、周りをうろろする者をわれわれはたくさん見てきた。彼らは結局、シュルレアリスムの防衛に当たる忠実な青年に倣っただけで、柄のないナイフのように、彼らには何かが欠けていたのである。

最近のシチュアシオニスト・インターナショナルの設立は、賛同と断絶の問題に新たな現代的光りを投げかけた。アルバでの会議*3に始まった、様々なグループの間での対等の議論と交渉の時期は、コシオ・ダローシャ*4で幕を閉じ、規律ある組織が生まれた。こうして新しい客観的条件が生まれた結果、公然の反対派は一種の日和見主義を強いられることになり、即座に除名された（イタリア・セクションの粛清）。他方で、一種の待機主義的態度が容認しえないものとなり、われわれの支持者だが即座にわれわれに参加せねばならないとは思わなかった者たちも、そのことによって、敵対者としての正体を現した。それ以来S Iの大多数の者が発展させてきたプログラ

ムにあって、いくつかの新しい要素がわれわれに加わったが、アルバ以降癒しえない衰弱を示してきた者たちと少しでも対話をするを受け入れるならば、この新しい要素と、そしてとりわけ、将来にわれわれが会うことになる要素と縁を切らなければならないおそれが出てくるだろう。

われわれはより強くなり、それゆえ、より魅力的になった。われわれは常に、無害な関係は望まない。われわれの敵を利するような関係も望まない。マチュー*5は、われわれが彼についてどう考えているか知らないわけではないにもかかわらず、去る3月、その作品の1つを計画段階のシチュアシオニスト的環境の構築のなかに忍び込ませようとした。タピエ*6は、タイプライター売り場で略奪をはたらく猿の群れを思わせる方法で、こうまで言ったのではないか。「情熱的なものというものは別のものなので、情熱のレベルではすべては行動様式の構造のなかで変化する。現在のレベルでの完全な作品とは、別の、したがって全体的な構造が少なくとも情熱に関する内容を超越するような作品である」（去る4月付の『極限的証明』）。だが、彼が1人で、そのパロディックな言葉のつながりに意味を見いだすことができるとはまったく思えないし、われわれが彼の言葉を受け入れることも絶対にありえない。こんな輩はすぐに消え去るがいい、そうすれば次に現れる者が彼よりましでないかどうかともすぐわかるだろう。

はっきりと言っておく。シチュアシオニストはみな、最初に集まった時に持っていた敵意を遺産として持ち続けるだろう。そして、われわれが1度は軽蔑することを余儀なくされた者たちに、われわれのところに戻るチャンスはありえない。しかし、われわれは断絶について観念的、抽象的、絶対的な捉え方をしているのではない。具体的な集団的任務のなかでの1つの出会いが、いつ不可能になるかを見なければならぬ。だが、同時にまた、環境が変化すれば、かつては互いにある程度尊敬しあったことのある人物どうしの間で、その出会いがふたたび可能で望ましいものとなることはないのかも追求しなければならない。

何人かの者——おそらく2、3人だ——は、われわれと知り合いになり、われわれとともに活動し、そして、われわれのところから出ていった、あるいはそうすることを望まれたが、それは今では乗り越えられた理由からだったのだ。彼らは、その後、何かに耐え忍ぶことを一切警戒してきた。少なくとも、われわれにはそう願うことが許されるだろう。彼らを知り、彼らの可能性がどのようなものであるかを知ったわれわれは、その可能性が今も前と同じかそれ以上のものであり、彼らが今もわれわれと同じ立場に立ちうると思っている。確かに、われわれが企て、実行してきたような共同作業は、友情を交えることなしには立ちゆかなかっただろう。それは最初に言った通りだ。しかし、その共同作業を友情と同一視することはできないし、友情と同じ弱さにも、同じ持続と緩みにも従うわけにはいかないということも、また確かなことなのだ。

ミシェル・ベルンシュタイン*7

*1：フランソワーズ・ジルー（1916-） フランスの評論家・政治家。第二次戦後、ジャーナリズムの世界で活躍し、女性誌『エル』の編集長を務めた後、1953年に週刊誌『レクスプレス』の共同創刊者となった。その後、政界に進出し、1974年から77年まで、女性相大臣、文化大臣を務めた。

*2：「実験芸術家インターナショナル」 「コブラ」運動の正式名称。

*3：アルバでの会議 1956年9月、イタリア北部の都市アルバで、「イマジニスト・バウハウスのための国際運動（M I B I）」のアスガー・ヨルンとピノ＝ガッツィオの呼びかけで行われた「第1回自由芸術家世界会議」のこと。この会議には、1年後にシチュアシオニスト・インターナショナルを結成するM I B Iと、ドウボールらのレトリスト・インターナショナルのほか、元コブラのメンバーのコンスタント、ミラノの「アルテ・ヌクレアーレ（核芸術）」のエンリコ・バイら、8か国の前衛芸術家たちが集まり将来のシチュアシオニスト・インターナショナルへの組織統一に向けて議論を行った。

*4：コシオ・ダローシャ イタリア北西部インペリア県の小村。1957年7月27日、この村にM I B Iのヨルン、オルモ、ピノ＝ガッツィオ、シモンド、ヴェッローネ、レトリスト・インターナショナルのドウボール、ベルンシュタイン、ロンドン心理地理学委員会のラルフ・ラムネイが集まりシチュアシオニスト・インターナショナルの結成大会を開催した。

*5：ジョルジュ・マチュー（1921-） フランスの画家。銀行家の息子として生まれ、高校の英語教師、ユナイテッド・ステイツ・ラインの広報担当を勤めた後、1947年以来、〈叙情的抽象（アプストラクシオン・リリック）〉を組織する。1950年代前半には、アンフォルメル運動の最も目立った画家として活動。異様な服装での公開製作で有名。50年代末からは世界各地で展覧会を開く一方で、産業界と行政権力と結び付いた活動（セーヴル陶器、公園・記念碑設計、テレビ放送への協力など）によって「新しいルネッサンス」の旗手とされている。

*6：ミシェル・タピエ（1909-87年） フランスの美術批評家。1948年、ブルトン、ジャン・ポーランと「生の芸術（アール・ブリュット）商会」を設立し、大戦直後から画家のデュビュッフェが実践していた「生の芸術」（幼児、精神病患者、アマチュアの作品）の収集活動を推進する。それと平行して、デュビュッフェ、ヴォルス、フォートリエら大戦後の前衛的な非具象絵画を「アンフォルメル（非定形）」芸術と命名し、この運動の推進者にして中心的理論家として活動。著書にアンフォルメルのマニフェストである『もう一つの芸術』（1952年）。

*7：ミシェル・ベルンシュタイン（1932-） 1952年、ドウボールと共にレトリスト・インターナショナルの活動に参加した後、シチュアシオニスト・インターナショナル設立後は、フランス・セクションのメンバーとして活動。1967年に脱退。著書に自伝的回想『王のすべての馬』（1960年）、『夜』（1961年）などがある。現在は、日刊紙『リベラシオン』で書評を担当。

シチュアシオニスト的騒擾のための出版物

1958年1月1日、ミュンヘンにおいて、「心を落ち着けろ！ 実験はもう要らない！」というタイトルでS Iドイツ・セクションの最初の宣言が発表された。文化の偽の新しさの悲惨をかなり激しく告発したこのパンフレットは、そこからの脱出口を示すことも忘れてはいない。「諸君、挑発されないようにしたまえ。これは最後の闘いだ！——いつ新たな統一の椅子がやってくるのか。1つの幽霊が世界を彷徨っている、シチュアシオニスト・インターナショナルという幽霊が。」

そのすぐ後に、フランス・セクションはパンフレット「文化における新たな作戦地域」とアピール「現代芸術の生産者たちへ」を出版した（君たちが解体派の作品を真似するのに飽きたら、そして、みんなから期待される断片的な言葉の繰り返しが時代遅れになってしまったと思えるならば、周囲の環境を改造する新しい力をより高い次元で組織するためにわれわれと接触を取りたまえ）。

『ポトラッチ』は、第28号までレトリスト・インターナショナル*1の機関紙であったが、統一されたわれわれの組織の管理下に移り、フランス・セクションが随時発行し続けることになった。6月に、パリで、『形態のために』と題されたアスガー・ヨルンの著書がS Iによって発行されたところである。この本は、1953年から1957年にかけて様々な言語で発表された文章の選集で、〈イマジニスト・バウハウスのための国際運動*2〉——それもまた新しいインターナショナルに統合された——が果たした理論面での貢献のエッセンスを提供している。

ベルギーでは、われわれの同志が、前衛芸術画廊「タブトー」*3——それは、1957年2月の心理地理学的な示威行動によって終わりを告げた——の歴史に捧げられた1冊の本のなかで、「コブラ」運動（1949-1951年）の以前と以後での実験芸術の変化の意味についてのヨルンのインタビューと、「状況の構築に関する報告*4」の第2版を発表した。われわれのイタリア・セクションによるこの報告の翻訳は、5月にトリノで発行された（ノティツィエ書店*5）。

S Iベルギー・セクションはさらに、オランダの雑誌『ガルト・シヴィック』第11号のために書かれた、シチュアシオニスト・インターナショナルの起源と現在のプログラムに関するワルター・コールン*6の研究によって、そのプロパガンダをオランダにまで拡大した。

S I 第2回大会

シチュアシオニスト・インターナショナルの第2回大会は、コシオ・ダローシャでの組織統一大会（1957年7月）の6ヶ月後、1月25,26日にパリで開催され、北欧とドイツでの活動の発展、出版活動、無線での連絡網を用いて複数のグループで同時多発的な実験的漂流を実行すること、いくつかの環境構築の最初の適用の可能性について、特に話し合われた。大会はイタリア・セクションの粛清を行った。イタリア・セクションにおいては、あるフラクションが観念的で反動的なテーゼを支持し、その後、多数派によって論破され糾弾されてからも一切の自己批判を怠って

いた。大会はしたがって、W・オルモ、P・シモンド、E・ヴェッローネ*7を除名する決定を下した。

ヴェネツィアはラルフ・ラムネイ*8を打ちのめした

1957年の春からヴェネツィアでいくつかの心理地理学的探査を行っていたイギリスのシチュアシオニスト、ラルフ・ラムネイは、最終的にこの都市を体系的に探検することを目標として定め、1958年の6月頃には完璧な報告書を提出できると思われていた（『ポトラッチ』第29号の予告を参照）。その企ては最初、かなりうまく進んだ。ラムネイは、ヴェネツィアの地図の基本要素——その表記技術はそれまでのすべての心理地理学的地図作成法を凌駕していた——を確立するにいたり、自分が発見したことや最初の結論、希望などを同士らに伝えていた。1958年の1月頃、彼のニュースは悪いものになった。無数の困難と闘っていたラムネイは、次第に自分が通過しようとしていた環境につなぎ止められるようになってゆき、自らの探求の路線を1つまた1つと捨て去り、最後には、3月20日の感動的なメッセージでわれわれに伝えていたように、完全に静止した位置に連れ戻されてしまったのである。

昔の探検家たちは、犠牲者を1パーセント増やすことによって、客観的な地理を認識することができるようになるという状況を経験した。だから、社会空間とその新しい利用法の探検家である新たな探求者のあいだにも犠牲者が出ることは覚悟しなければならなかった。賭けられているものがかつてとは別の性質のものであると同様に、罫も別の種類のものである。生の情熱的な利用方法に到達せねばならないのである。退屈の世界のあらゆる防衛線とぶつかるのは当然である。かくして、ラムネイは姿を消した。彼の父もまだその捜索に出発していない。ヴェネツィアのジャングルはこの上なく強力だった。それは将来を約束された1人の青年の上で再び閉じてしまった。彼は消え、われわれのたくさんの思い出のなかに溶解してしまったのである。

国際芸術批評家総会に反対するベルギー行動

ブリュッセルでの国際芸術批評家総会の会合の2日前の4月12日、シチュアシオニストはその総会に向けて糾弾の文書を広範囲にわたって配付した。S Iのアルジェリア、ドイツ、フランス、ベルギー、イタリア、スカンジナビア各セクションの名において、ハティプ*9、プラチエク*10、コールン、ドゥポール、ピノ＝ガッリツィオ、ヨルンの署名で出されたこの文書の文面は次のとおりである。

「ここで行われることは、きみたち全員にとって単に退屈なだけのように見える。しかし、シチュアシオニスト・インターナショナルは、ブリュッセル見本市のアトラクションとしてこれほど多くの芸術批評家が群れ集まったことを愚かで重大な意味を持つと考える。

現代思想は、文化に関するかぎり、この25年間、完全に停滞し続けてきた。これまで何も理解せず、何1つ変革してこなかった一時代の全体が、自らの失敗を自覚している。そのかぎりにおいて、この時代の責任者たちは、自らの活動を制度化しようとしている。その結果、彼らは、あ

らゆる点で時代遅れにもかかわらずいまだ物質的には世の中を支配している社会集団——たいていの場合、彼らはその良き番犬だ——から、公式に認知されることを求めるにいたった。現代の芸術批評が無効だというのは主に、それが文化の全体性を着想することも、批評を常に乗り越えてゆく実験的運動の諸条件を着想することもできなかったということである。現在、自然に対する支配が拡大された結果、生の構築のためのより優れた力を利用することが可能になっただけでなく、それは必要とされている。そこにこそ、今日の問題がある。にもかかわらず、知識人は、ある種の存在形態およびそれから生まれた観念がすべて覆されることを恐れ、古い世界のどうでもよい細部のチャンピオンとして、非合理的なやり方で互いにぶつかり合っているだけだ。この古い、終わってしまった世界の意味すら、彼らは理解していなかったのだ。それゆえ、芸術批評家は集まって、彼らの無知と懐疑のかけらを交換しようというわけだ。われわれの知るところでは、目下、新しい探求を理解し支持しようと努めている何人かの者が、ここに来て、大多数の凡庸なやつらの仲間入りをするに同意した。彼らがわれわれにとって少しでも興味あることを持ち続けたいと思うなら、こうしたやつらと縁を切るしかないということを警告しておく。

芸術批評家よ、部分的で、首尾一貫せず、分裂した馬鹿者たちよ、おまえたちは消えてなくなれ！ 偽の出会いのスペクタクルを見せてもむだだ。おまえたちに共通に課せられた役目は1つしかない。この市場で、解体された1つの文化についてのおまえたちの混乱した空虚な無駄口という、数ある西洋の商売のうちの1つを陳列するだけだ。歴史がおまえたちを断罪してくれる。おまえたちの大胆さですら、もはや何も産み出さない過去のものなのだ。

芸術批評家の屑どもよ、芸術の断片の批評家どもよ、解散せよ。未来の統一的芸術活動が組織されるのは、今やシチュアシオニスト・インターナショナルのなかだけだ。おまえたちに、言うべきことはないのだ。

シチュアシオニスト・インターナショナルは、おまえたちにいかなる場所も残さない。われわれはおまえたちを飢えさせてやる。」

その場で必要な反対行動を展開するのは、われわれのベルギー・セクションの役目だった。討議の開会の前日である4月13日以降、アメリカ人スウィーニーを主宰者とする両世界の芸術批評家たちは、ブリュッセルに迎え入れられていた一方で、シチュアシオニストの主張を載せた文書が様々な方法で彼らに知らされた。大勢の批評家に、郵便で、あるいは直接の手渡しで、この文書が渡された。電話でこの文書の全体、あるいは一部を読み上げられた批評家もいる。われわれのあるグループは、批評家たちが招かれていたプレス・センターに押し入り、そこにいた者にパンフレットを撒いた。それは建物の上階や車からや公道にも撒かれた。プレス・センターの事件の後、芸術批評家たちのなかには、そのパンフレットが通行人の好奇の的にならないように、通りまで出て回収した者もいた。結局、批評家がこの文書を知らないことのないように、あらゆる手段が取られた。問題にされている批評家たちは警察に通報することもいとわなかった。そして、彼らの見本市と彼らの思想の威光を傷つける文章が新聞に引用されるのを邪魔するために、この万国博に関係する利害によって彼らに保証されていた多くの手段を取ったのである。われわれの同志コールンは、この示威行動での彼の役割を理由に、司法当局の追及を受けている。

少年少女たち、

自己超越と遊びへの嗜好をわずかでも持つならば、

特別の知識はなくても、

とても賢く美しい君たちは、

シチュアシオニストとともに

歴史の方向に進むことができる。

電話はしないでくれたまえ。手紙を書いてくれ。

住所は、パリ5区、モンターニュ＝ジュヌヴィエーヴ街32番地

*1：レトリスト・インターナショナル 1952年、ギー・ドゥボール、ジル・ヴォルマン、セルジュ・ベルナ、ジャン＝L・ブロー、アンドレ＝フランク・コノール、ジャック・フィヨン、ムハンマド・ダフ、パトリック・ストララン、ミシェル・ベルンシュタインらのレトリスト左派が、イズーらの神秘主義化と美学至上主義に反発して結成した集団。「状況の構築」、「転用」、「漂流」、「心理地理学」など、シチュアシオニスト・インターナショナルの主な理論は、このレトリスト・インターナショナルのなかで既に提出されており、彼らの機関誌「ポトラッチ」には、これらの理論に基づいた活動が数多く報告されている。機関誌『ポトラッチ』は、1954年から1959年まで、全30号刊行、1957年11月発行の第29号からは、S Iの内部誌になった。また、『ポトラッチ』発行以前に機関誌『アンテルナシオナル・レトリスト』が第4号まで出された。

*2：イマジニスト・バウハウスのための国際運動 1950年にマックス・ビルが構想した機能主義的な新バウハウスの試みに反対し、1953年、アスガー・ヨルンが設立した国際運動。1955年からは、イタリアのアルピソラに「実験工房」を開設し、絵画、陶芸、建築、音楽など多分野にわたるイマジニストの活動の実験を行った。

*3：前衛芸術画廊「タブトー」 ワルター・コールンが運営していたブリュッセルの画廊。1956年夏にコブラ解散以降初めてのコブラ展（ドトルモンが組織）を開催するなど、ベルギーの前衛芸術運動の拠点となっていた。

*4：「状況の構築に関する報告」 1957年イタリアのコシオ・ダローシャで開催された、シチュアシオニスト・インターナショナルの設立のための会議にドゥボールが提出した討議資料で、S I発足時の綱領的文書。正式なタイトルは「状況の構築とシチュアシオニスト・インターナショナル潮流の組織・行動条件に関する報告」。

*5：ノティツィエ書店 トリノのノティツィエ画廊に付属した書店。

*6：ワルター・コールン S Iベルギー・セクションのメンバー。1958年秋に除名。

*7：ワルター・オルモ、ピエロ・シモンド、エレナ・ヴェッローネ 3人とも、設立時からのS Iイタリア・セクショ

ンのメンバーで、それまでは、ヨルンとともにイタリアに本拠を置いた「イマジニスト・バウハウスのための国際運動」(MIBI)に参加していた。同運動の雑誌『エリスティカ』第2号(1956年)には、シモンドの論文「具象芸術の一般理論のために」、ヴェッローネの論文「民主主義的目的の建築の役割」がある。ワルター・オルモは、MIBIのアルバの実験工房で、音楽の実験を行った。3人とも、1958年1月に除名

*8:ラルフ・ラムネイ 〈ロンドン心理地理学委員会〉のメンバーとしてSIの設立に参加した後、SIイタリア・セクションのメンバーとして活動。1958年3月除名。

*9:アブドゥルハフィド・ハティブ 135ページの注を参照

*10:ハンス・プラチェグ SIドイツ・セクションのメンバー。1959年2月除名

訳者解題

ここに緊急アピールのようなかたちで発表されたシチュアシオニストの文章は、5月13日に始まったアルジェリア駐留フランス軍とフランス人入植者（コロン）によるクーデタの試みを受けてのものである。

アルジェリアでは、1954年からFLN（国民解放戦線）が武装蜂起を開始し、アルジェリア独立戦争が戦われていたが、FLNの戦いに対するヨーロッパ人入植者と軍、極右組織のテロ活動は熾烈を極めていた（56年のフランス軍によるベンベッラの誘拐、57年のアルジェの実質上の戒厳令化とFLNへの拷問・虐殺）。FLNを中心としたアルジェリア人民も57年の「アルジェの戦い」で知られるゲリラ戦を展開する一方で、「アルジェリア革命全国評議会」を全国に設置し、モロッコ、チュニジア領内に本拠を移し、そこから外交政治活動を強め、国際世論に訴えた。

こうした中で、1958年5月13日、アルジェ市駐留フランス軍の降下師団司令官マシュー将軍を中心とする将兵グループと、ヨーロッパ人入植者のデモ隊3万人がアルジェリア政庁を占拠、マシューを長とする公安委員会の設置を宣言し、植民地を舞台としたクーデタを敢行した。同時に、コティ大統領に対しても、フランス本国に治安政府を設け、将軍ド・ゴールを指導者とするよう要求した。

こうした動きに対して、かねてからFLNへの弾圧強化政策を進めてきた社会党ギーモレ首班の「共和戦線」内閣（社会党、急進社会党左派、ド・ゴール左派）は、まったく対応できなかった。議会左翼である共産党も、内閣のアルジェリア弾圧のための特別大権付与に賛成票を投ずるなど、政府のアルジェリア政策に追随するだけだった。また、56年総選挙で、反税・反権力を掲げて後進地域の商人や中小企業家の票を得て議席を伸ばしたブジャード党も、混乱に拍車をかけていた。こうした事態に対処するため、翌14日、モレ内閣に代わりフリムラン内閣が発足し、アルジェリア駐留フランス軍総司令官サラン将軍に反乱鎮圧を命じたが、サランは反乱軍に付き、「全アルジェリア公共治安委員会設立宣言」に署名し、アルジェリアはヨーロッパ人植民者による独立政権樹立の動きを強めた。さらに、24日には、コルシカ島でも陸軍降下部隊が実力行動に出て、ド・ゴール政権樹立を要求してフランス本土へ迫る勢いとなった。フリムラン首相はフランス本土の内戦の危機を国民に訴え、ド・ゴールに事態の収束を要請。29日、コティ大統領はド・ゴールに組閣を要請した。ド・ゴールは6月1日、国民議会で首相に選出され、2日にはフランス全土とアルジェリアの非常事態権限を得て、4日、アルジェに赴き、アルジェリアでの選挙の提案を行うのである。

この雑誌が印刷されようとしていた間に、重大な事件がフランスで突発した（5月13日～6月2日）。今後の展開次第ではこの事件はヨーロッパにおける生活の他の多くの様相に対しても、前衛文化の諸条件に対しても、重くのしかかることになるかもしれない。

歴史は悲劇であったものを笑劇としてやり直す傾向がある*2というのが本当だとすれば、第4共和政末期の喜劇の中でたった今、繰り返されたのはスペイン戦争である。第4共和政の政治の基本は、ずっとこれまでその非現実性にあったが、今度のように流血を見ることなく迎えた共和政の死それ自体も非現実的だ。第4共和政は植民地に対するいつ終わるとも知れない戦争と不可分だった。フランス国民の利害・関心は戦争を停止することにあり、植民地主義を掲げる産業部門の利害・関心は戦争に勝つことにあった。議会はこのどちらの利害・関心に対しても無能であるように見えたが、実際は、まさしく植民地主義者たちと彼らに仕える軍隊との側に立って、ここ数年来いろいろ譲歩を重ね解散を繰り返してきたのであり、今また、その彼らの権力に対して席を譲る覚悟をしていたのだ。

アルジェリア駐留軍が反乱をくわだてたとき、誰もが予期したように、共和国政府はほとんど犠牲をはらうこともなく、彼らをもとの規律に服させることができたはずで、月末には抵抗もまだ必要かつ容易だった。ところが、政府は当初、議会内左翼多数派を通じて国民に頼らねばならなかった。コルシカ島を征服され空艇部隊によるパリ攻撃の脅威に晒されるに及んで、政府は最後には、（かつて武装民兵を率いたカップによるベルリン暴動*3の当初の成功を無に帰せしめたのが、政府によるあのゼネスト組織であったように、今回もそのようなゼネストを組織することによって）動員された人民の実効力に頼るべきなのに、そうはしなかった。そうした革命過程には、召集兵や戦艦乗組員に対して、自分たちの反乱上官に反対して決起するよう訴えること、そしてとりわけアルジェリアの独立を承認することが含まれていたが、それは〔政府には〕ファシズムよりもずっと危険に思えたのだ。

共産党はこの危機において議会体制の最上の擁護者以外の何ものでもなかった。ところが、当の体制は左翼多数派の中に共産党の票数を数えいれることをまさしく拒否することによって、崩壊点に達していたのである。相変わらず体制は、右翼少数派がこれまで自らの政策を押しつけるときに使ってきた無類の威嚇手法、すなわち、権力奪取にいそしむ共産党という神話の、徹底した犠牲者であった。権力奪取に全くいそしんでいなかった共産党はこうして、議会でただ1つの作戦も成功させることなく、大衆を失望させ、武装解除させていたのだ。それに議会のほうもまた、当の右翼少数派であるブルジョワジーの責任者たちに申入れを受け入れてもらうように、徹底して努めたのである。これらの責任者は彼らなりに石のように断固たる態度のままであったため、共産党員たちは議会で最初の成功を記すことができなかった。体制はその前に瓦解するだろうというわけだ。5月28日には、議会ではなく国全体を反ファシズム闘争に引き入れることが可能であるように見えた。ところが、5月29日の夕方、CGT（労働総同盟）は主な武器である無期限のゼネストに打って出ずに、6月1日のデモは純粋に形ばかりのものでしかなかった。

大衆にしてみれば、どうでもよかった、なぜなら、大衆はこれまで久しく、議会内で右翼穏健派を支持するか、それとも、一種の穏健な人民戦線、といっても、非共産党議員から絶対に拒否

されていたのでユートピアに等しいような人民戦線を支持するか、という誤った二者択一しか提供されてこなかったからである。政治に関心を示さない分子たちは大新聞とラジオによって眠り込まされていた。これらの情報手段をコントロールしてそれを最も上手に利用するような政府であったなら、十分な猶予期間を駆使して国に事態の重大さを知らせていただろうが、資本主義的な情報提供様式は、生来の傾向をなぞって、国民の大部分に対して体制の断末魔を隠しおおせたのである。政治に関心を示す分子たちは1945年以来、敗北の習慣を身につけていて、彼らがこのような「共和政擁護」の機会に対して懐疑的であったのは無理もない。しかしながら、何10万というデモ隊が5月28日パリにむけて一緒に行進していったことから分かるように、民衆の方こそ立派であり、土壇場で立ち上がったのだ。

今までのところ、この嘆かわしい事態にはいかなる現代的な特徴も含まれていない。フランスでは、ファシズムは大衆党も綱領も持っていなかった。偏狭で人種差別主義的な植民地主義と、手に届く勝利としては他の勝利が見えなかった軍隊とから成る勢力だけが第1段階として国にド・ゴールを押しつけたわけだが、そのド・ゴールは17世紀フランスの国家的偉大さという、学校で習うような型にはまった観念を代表し、プジャード的*4＝軍事的な道徳的秩序への移行を保証しているのだ。工業化を強力に押し進めたこの国では、労働者階級の決定的な行動というものはない。ブルジョワジーとプロレタリアートとが政治的に不在であるような段階に陥ったのであって、この段階では権力を決めるのは軍部クーデターなのである。

われわれはどのような現状にいるのだろうか。労働者の諸組織はこの場合、手つかずである。民衆の一部は事態の重大さを知らされている。アルジェリア駐留軍は相変わらず戦闘を行っている。公式に指名しないうちから既にパリの歴代政府を指揮していた植民者たちは、アルジェでの統治を続けるために、今や、反対されることもなくフランスを統治せざるをえない。相変わらず彼らの目的は、自分たちの利益に資するべくフランスが国を挙げて戦争努力を強化することであり、それには、現時点でこの国の民主主義が清算されてファシズムの権威が勝利することが必要である。まだ流れを逆転できるとすれば、フランスの民主主義勢力は、自らの態度をとことんまで突き進めざるをえないだろう。つまり、アルジェリアとフランスにおける植民者たちの権力を清算すること、すなわち、FLN*5によるアルジェリア共和制実現を承認することにまで突き進まざるをえないだろう。したがって、短期間の激しい衝突は避けられない。将軍兼大統領の個人的役割について無気力な幻想を抱いたり、統一行動に障害を持ち込んだり、闘争を開始すべきときにあたって新たに躊躇したりすれば、民衆をさらに弱体化し、裏切ることにさえなるかもしれないが、結末を遅らせることにはならないだろう。

1958年6月8日

*1：カティリナ 古代ローマの政治家で時の権力に反逆したルシウス・セルギウス・カティリナ（前108?-前62年）のこと。一種のクーデタをたくらんだ彼を激しく非難するキケロの弾劾演説は有名で、カティリナは内戦によって道徳的に墮落した青年の典型とされている。

*2：歴史は悲劇であったものを笑劇としてやり直す傾向がある マルクスの『ルイ・ボナパルトのブリュメール18日』第1章の冒頭の言葉。

*3：カップによるベルリン暴動 ドイツの偏狭なナショナリスト、ウォルフガング・カップ（1858?-1922年）が1920年、ワイマール体制の転覆を図って行ったクーデタ暴動。暴動はベルリン市民の果敢なゼネストによって失敗に帰した。

*4：プジャード的 南仏の文房具店主ピエール・プジャード（1920-）が組織したプジャード運動（1953年、税制改革に反対する小売業者を組織してフランス商人職人防衛連合を創設して反税運動を展開し、翌年には、チュニジアを手放したマンドス・フランスから多国籍企業、哲学者・知識人、外国人まで祖国に背く者をすべて攻撃するファシスト的右派政党にまで発展し、56年の総選挙では52議席を獲得するまでに躍進した）にちなみ、プチブル層の生活保守意識に根ざした偏狭で排外主義的な感情的愛国主義意識をさして言う。

*5：FLN アルジェリアの「国民解放戦線」。フランス政府のアルジェリアに対する融和的な自治案に反発し、1954年11月、各地で独立を求めて武装蜂起を起こす。以来、アルジェリア独立を掲げ、フランス軍と植民者テロ組織の残虐な弾圧に抗して戦い、1962年の独立を勝ち取った。

現代文化における革命と反革命

世界を変革しなければならない、われわれはまず、そう考える。われわれが閉じこめられている社会と生を最大限に解放する変革、それをわれわれは欲するのだ。この変革はそれに適した行動によって可能になることをわれわれは知っている。

われわれの任務はまさに、ある種の行動手段を活用すること、そして新たな行動手段を発見することにある。それはどこよりも文化と風俗習慣の領域において容易に認められるものであるが、それらをあらゆる革命の変革の相互作用という展望のもとで活用しなければならない。

人々が文化と呼ぶものは、ある社会における生の組織化の様々な可能性を反映するだけでなく、それをあらかじめ描き出すこともある。われわれの時代は本質的に、より高度に世界を組織化することを必要とする生産の現代的可能性の発展に対して、革命的な政治行動が遅れをとっているという特徴を持っているのである。

われわれは歴史の本質的危機を生きている。そこでは、新しい生産諸力と一文明の形成とを世界規模で合理的に支配するという問題が年ごとに次第に明確に提出されている。しかしながら、搾取の経済的下部構造を前もって転覆することの成否がかかっている国際的な労働運動の行動は、いまだ地域的には半分の成功しか収めていない。資本主義は市場における統制経済、流通部門の増大、ファシスト的政府などの新たな闘争形態を発明している。それは労働者の指導部の退化に支えられ、種々様々な改良主義的戦略によって階級対立を覆い隠している。そうして、資本主義は現在まで、高度に産業化された国々の大半においては古い社会関係を維持し、社会主義社会からは不可欠な物質的基盤を奪い取ることができたのである。逆に、この10年来、帝国主義とのより初歩的な闘争に大規模に巻き込まれてきた低開発国や植民地国は、非常に大きな成功を克ち取るようになってきた。この国々の成功は、資本主義経済の矛盾を深刻なものとし、そして、主として中国革命の場合のように、革命運動全体の再生を促している。この革命運動の再生は資本主義諸国あるいは反資本主義国内部での改革にとどまらず、至る所で、権力問題を提出せずにはいない衝突を発展させるだろう。

現代文化の破産は、混沌の極みにあるこれらの敵対諸力の——イデオロギー闘争の側面における——産物である。新たに定義されつつある新しい欲望は、不安定なままの状態では表明されている。時代の資源はそれらの欲望を実現可能にしているが、遅れた経済構造はこれらの資源を活用することができないのである。同時に、支配階級のイデオロギーはそのまとまりをすべて喪失してしまっただが、その原因は、そうしたイデオロギーが、次々に現れる自らの世界観を軽蔑し、歴史に関する非決定論へと向かってきたこと、キリスト教と社会民主主義のように、原理的には敵対する反動思想を年代順に配置して共存させてきたこと、さらに、つい最近になってその価値が認められたばかりの、西洋現代に異質な多くの文明によってもたらされるものをでたらめに混ぜ合わせてきたことにある。支配階級のイデオロギーの主要目的は、したがって、混乱を生み出すことにあるのである。

文化においては（文化という語を用いる場合、たとえ偉大な科学理論や一般的教育観のレベルでの混乱を明らかに感じさせることになるとしても、われわれはつねに、文化の科学的もしくは教育的側面は無視する。文化という語でわれわれが示すものは、美学と感情と風俗の複合体であり、それは日常生活に対して一時代が示す反応なのである。）、「混乱を旨とする反革命の手法は、様々な新しい価値の部分的併合、巨大産業（小説、映画）の手段を用いた意図的な反文化的生産を同時並行的に進めるものであるが、それは学校と家庭における青年の無知蒙昧化の当然の帰結である。支配階級のイデオロギーは、体制転覆的な発見を凡庸化することを組織し、そうした発見に殺菌処理を施した上で大々的に普及させるのである。そうしたイデオロギーは、転覆的資質を持つ個人を利用するのに成功することさえある。死んだ個人に対しては、その作品を変造することによって、生きている個人に対しては、全体的なイデオロギー的混乱を利用して、支配階級が商う神秘思想のひとつで彼らを中毒させることによって。

清算段階におけるブルジョワジーの矛盾の1つは、したがって、知的・芸術的創造の原理は尊重し、それによって創造されたものにはただちに反対し、次にそれを利用するというところにある。こうした矛盾が生じるのは、ブルジョワジーというものは少数派のなかに批判と探求の意味を保持しなければならないが、それはこうした活動を厳密に断片化された実用的専門分野へと方向付け、全体的な批判と探求を遠ざけるという条件下においてであるという理由からである。文化の領域においては、ブルジョワジーは、われわれの時代において彼らにとって危険な新しいものに対する嗜好を、ある種の墮落した形態の珍奇なもの、非攻撃的で混乱した珍奇なものへと逸らせることに努めている。文化的活動を支配している商業のメカニズムによって、前衛的傾向は自らを支えうるフラクション——社会状況の全体によってすでに制限を加えられているフラクションであるが——から切り離されているのである。これらの傾向のなかですでに注目を集めている者たちは様々な断念の強制という犠牲を払い、一般的には、個人という資格でのみ認められる。主要な論点は、常に、全体的要求を断念し、様々な解釈を許す断片的作業を受け入れるという点にある。それこそが「前衛」というこの用語——結局のところ常にブルジョワジーによって操作された用語——に、どこかしら胡散臭いばかげた匂いを付与するものである。

集団的前衛という概念そのものは、そこに含まれた闘争的側面と同様、歴史的諸条件の最近の産物である。この歴史的條件は、文化における首尾一貫した革命プログラムの必要性を産み出すと同時に、そのプログラムの発展を阻害する勢力と闘う必要性も産み出しているのである。そうした集団は、革命的政治によって作られたいくつかの組織方法を自らの活動領域に移し換えるよう導かれ、その行動も以後もはや政治批判と無関係には産み出され得ない。この点に関して、未来派、ダダイズム、シュルレアリスム、そして1945年以降に形成された諸運動のあいだでの進歩は著しい。しかしながら、これらの各段階に、変革に対する同一の普遍的意志が見出せる。そしてそれらは、現実世界を根底から変革することができなくなり教義的立場そのもの——その不十分さはつい最近、暴露されたばかりである——への決定的退却を余儀なくされた時にも、同じように素早く雲散霧消したのである。

未来派は第一次世界大戦の前夜にイタリアからその影響力を広めたが、文学と芸術を一変させるという態度を採った。それは、数多くの形式的な新しさをもたらしたが、しかし、機械的進歩の

概念を極端に図式的に適用することに基づいていたにすぎない。技術に対する未来派の楽観主義の幼稚さは、それを支えていたブルジョワジーの幸福の時期が去ると同時に消え去ってしまった。イタリア未来派はナショナリズムからファシズムへと雪崩を打って崩れてゆき、当時の時代より完全な理論的展望に到達することは決してなかったのである。

チューリッヒとニューヨークで、第一次大戦の亡命者と脱走兵たちによって構成されたダダイズムは、ブルジョワ社会——その破産は誰の目にも明らかになったばかりだった——のあらゆる価値を拒絶する存在たらしめた。第一次大戦後のドイツとフランスでの彼らの激しい示威行動は、主として芸術と文化の破壊に関するものであり、副次的にある種の行動形態（見せ物、演説、わざとばかげたやり方でなされる散策）に関わることもあった。彼らの歴史的役割は、文化というものの伝統的捉え方に対して致命的一撃を加えたことにある。ダダイズムのほとんど即時の解体は、ダダイズムそのものの持つ完全に否定的な定義から必然的に生じたものである。だが、ダダの精神がその後生まれたすべての運動をなにがしか決定付けたことは確かだ。また、歴史的にはダダイストのものであった否定的側面が、後の建設的立場を取るどのような運動にも再発見されねばならないことも確かである。腐り果てた上部構造の繰り返しを余儀なくさせる社会状況——その審判は知的な側面ではとっくに下されている——が力づくで一掃されないかぎりそうなのだ。

シュルレアリスムの創始者たちは、フランスでダダの運動に参加した者たちだが、ダダイズムによって明らかにされた道徳的反逆と伝統的コミュニケーション手段の極度の衰退から、自らの建設的行動の領域を確定しようと努めた。シュルレアリスムは、フロイトの心理学を詩的に適用することから出発して、自らが発見した方法を、絵画や、映画や、日常生活のいくつかの局面に広げた。やがて、それらは拡散した形式のもとで、さらに広げられた。こうした性格の試みにとっては、絶対的にあるいは相対的に正しいかが問題ではなく、一定の期間、その時代の欲望を結集できるかが問題なのである。観念論の清算と弁証法的唯物論への賛同の時期と特徴づけられるシュルレアリスムの進歩の時代は、実際は1930年代の少し後に終わってしまっていた。だが、その退廃が誰の目にも明らかになったのは、ようやく第二次世界大戦の終わりになってからのことであった。シュルレアリスムはそれ以来、かなりの数の国に広がっていった。さらに、それは自らの規律を定めるにいたったが、その厳格さは過大に評価してはならず、さまざまな商業的配慮によってしばしばやわらげられたものだった。だがこの規律こそは、ブルジョワジーの攪乱戦術との闘いの有効な尺度だったのである。

シュルレアリスムのプログラムとは、欲望と驚異の至上権を肯定し、生の新しい使い方を提案するものであるが、一般に考えられる以上に建設的な可能性に満ちたものである。

確かに、実現のための物質的手段の不足によってシュルレアリスムの豊かさは大きく制限されたが、その最初の首謀者たちの交霊術への到達と、そしてとりわけそのエピソードの凡庸さを見ると、シュルレアリスムの理論の発展を否定するものは、まさにこの理論そのものの起源にあったのだと言わざるをえない。

シュルレアリスムの根底に存在するものは、無意識の想像力が無限に豊かだという誤った考えである。シュルレアリスムのイデオロギー的失敗の原因は、無意識こそがついに発見された生の偉大な力だと確信したことにある。そして、それなりに思想史を再検討しながら、そこまででや

めてしまったところにある。われわれは結局、無意識の想像力は貧しく、オートマティズムは単調であり、常に変わらぬシュルレアリストの様相を典型的に示している「突飛な」種類のものがごとく極端に驚きのないものであることを知っている。こうしたスタイルの想像力に形式的に忠実であると、最後には想像力の現代的諸条件と正反対のところについてしまう。すなわち、伝統的神秘主義というやつだ。どれほどシュルレアリスムが無意識というその仮説に依存しつづけているかは、第2世代のシュルレアリストが試みている理論的深化の作業から読み取ることができる。カラス*1とマビユー*2は、すべてをシュルレアリストの無意識実践から生じる2つの連続した局面に結びつける。前者にとっては、精神分析であり、後者にとっては宇宙的影響関係である。実際、無意識の役割の発見はそれ自体が1つの驚きであり、新たな事実だったのであり、将来の驚きと新たな事実についての法則などではなかったはずだ。フロイトが「全て意識されるものは古びてゆく。意識されないものは変化しないままにとどまる。だがそれも、いったんそこから自由にされると、瓦礫と化してしまうのではないだろうか」と書いたとき、彼も結局はこのことを発見していたのである。

シュルレアリスムは、現実といまだに強く求められている諸価値との間の断絶が不条理にまで追いやられている明らかに非合理的な社会に反対し、その社会に対して逆に非合理的なものを用いて、うわべだけの論理の価値を破壊しようとした。シュルレアリスムの成功そのものは、次の事実を負うところが大きい。すなわち、この社会のイデオロギーは、その最も現代的な面において、まがいものの価値の厳格なヒエラルキーを断念したが、逆に今度は自らが非合理的なものを公然と利用し、さらにそれを機会にシュルレアリストの遺物までをも利用しているという事実、である。

ブルジョワジーはとりわけ、革命的思想の新たな出発を阻止しなければならない。ブルジョワジーはシュルレアリスムの脅威的な性格をかつて意識していた。現在の美術市場のなかにそれを解体させることができた今となつては、彼らもシュルレアリスムが無秩序の極みに達したことを確認して悦に入っている。そのようにしてブルジョワジーはある種のノスタルジーを涵養すると同時に、どのような新たな探求も自動的にシュルレアリスムのデジャ・ヴュ——すなわち、ブルジョワジーにとって、もはや誰からも再検討されえなくなった敗北——へと導くことで、その権威を失墜させているのである。キリスト教道徳に基づいた社会の疎外を拒否することか原始社会の完全に非合理的な疎外を尊重するようになった人々もいる。だがそこまでだ。さらに前進しなければならない。そして世界をよりいっそう合理化せねばならない。それこそがこの世界を情熱にあふれたものにする第1の条件である。

*1：ニコラ・カラス（1907-） スイス生まれのシュルレアリスト。1930年代後半、パリでシュルレアリストと交わり、大戦中は合衆国に渡りシュルレアリスムの雑誌『ヴュー』や『VVV』に協力する。その後、大学の美学教師になりポップ・アートの擁護者として美術批評を多く書く。代表作『火元』（1938年）はシュルレアリストらに熱狂的に受け入れられた。

*2：ピエール・マビユー（1903-52年） フランスのシュルレアリストの作家・医者。1930年代にシュルレアリスムの雑誌『ミノートル』の編集に携わり、精神分析や人類学、とりわけ「鏡」に関する多くの文章を発表。戦後は、雑誌『ネ

オン』に協力し、ブルトンとともに活動したが、1952年、急死した。代表作に『驚異の鏡』（1940年）

ブルジョワ思想の最高段階としての解体

いわゆる現代文化は、パリとモスクワをその2つの主要中心地とする。パリから発する流行——その作成においてフランス人は多数派を形成するわけではないが——は、ヨーロッパとアメリカ、そして日本のような資本主義地帯の他の先進国に影響を与える。モスクワによって行政的に押し付けられた流行は労働者国家の全体に影響し、わずかに、パリとその影響のおよぶヨーロッパ地域に逆に作用する。モスクワの影響は直接的に政治的な起源を持つものである。未だに保たれているパリの伝統の影響力を説明するには、様々な職業の集中によって獲得されたパリの優位性を考えなければならない。

ブルジョワ思想は体系的な混乱のなかで見失われ、マルクスの思想は労働者国家のなかで根底から変質し、西も東も主として文化と風俗の領域で保守主義が君臨している。この保守主義は、モスクワでは、19世紀のプチブルジョワジーに典型的な態度をとりつつ大手を振って歩き、パリではアナキズムやシニスム、あるいはまたユーモアといった形で偽装を凝らしている。どちらの支配的文化もわれわれの時代の現実の問題を取り入れることにかけてはまったく不適格であるが、経験という点については西側のほうがはるかに遠くまで推し進めてきたと言える。一方、モスクワの支配地域はこの分野での生産については後進国の様相を呈している。

全体として知的自由が許容されてきたように見えるブルジョワ支配地域では、様々な思想の動きが認識され、環境の多様な変化が漠然と展望されているおかげで、制御しえない動機に衝き動かされた現在の大変動もたやすく意識することができる。支配的な感受性は、最終的には自らにとって必ず有害となる新たな変化を阻止しつつそれに適応しようと試みている。遅れた諸潮流が同時に提案している解決策は、必然的に次の3つの態度に帰着する。ダダシュルレアリスム危機がもたらした流行を引き伸ばすこと（その危機とは、過去の生活スタイルが終わり、その時まで認められていた生の理由が崩壊した時に、いたるところで自発的に現れ出た精神状態を入念に練り上げて文化的に表現したものにすぎなかった）、精神の廃墟のなかにとどまること、そしてはるかな過去への回帰である。

現在もなお続いている流行に関して言えば、あらゆる場所でシュルレアリスムを薄めた形態のものに出会うことができる。そこにはシュルレアリスムの時代の趣味はすべてであるが、その思想は何1つない。反復こそがその美学なのである。正統派シュルレアリストの運動の生き残りたちは、この古いぼれた神秘主義の段階において、イデオロギー的立場を取ることもできなければ、何であれ発明することもできないでいる。彼らは、常にますます卑俗なものになってゆくいかさまを支持し、さらに別のいかさまを求めるのである。無のなかにとどまる態度は、第二次大戦に続く時期に最も精力的に自らの認知につとめた文化的解決策であった。それは、それまで数多く示されていた2つの可能性のどちらかを選ぶに任せる。都合のいい言いわけを言って虚無のなかで隠れるか、無神経にそれを肯定するかである。

最初の選択肢は、実存主義文学以来とりわけ有名になった。それは、借り物の哲学のおかげで、

それまでの30年間の文化の進歩のなかで最も凡庸な面を再生産し、マルクス主義あるいは精神分析の偽造によって、さらには、行き当たりばつりに政治的参加と断念を繰り返すことによって、本来は広告的関心にすぎなかった自らの関心を弁護してきたのである。これらの手法は非常に数多くの追従者——公然のあるいは密かな——を生んだ。抽象絵画と、抽象絵画を定義する理論家がたえずひしめき合っているのも、同じ性質の、それに比肩しうる規模の事実である。完璧な精神的無を喜んで肯定する態度は、最近の新文学において、「右翼青年小説家のシニスム」と呼ばれる現象の1つである。それは、右翼の者たちをも、小説家をも、彼らを支持する半青年層をも越えて広がっている。過去への回帰を要求する初潮流のなかで、社会主義リアリズムの教義は最も大胆な態度を示している。なぜなら、革命運動の結論に依拠すると言いながら、それは文化の創造という領域では擁護しようのない立場を取るからである。1948年のソヴェト音楽家大会で、アンドレイ・ジダーノフ*1は彼が行っていた理論的抑圧の争点を示してこう言った。「われわれが古典絵画の宝庫を維持し、絵画の清算者たちを壊走させたのは正しかったであろうか？『流派』を生き残らせることをもって、絵画の清算を意味したのではないだろうか？」こうした絵画の清算や、そして他の多くのものの清算を眼の当たりにすると、進化した西側のブルジョワジーなら、彼らのすべての価値体系が崩壊したことを確認し、イデオロギーの完全な解体の上に、絶望的反応と政治的日和見主義に陥る。しかしジダーノフは逆に、——成り上がりもの特有の趣味によって——前世紀の文化的価値の解体に反対するプチ・ブルジョワのなかに自らの姿を認め、それらの価値を権威主義的に復興する以外、何も試みようとはしないのである。歴史がそれぞれの時代にさまざまな問題から引き出した結論をすべて仮説によって排除した後で、すでに乗り越えられた問題の研究をやりなおすことを強制して、一時的で地域的なものにすぎない政治情勢によって時代全体の問題を回避する力を与えられたと信じるのは、かなり非現実的である。

宗教機関、主にカトリックの伝統的プロパガンダには、その形態とその内容のいくつかの面において、この社会主義リアリズムと近いものがある。常に変わらぬプロタガンダによって、カトリックは、過去の諸勢力のなかで彼らだけがいまだに所持している全体的イデオロギー構造を防衛する。だが、彼らの影響を逃れてゆく部門——その数は次第に増えているが——を再び捕えるために、カトリック教会は、伝統的プロパガンダに平行して、主として、アンフォルメルと呼ばれる絵画などのように、理論的混乱を抱えた無の支配下にあるもののあいだで、あらゆる形式の現代文化を支配することを追求している。カトリック反動派は、恒久不変の価値のヒエラルキーを確信しているだけに、他のブルジョワ潮流とくらべて、彼らが異彩を放っている分野において、解体を嬉々として貫徹することがいっそう容易である。そういう利点が彼らにはあるのである。

現代文化の危機の現段階での帰結とは、イデオロギーの解体である。この廃墟の上にはもはや何も新しいものを建設することはできない。そして、あらゆる判断が他の判断と衝突し、誰もが役立たずになった全体的システムの残骸や個人的感情の至上命令に意見を仰ぐなかで、批判精神の単純な行使は不可能になっている。

解体はすべてにおいて勝利した。大量に使用される商業広告が文化的創造に関する判断によりいっそうの影響を与えることを見ることももはやなくなった。それは昔のプロセスだったに過ぎない。今やイデオロギーの不在の地点に到達したのであり、そこではただ広告活動だけが作

用し、前もってなされた批判的判断はすべて排除されている。しかしだからといって、条件反射的な批判的判断がなくなったわけではない。販売技術の複雑なゲームが、自動的に、そして専門家たちがみな驚くことに、文化についての議論の擬似的主題を作り出すにいたっている。それこそが、サガン＝ドルーエ現象の社会学的重要性である。この現象は最近3年間にフランスで最も大きな成功を治めた経験であり、その反響はパリを中心とした文化圏の境界を越えて、労働者国家のなかでも関心を引き覚ましたろう。文化の専門的審判らは、サガン＝ドルーエ現象を眼の当たりにして、自分たちが見逃していたメカニズムの予期せぬ成果を感じ取って、この現象はサーカスの宣伝のような手法によるものだとい口同音に説明した。だが彼らは、職業柄、実体のない批評によってこの実体のない作品（どこが面白いのか説明不能な作品こそが、そもそも混乱を旨とするブルジョワ批評の最も豊かな主題となるのだ。）に反対せざるをえない。彼らは、外部のメカニズムがこの空虚を搾取しにやってくるずっと以前から、批評という知的メカニズムがこの空虚を搾取しにやってくるずっと以前から、批評という知的メカニズムそのものが自分たちのもとを離れてしまっていたという事実を、全く意識できないままである。彼らは、サガン＝ドルーエが、表現手段全般が日常生活における行動手段というものに変化した事実を滑稽なまでに裏返した姿にすぎないことを決して認めようとはしない。この止揚のプロセスは、作者の生をその作品にくらべてますます重要なものとした。次いで、重要な表現など究極的にはなくてもよくなった時代になると、重要な可能性は作者の人物のなかにしか残らなくなった。この作者というものはもはや、まさに、その年令と、流行の悪徳と、風変わりな古い職業よりほかに何も注目に値するものは持ちえなかったのである。

イデオロギー的解体に反対して今統一すべき反対派はそもそも、詩や小説のような助かる見込みのない形式のなかで産み出されているガラクタの批判に専心してはならない。批判せねばならないのは、未来の重要な活動であり、われわれが利用すべき活動である。建築における機能主義理論が社会と道徳についてのもっとも反動的な理解に基づいているという事実は、現在のイデオロギー的解体のより重大なしるしである。つまりそこには、初期のバウハウスやル・コルビュジエの流派の一時的に有効だった部分的寄与に、生と生の枠組みについての明らかに後退した観念がこっそり付け加わっているのである。

とはいえ、1956年以来われわれが新たな闘争の段階に入ったこと、そして革命的勢力の高まりが、あらゆる戦線でこの上なく厄介な障害にぶつかりながらも、以前の時代の諸条件を変革し始めていることは、すべてが示している。同時にわれわれが眼にするものは、社会主義リアリズムが、反資本主義陣営の国々で、そもそもそれを産み出したスターリニストの反動とともに退却しはじめたという事実であり、サガン＝ドルーエ的文化がブルジョワジーの退廃のおそらく乗り越え不可能な段階を記しているという事実であり、結局は、西側で第二次大戦終結以来ずっと役に立ってきた文化的急場しのぎの策が尽きてしまったことが相対的に意識されはじめたという事実である。積極的な価値を再発見できるのは、まさに前衛的少数派だけである。

*1：アンドレイ・ジダーノフ（1896-1948年） ソ連の政治理論家。正統派スターリン主義の擁護者として活動。『文学、哲学、音楽について』（1947年）によって芸術領域での社会主義リアリズムに理論的根拠を与えたことで有名である

退潮の時代における少数派潮流の役割

世界的革命運動の退潮は1920年ののち数年して姿を現し、1950年が近づくにつれて次第に顕著になっていったが、それに5、6年ずれて、文化と日常生活の解放をもたらす新しい事物を肯定しようと試みていた運動の退潮が生じた。そうした運動は、イデオロギー的、物質的重要性を絶えず減少させてゆき、社会において完全に孤立した状態にまで至っている。彼らの行動は、より好都合な条件下でなら、情動的環境を突如として刷新することも可能であるのに、保守的傾向によって公式文化のいかさまゲームのなかに直接入りこむ余地を完全に奪い取られた状態にまで弱められている。これらの運動は、新しい価値の創造においてそれが果たすはずの役割から排除され、ブルジョワジーが自らのプロパガンダに新機軸のニュアンスを付け足してくれるような個人を引っ張りだすための知的労働の予備軍となり果てている。

この分解の地点において、社会における実験的前衛派の重要性は、変革の意志を掲げる苦勞をまったく担わずに、世間に認められた文化の現代的側面を大々的に代表する疑似モダニスト潮流の重要性よりも、一見劣るように見えるかもしれない。しかしながら、現代文化の実際の生産においてそれなりの位置を占め、その文化の生産者として自らの利害を——否定的立場に追いやられているだけにいっそう強く——そこに見出すすべての者は、これらの所与の事実から、終末を迎えつつある社会のモダニストのコメディアンには必然的に欠けている1つの意識を発展させるのである。世間に認められた文化の貧困と、そうした文化による文化的生産の手段の独占に比例して、前衛派の理論と表現の貧困が産み出される。だが、文化についての新しい革命的理解を徐々に産み出しうるのは、この前衛派において他にない。支配的文化と反対文化の萌芽が互いの分離と互いの無力感の頂点に達した時に、この新しい文化理解が明確にならねばならないのである。

革命の退潮の時代における現代文化の歴史は、かくして、刷新の運動の理論と実践が、少数派潮流との分離と解体派の全面的支配にまで切り縮められてきた歴史である。

1930年から第二次世界大戦までの間、人々は革命勢力としてのシュルレアリスムの衰退と同時に、シュルレアリスト自身のコントロールを超えてシュルレアリスムの影響が拡大する状況にも立ち合ってきた。戦後の時期になり、1930年ごろの彼らの発展をたたき壊す2つの要素によって、シュルレアリスムは急速に清算されていった。その2つの要素とは、理論的更新の可能性の欠如と、労働運動における政治的・文化的反動によって示された革命の退潮である。この第2の要素は、例えば、ルーマニアでのシュルレアリスト・グループ*1の消滅を直接規定している。逆に、フランスとベルギーでの〈革命的シュルレアリスト〉*2の運動に素早い分解を余儀なくさせたのは、これら2つの要素のうち特に第1のものである。シュルレアリスムから生まれたフラクションが有効な実験的立場の上に維持されていたベルギーを除き、世界中に散らばったシュルレアリストの潮流のすべてが神秘主義的観念論の陣営に加わったのである。

1945年から1951年にかけて、革命的シュルレアリスト運動の一部を再結集させた「実験芸術家イ

ンターナショナル」——それは雑誌『COBRA』（コペンハーゲン・ブリュッセル・アムステルダム）を発行した——が、デンマーク、オランダ、ベルギーで作られ、次いでドイツに広がった。このグループの長所は、今日の問題の複雑さと広さはそうした組織を必要としているということを理解した点にあった。だが、イデオロギー的厳密さが欠如していたこと、彼らの探求が主として造形芸術の面にあったこと、そしてとりわけ、彼らの実験の条件と展望に対する全体的理論がなかったことによって、彼らはばらばらになってしまった。

レトリズムは、フランスにおいて、既知の美術運動——まさに彼らはそれらが常に衰退していくことを分析していた——のすべてに完全に反対する立場から出発した。あらゆる領域で新しい形態をたえず創造することを自らに課したレトリズム・グループは、1946年から1952年まで有益な活動を行ない続けた。だが、美学分野は昔のものとよく似た一般的枠組みのなかで新たな出発をしなければならないとこぞって認めるといふ観念論的誤りを犯したため、その後、彼らの産み出すものはいくつかの荒唐無稽な実験に限られてしまった。1952年、レトリスト左派が「レトリスト・インターナショナル」を組織し、時代遅れのフラクションを除名した。レトリスト・インターナショナルにおいて、諸潮流との激しい闘争を通して、日常生活への新しい介入の手法が追求されたのである。

イタリアでは、1955年に〈イマジニスト・バウハウスのための国際運動〉というこの上なく強固なセクションを形成した反機能主義の実験集団を除き、古びた芸術的展望にしがみついた前衛集団を形成しようという試みは理論的表現にも到達していなかった。

この間、合衆国から日本まで、西洋文化への追従が支配していた。それも、西洋文化が持つどうでもよい卑俗さを追い求めていたのである（パリのアメリカ人コロニーに集まることを習慣とする合衆国の前衛派は、パリにいて、イデオロギー的・社会的観点からも生態学的観点からさえも切り離されて、最も平板な順応主義に陥っている）。いまだに文化的植民地主義——しばしば政治的抑圧によって引き起こされた——に服している国民が産み出すものは、それぞれの国では進歩的であっても、先進的な文化の中心地では反動的役割を果たす。というのも、古い創造システムとともに乗り越えられてしまった基準に自らの活動の場を結びつけてきた批評家たちは、自分の気分に応じて、ギリシャ映画やグアテマラ小説に新しさを見出すふりをするからである。彼らはそうして、エグゾティスムに依拠するのだが、ことは別の国で遅れて活用される古い形式の再出現に関わる以上、そのエグゾティスムは反エグゾティスムである。だがそれでも、それはエグゾティスムの主な機能は備えている。すなわち、生と創造の現実的諸条件の外に逃げだすという機能である。

労働者国家では、ブレヒトがベルリンで進めた実験だけが、スペクタクルの古典的概念を疑問に付すその態度により、今日われわれにとって重要な構築物と近いものを持っている。ブレヒトだけが権力を保持した社会主義リアリズムの愚かさに抗うことに成功したのである。

社会主義リアリズムが崩壊した今となつては、労働者国家の知識人たちが現代文化の真の問題に革命的なやり方で乱入してくることにすべてを期待できる。ジダーノフ主義が、労働運動の文化的退化だけでなくブルジョワ世界の文化的保守主義の立場をも、最も純粋に表現するものであったとするならば、今日この瞬間に東側でジダーノフ主義に反対して立ち上がっている人々は、その主観的意図がどうであれ、例えばコクトーのような者だけが持つような大きな創造的自由の

ために立ち上がるわけにはいかないだろう。ジダーノフ主義の否定が持つ客観的な意味とは、「清算」のジダーノフ的否定の否定である。ジダーノフ主義を乗り越える唯一可能な方法は、現実的自由の行使であり、それは現在の必要を認識することなのである。

ここでも同様に、過ぎ去ったばかりの年月は、せいぜいのところ、懐旧的愚かさによる混乱した支配に対して混乱した反抗をした時代にすぎなかった。われわれはそれほど多くいたわけではない。だが、われわれは、この時代の趣味やちっぽけな発見にいつまでもかかずらわってはいならない。文化の創造の問題は、世界的規模での革命の新たな前進と関連してはじめて解決されるだろう。

*1：ルーマニアのシュルレアリスト・グループ ルーマニアでは1928年に詩人のサシャ・パナ（1902-81年）がシュルレアリスムの雑誌『ウナ』を拠点に夢や無意識を重視する幻想的なシュルレアリスムを開始した。1931年には『ウナ』は終刊におちいるが、1930年代に入って次々と刊行された『ウルムズ』、『アルゲ』、『ムジ』などの新しい雑誌によって、シュルレアリスム活動は活況を呈する。こうした中で、パナよりも過激に合理主義そのものに反対し、言語の解体を実践するゲラシム・ルカ（1913-）、ポール・パウン（1915?）らが頭角を現してくる。第二次大戦中、これらのシュルレアリストの活動は停滞を余儀なくされるが、大戦終結後の1945年、ルーマニアのシュルレアリストは、ゲラシム・ルカと画家のドルフィ・トロスト（1916-66年）の名で『弁証法の弁証法』を発表し、シュルレアリスムの再生を世界に訴え、ルーマニア・シュルレアリストの復活を果たす。シュルレアリスム自体の革命を訴え、フロイトの無意識理論を踏襲するのではなく「新しい欲望」の創出をめざすこの宣言以降、ルカ、トロスト、パウンらによる「新しいシュルレアリスム」の理論・実践活動が活発に行われるが、1948年、ルーマニアの社会主義体制が確立し、社会主義リアリズムが採用されると、国策に賛同したかつてのシュルレアリスト、セナを除き、ルーマニアのシュルレアリストは全員沈黙を強いられた。ルカとトロストはやがてパリに脱出し、その後、ルカは言語破壊を実践する作品を書き続け、ジル・ドゥルーズから「フランスで最も偉大な詩人」と評されている。

*2：革命的シュルレアリスト 1947年、ブリュッセルでクリスチアン・ドトルモン、パリでノエル・アルノーによって創設されたグループ。大戦中に共産主義者としてレジスタンスを戦った者たちが中心になり、1930年代のシュルレアリストがめざした社会革命と芸術の革命的探究を結合させようとした。グループとしての寿命は18ヶ月と短く、1948年には解体し、その間、『シュルレアリスム革命』誌と『シュルレアリスム革命国際会報』をそれぞれ1号、2回の展覧会とそのカタログ、いくつかのパンフレットを出しただけだが、これらへの参加者・協力者は、ルネ・マグリット、ポール・ヌーージェ、マルセル・マリエン、レイモン・クノー、トリスタン・ツァラらフランスとベルギーのシュルレアリストから抽象表現芸術の作家、ベルクやウェーベルンら現代音楽家、実験映画作家まで多岐にわたり、ヨルン、アベル、コルネイユら後にドトルモンとともに「コブラ」を結成する〈オランダ実験グループ〉のメンバーも含まれていた。

暫定的反対の基本方針

文化における革命的行動は、生を翻訳したり説明したりすることを目的とするのではなく、それを拡大することを目的とせねばならないだろう。いたるところで不幸を退散させねばならない。革命とは、重工業がどのような生産水準にあるか、だれがその主人かというようなことを問うことにあるのではない。人間の搾取とともに、それによって産み出された情動や代償行為、習慣も死に絶えねばならない。今日の可能性と関連して、新しい欲望を定義せねばならない。現在の社会とその社会を破壊しようとしている勢力との闘いのさなかに、より高度な環境の構築と新しい行動様式の条件となる最初の要素をすでに見出ださねばならないのである。それも実験的なやり方で、プロパガンダとして行なうのである。残りのものはすべて過去に属するものであり、過去に仕えるものである。

今や、日常生活を一変させるあらゆる手段を統一的使用することをめざした、組織された集団的作業を企てなければならない。すなわち、われわれはまず、それらの手段が、より大きな自然支配、より大きな自由という展望のなかで、相互に依存し合っていることを認めなければならない。われわれは、新たな行動様式の成果であると同時にその道具でもあるような新しい環境を構築せねばならない。そのために、最初は、現在存在している日常的手段と文化形態を試行錯誤的に利用しつつも、それらの本来の価値に異議を唱えなければならない。新しさの基準自体が、形式に関する発明の基準自体が、個々の芸術、すなわち不十分な断片的手段の伝統的枠組みのなかで、その意味を失ってしまった。そうした芸術は、部分的な更新すらあらかじめ無効となっており、更新そのものが不可能なのである。

われわれは現代文化を拒否するのではなく、それを否定するためにそれを奪い取らねばならない。われわれが直面している文化革命を認めない革命的知識人などというものはありえない。創造的知識人は、どれほど独自の方法であろうと、1つの党の政策をただ単に支持することで革命的にはなりえず、すべての党の横で、文化的上部構造すべての必要な変革を実行することによって革命的となるのである。同様に、ブルジョワ知識人の質を最終的に決定するものは、彼らの社会的出自でも、1つの文化に対する認識——それは確かに批評と創造の共通の出発点だが——でもなく、歴史的にブルジョワ的な諸形態の文化の生産において彼らが果たす役割である。政治について革命的な意見を持つ作家は、ブルジョワ的な文芸批評に称賛されたなら、どんな誤りを自分が犯したか探してみるべきだろう。

文化における革命的戦線のために数多くの実験的潮流の統一が、1956年、イタリアのアルバでの会議によって開始された。その前提となっているものは、われわれが3つの重要な要因を無視しなかったということである。

まず第一に、この統一行動に参加する個人と集団の完全な同意が必要であり、それらの者がそのことによって生じるいくつかの結果を見ようとしないうことを許してこの同意をやりやすくしてはならないということである。いかげんな考えの者や、この方法によって無意識に成功するこ

とを欲している出世主義者は、そこから遠ざけておかねばならない。

第二に、実際に実験的な態度はすべて有用であるとしても、この実験的という語の濫用はたいへいの場合、現在の構造のなかでの芸術的行動、すなわちあらかじめ他人によって発見された芸術的行動を正当化しがちだ、ということを忘れてはならない。唯一の有効な実験的手段は、現存の諸条件に対する正確な批判と、その条件を意図的に乗り越えることに基づいている。他人によって作られた方法的枠組みのなかでの個人的な表現にすぎないものを、創造と呼ぶことはできない。そのことをはっきりと断言せねばならない。創造とは事物や形式のアレンジではない。それは、そのアレンジについての新しい法則を発明することなのである。

最後に、われわれのなかからセクト主義を清算せねばならない。それは限られた目的のために、同盟の可能性のある者との行動の統一に反するからだ。レトリスト・インターナショナルは、いくつかの必要な組織浄化の後、1952年から1955年まで、常に一種の絶対的厳格さへと向かってきた。それは、同じように絶対的な孤立と無能へと道を開き、最終的にはある種の現状維持と、批評と発見の精神の退化を助長した。現実的行動のために、こうしたセクト主義的行動を決定的に乗り越えなければならない。われわれが同志を糾合するか離反させるかは、ただこの基準に則してのみ行なわねばならない。当然のことながら、このことは、みんながわれわれに勧めるように、断絶を放棄せねばならないということの意味するのではない。われわれは逆に、習慣や個人との断絶を今以上に推し進めねばならないと考える。

われわれはわれわれのプログラムを集団的に定義し、芸術的なものであろうとなかろうと、あらゆる手段を使って、規律あるやり方でそれを実現しなければならないのである。

シチュアシオニスト・インターナショナルに向けて

われわれの中心理念は、状況の構築という理念である。すなわち、生の瞬間的環境を具体的に構築すること、そして、それらをより高次の情動的質を備えたものに変形することである。そのためには、生の物理的な舞台装置（デコール）と、この舞台装置によって引き起こされるとともにそれを激しく揺さ振りもする行為という、常に相互に関連し合った2つの大きな構成要素から成る複雑な要因に対して、秩序立ったやり方で介入する方法を確立せねばならない。

生の舞台装置に対するわれわれの行動の展望は、その最終的発展段階では、統一的都市計画という概念に行き着く。統一的都市計画とは、まず第一に、環境の完全な構築に与する手段としての芸術と技術の全体の活用と定義される。この芸術と技術の全体というものは、伝統的芸術に対して旧来の建築が持つ支配力とか、生態学に見られるような専門的な技術や科学的探求を、無秩序な都市計画に偶然に適用することに比して、無限に広く捉えなければならない。統一的都市計画は、例えば、種々様々な飲み物や食べ物の配達も、音の環境も、同じようにうまく掌握せねばならないだろう。それは建築と都市計画の新しい形態の創造と既知の形態の転用——さらにまた、古い詩や古い映画の転用も——の両方を包含するものでなくてはならない。これまでしばしば語られてきた総合芸術なるものは、都市計画のレベルでしか実現できなかった。だが、そ

れはもはや、美学についてのいかなる伝統的定義にも対応しなくなるだろう。統一的都市計画は、その実験的都市のそれぞれにおいて、いくつかの数の力場を通して展開される。われわれは仮にそれを区域（カルチエ）という古典的な言葉で呼ぶことができる。それぞれの区域はその内部で正確な調和を奏で、隣接する諸区域の調和と断絶することもできるだろうし、また、内的調和が可能な限り破壊される方向に働きかけることもできるだろう。

第二に、統一的静市計画はダイナミックなもの、すなわち、人々の行動スタイルとの緊密な関係のなかに置かれたものでなくてはならない。統一的都市計画の最小の構成単位は家ではなく、建築物の複合体である。この建築複合体は、ある1つの環境もしくは一連の不調和な環境を、構築された状況のレベルに合わせて条件づけるあらゆる要因の集合である。空間的發展は、実験都市によって決定されることになる情動的現実を考慮せねばならない。われわれの同志のある者は、心理状態が地区に対応する理論を提唱した。それによると、都市の各々の地区は1つの単純な感情を引き起こすようになり、主体は事情をわきまえたうえでそれにさらされることになるということである。この計画により、偶発的な初期感情を軽視する動きから様々な当を得た結論を導き出すことができ、この計画の実現によってこの動きを加速させることができるように思われる。新しい建築、自由な建築を求める同志たちは、この新しい建築というものが、まず何より、自由な、詩的な線と形態——今日、「叙情的抽象（アブストラクシオン・リリック）」絵画の唱える意味においての——に働きかけるのではなく、むしろ部屋や廊下、街路などの雰囲気、建築のなかに含まれた人々の身振りと結び付いた雰囲気が持つ効果に働きかけるものであることを理解せねばならない。建築は、感動的な形態よりもむしろ感動的な状況を素材として持つことによって進むべきである。そして、このような素材から出発した実験は、未知の形態へと導かれるだろう。心理地理学的な探求、すなわち「意識的に整備された環境かそうでないかにかかわらず、地理的環境が諸個人の情動的な行動様式に対して直接働きかけてくる、その厳密な法則と正確な効果を研究する」探求は、それゆえ、今日の都市集合体を積極的に観察することと、シチュアショニスト的な都市の構造についての仮説を確立することという二重の意味を持つ。心理地理学の進歩は、その観察方法を統計学的に拡大することによりかなり大きく依存しているが、主要には、都市計画への具体的介入という手段による実験によるところが大きい。この段階までは、心理地理学の初期データについての客観的真理を確信することはできない。だが、たとえそのデータが誤ったものであったとしても、それは真の問題に対する誤った解答というにすぎないだろう。

行動様式に対するわれわれの行動は、風俗習慣における革命の他の望ましい諸側面と結びついたものであるが、簡潔に言って、それは新しい本質を持った遊びの介入と定義されるだろう。その最も一般的な目的は、生の非凡な部分を拡大し、生の無価値な瞬間を可能な限り減少させることにある。したがって、それは、現在研究されている生物学的手法よりもはるかに真面目な、人間の生の量的増大の企てとして語ることもできよう。まさにその点において、その企ては、どれだけ発展するか予見できない質的増大をも含むのである。シチュアショニスト的な遊びは、遊戯の競争的性格と日常生活からの分離を根底的に否定するというまさにその点において、遊びの古典的把握と区別される。それとは逆に、シチュアショニスト的な遊びは、自由と遊びが支配する未来世界を保証するものを支持する道徳的選択としてしか現れてこない。このことは明らかに、わ

われわれの時代が到達した生産力の水準において、余暇が持続的かつ急速に増大するという確信と結びついている。また同時に、それは、余暇をめぐる闘争——その階級闘争における重要性はこれまで十分に分析されてきたとは言えない——がわれわれの眼前で展開 されているという事実の認識とも深く結びついている。今日、支配階級は、革命的プロレタリアートが彼らから奪い取った余暇を、支配階級自身のために使うことに成功し、巨大な余暇産業部門を発展させている。この余暇産業なるものは、大衆をたぶらかすブルジョワジーのイデオロギーと趣味の副産物によるプロレタリアートの愚鈍化の比類なき道具と化している。おそらく、アメリカの労働者階級が政治化されない理由の1つは、テレビによる大衆の低次元化が大規模になされていることに求めねばならないだろう。プロレタリアートは、集团的圧力によって、自らの労働の価格をその労働の生産に必要な最低限価格よりもほんの少しだけ高くすることができるようになったために、その闘争能力を拡大しただけでなく、闘争の領域まで拡大したのである。その時、経済と政治に直接関わる争いに平行して、この闘争の様々な新しい形態が生まれた。革命的プロパガンダは、現在までのところ、先進的産業の発展がそうした闘争形態を必然的に産み出してきたすべての国で、闘争の形態としては常に抑えられてきたと言える。下部構造の必要な変化が上部構造レベルでの過失や弱点によって遅らせられることがあるということ、それこそは、20世紀のいくつかの経験が不幸にも示してきたことである。余暇の戦場に新たな勢力を投入しなければならない。われわれはそこでわれわれ自身の場を占めることだろう。

新しい行動様式の初歩的試みが、われわれが漂流と名付けたものによって既に成し遂げられている。漂流とは、環境の素早い変化による情動の逸脱（デペイズマン）の実践であると同時に、心理地理学とシチュアシオニスト的心理学の研究方法でもある。だが、遊戯的創造に対するこうした意志の適用は、人間関係の既知の形態すべてに拡大し、そして、例えば、友情や愛情のような感情の歴史的進化に影響を与えるものとせねばならない。どう考えようと、われわれの探求の本質が賭られているのは、まさに状況の構築という仮説なのである。

1人の人間の生は偶発的な状況の連続である。そして、それらの状況のどれ1つとして他のものと厳密に同じではないとしても、少なくともそれらの状況は、多くの場合、あまりに互いに区別がつかず輝きのないものなので、完全に同じものであるという印象を与える。こうした事情の当然の帰結として、1人の生における魅力ある既知の状況がその人の生を完全に固定し制限することになる。われわれは状況の構築、すなわち、集团的環境の構築、ある瞬間の質を決定する印象の全体の構築を試みねばならない。ある定められた時間に諸個人からなるグループの統合という単純な例を挙げるなら、われわれが持っている知識と物質的手段とを考慮しつつ、どのような場の組織化、どのような参加者の選択、どのような事件の挑発が望ましい環境に適したものを研究すべきだろう。確かに、1つの状況の力は、統一的都市計画の実現やシチュアシオニスト世代の教育によって、時間的にも空間的にもかなり拡大されるだろう。だが、状況の構築は、スペクタクル概念の現代的破綻のかなたに開始される。非-介入というスペクタクルの原理そのものが、古い世界の疎外といかに深く結び付いているかは容易に見てとれる。それとは逆に、文化における革命的探求のなかで最も価値あるものが、スペクタクルの観客のヒーローへの心理的同一化を破壊し、自分の生を一変させる能力を引き出すことによって、その観客を積極的な行動に引き

ずり込むようにどれほど努めてきたかもよく知られている。状況とは、したがって、それを構築する者たちによって生きられるために作られるものである。そこでは、受動的とは言わないまでも少なくとも単に端役的なだけの「公衆」の役割は、常に減少することになる一方で、もはや役者ではなく、言葉の新しい意味において「生きる者」と呼ばれる者の関与するところが増大する。

言わば詩的な客体と主体とを拡大せねばならない。これらのものは現在は、不幸にもあまりにわずかなため、ほんの少しでも見つければその感情的重要性が誇張される。こうした詩的客体のなかで詩的主体の遊びを組織せねばならない。それこそが、本質的に過渡的な、われわれのプログラムのすべてである。われわれの状況は未来なき場、移行の場となるだろう。芸術であろうと他の何であろうとその不変的性格なるものは、われわれの真剣な考察の対象ではない。永遠の観念は、人間が自らの行為について持ち得る観念のなかでも最もおぞましいものなのである。

シチュアシオニスト的技術は、まだこれから発明されねばならない。だが、われわれは、どのような任務であれ、それが出現するのは、その実現に必要な物質的条件がすでに存在するか、少なくとも形成途上にあるところだけである、ということを知っている。われわれは小規模な実験段階から始めねばならない。おそらく、そのためのシナリオとして、状況のプラン——当面はその不十分性は避けられないが——を準備せねばならない。したがって、記号表現のシステムを普及せねばならないだろう。その正確さは、われわれが構築の実験を重ね、いっそうよくそれを理解するにつれて増してゆく。シチュアシオニスト的感動を、行為の極端な集中あるいは極端な拡散（前者のケースの近似的イメージを与えるものは古典悲劇であり、後者のそれは漂流である）に応じて決定する法則のような様々な法則を発見し、検証せねばならないだろう。状況の構築は、明確な目的に用いられる直接的手段に加え、その肯定的段階において再生産技術の新しい適用をコントロールすることになるだろう。例えば、ある状況のいくつかの側面を別の状況のなかに直接映し出すことによって変化と干渉を引き起こすテレビを構想することもできる。だが、より単純なやり方としては、ニュース映画と呼ばれる映画が、ニュース〔＝新しいもの〕という名に値しはじめることもできるだろう。そのような映画は、状況を構成する要素がまだ異なる状況を引き起こすようになる以前に、その最も意義深い瞬間をシチュアシオニストの記録文書のために定着することに専心する新しいドキュメンタリーの流派を形成するのである。状況の体系的構築によって以前には存在していなかった感情が産み出されるはずである。そうでそうである以上、映画はその新しい情動の普及において最大限の教育的役目を見出すだろう。

シチュアシオニストの理論は、生の非連続性という考えを断固として支持する。統一性という概念は、全人生——そこにおいては、生は不死の魂への信仰と、結局のところ、労働の分割〔＝分業〕に基づいた反動的欺瞞である——というパースペクティブから、生のばらばらな諸瞬間というパースペクティブ、シチュアシオニスト的手段の統一利用によって各々の瞬間を構築するというパースペクティブへと置き換えられねばならない。階級なき社会では、もはや画家は存在しないだろう。存在するのは、何よりも絵画を作るシチュアシオニストだけである。

欲望とそれに敵対する現実との絶えざる衝突の後で、生の主要な感情的ドラマはまさに時間の流れの感覚だけであるように思える。シチュアシオニスト的態度とは、感動の固定化をめざしてきた美的手法とは逆に、時が過ぎ行くことに賭けることにある。感動と時間とが過ぎ去ること

に対するシチュアシオニストの挑戦は、遊びと感動的な時期を増大させることにおいて常により遠くまで行くことによって、変化に対して常に勝ちをおさめる賭けだろう。今この瞬間のわれわれにとって、そのような賭をすることは明らかに容易なことではない。しかしながら、1000度それに敗れることになるろうとも、われわれには他の前進方法を選ぶことはできない。

少数派シチュアシオニストは、まずレトリスト左派のなかで、次にこの左派が最終的に支配したレトリスト・インターナショナルのなかで、潮流として構成されてきた。これと同じ客観的運動によって、最近の多くの前衛的グループが同じ次元の結論に達した。われわれは全員で、近い過去の遺物をすべて除去せねばならない。今日われわれは、文化における革命的な前衛の統一された行動のための同意は、そうしたプログラムの上になされるべきだと考えている。われわれには決まったやり方も、決定的な成果もない。われわれはただ、われわれが現在決定しているいくつかの方向と、まだこれから決定せねばならない他の方向において、集団的に実行すべき実験的探求を提起しているだけである。シチュアシオニストの最初の成果に到達する困難そのものが、われわれが入っていこうとしている領域の新しさを証明している。われわれの街路の見方を変えるものは、われわれの絵画の見方を変えるものよりも重要である。われわれの作業仮説は、どこから訪れるか分からぬ未来の激動の度ごとに再検討されるであろう。

趣味の問題について一種の無能力に甘んじている革命的知識人・芸術家の側から主として、この「シチュアシオニズム」というものはまったく不快であるという言葉が聞こえてくる。彼らは、われわれは美しいものは何も作らなかったとか、ジッドについて話したほうがましだとか、われわれに興味を持つ理由は誰にもはっきり解らないとか言っているようだ。これまで既に十分すぎるほどのスキャンダルを引き起こしてきた数々の態度——それはただ目立ちたいがためのものにすぎない——をただ繰り返しているだけだと言ってわれわれを非難し、言葉を濁している。距離を保ちあるいは再び取るために、いくつかの折りにわれわれが採用せねばならないと思った手法に対して、彼らは憤慨しているようでもある。われわれの答えはこうだ。これが君たちの興味を引くかどうかはどうでもいい。文化の創造の新しい諸条件のなかで君たち自身が興味を引く存在になることができるかどうかの問題なのだ。

革命的知識人と芸術家よ、君たちの役目は、われわれが自由の敵と歩みを同じくするのを拒む時に、自由が侮辱されたと喚きたてることではない。君たちは、既成のものは自分たちを困惑させないという理由ですべてを既成のものに連れ戻そうとしてきたブルジョワ耽美主義者を模倣すべきではない。いかなる創造も決して純粋ではないことを君たちは知っている。君たちの役目は、国際的な前衛が作るものを探しだし、そのプログラムを構成する批判に参加して、それを支持することを呼びかけることなのだ。

われわれの当面の任務

われわれは、労働者の党あるいはそこに存在する急進的潮流に対して次のような必要性を主張しなければならない。すなわち、先進資本主義のプロパガンダ方法の影響力と情動レベルで闘

うため、首尾一貫したイデオロギー的行動を検討すること、資本主義的生活様式の反映に反対して、具体的に、あらゆる機会に、望ましい別の生活様式を対置すること、ハイパー・ポリティックなあらゆる手段によって、幸福のブルジョワ的観念を破壊すること、である。同時に、社会の支配階級のなかには、退屈から、あるいはまた新しさへの欲求から、最終的にはこの社会の消滅を引き起こすことになるものを求めて常に競い合ってきた要素が存在することを考慮して、われわれは、われわれに欠けている莫大な資源のいくつかを持っている人々に、科学的でありかつ収益性のある研究に投入できる融資と同様の融資によって、われわれの実験を実現する手段を与えてくれるよう促さねばならない。

われわれは、いたるところで、支配的文化に対する革命的代案を提出せねばならない。今この瞬間に全体的展望なしに行われているあらゆる探求を調整しなければならない。批判とプロパガンダによって、すべての国の最先端の芸術家と知識人が、共通の行動のためにわれわれと接触するよう導かねばならない。

われわれは、われわれの行動の前段階に関与し、まだわれわれに合流することのできる者たちすべてと、このプログラムをもとにいつでも議論を再開できることを表明しなければならない。

われわれは、統一的都市計画、実験的行動様式、ハイパー・ポリティックなプロパガンダ、環境の構築という合い言葉を前面に押し出さねばならない。情動の解釈はもう十分になされてきた。今なすべきことは、別の情動を発見することである。

シチュアシオニストは様々に語られてきた。少なくとも、欧米諸国ではそういえる。欧米の思想や運動をいち早く紹介することに長けているこの国に於いて、シチュアシオニストへの注目の少なさは、特筆すべき興味深い問題である。^{*}1 戦前戦後を通じて、この国のマルクス主義の「発達」は、国際的にもよく知られていた。アカデミズムも含めて、左翼の影響力は非常に大きなものがあった。にもかかわらず、シチュアシオニストがほとんど注目を集めなかったのには大きく3つの理由があるように思われる。1つは、シチュアシオニストの出自に関わる。ギー・ドゥボール、ラオール・ヴァネイジェム、アスガー・ヨルン、アティラ・コタンニなどの主要なメンバーのいずれもが政治活動家であったり、マルクス主義の知識人であったりしたわけではなかった。彼らは、後に述べるように戦前のダダ、シュールレアリスムの運動、戦時中のレジスタンスなどに関わってきたり、影響を受けてきたアーティストだった。従って、いわゆる政治運動やマルクス主義の文脈からは彼らの運動や存在は見えなかったに違いないということが言える。第2に、かれらの出自であるアヴァンギャルドの芸術運動のなかで、彼らが占めた位置がこれまた日本における理解の周縁部分に位置するものだったということができる。アヴァンギャルド運動の日本での捉え方によれば、戦前のダダ、シュールレアリスムの運動を戦後に媒介する最も重要な人物がアンドレ・ブルトンであったということになる。このこと自体は決して誤りとはいえないが、しかし、アヴァンギャルド運動の多様性がブルトンの名声の影にくかくされてしまった感がなくもない。シチュアシオニストたちは、特に戦後のブルトンの運動には批判的であり、ブルトンとは別の道をたどった。戦時中亡命していたブルトンと、ナチス支配地域でレジスタンスに参加していたシュールリアリストたちの間で、政治への認識の隔たりがあり、それは戦後のアヴァンギャルド芸術運動の政治との関わりに関して大きな食い違いを生ずる原因ともなった。S I の前身のひとつであるCOBRAの運動は、神秘主義に傾斜したブルトンのシュールレアリスムへの反発として結成されたものであった。こうした事情が彼らの紹介を遅らせたことになる。そして、最後に、彼らの問題意識がいわゆる「芸術」の枠を超えてた社会変革への欲求に支えられていたことがあげられる。そのことが芸術プロパーからのアプローチを試みる人々にとっては、むしろ逸脱とみなされ、芸術や文化の運動というよりはむしろ政治運動とみなされた。しかし、政治運動の側から見れば、シチュアシオニストが社会変革の中心的な「場」として設定したのが、都市空間と日常生活であったことは、労働者階級と工場に拠点を築こうとしてきた伝統的な左翼やマルクス主義の問題意識と大きくずれることになった。60年代は、都市空間の中で、文化と政治を横断し、労働と生活を横断し、更に、プロテスタンティズムも労働倫理も異化する大衆の自立的な欲望の噴出した時代であった。シチュアシオニストは、この時代の意識をもっともよく体現した運動になり得たのは、彼らが変革の拠点を日常生活と消費にかかわる商品経済とメディアに据えたからに他ならない。68年の5月革命はそのことを端的に表明する運動であった。

シチュアシオニストの位置は、1968年のパリ5月革命をきっかけに大きく変化した。それは、5月革命だけに原因があったということではなく、60年代末くらいから資本主義のありようと反体制運動の流れがはっきりと1つの転換期を迎えたということに関係している。つまり、工場労

働者を中心とする階級構成が拡散し、労働組合を中心とする運動の形態が徐々に後退し、既成の左翼政党の指導に従わない、自立した小集団が簇生し、働く権利よりも働かなくても生活できる権利を、労働の尊厳よりも労働から解放された多様な文化と生活の様式への権利を主張し始めた。こうした傾向が必然的に工場よりも都市空間そのものを反体制運動やカウンター・カルチャーの運動の主要なアリーナとすることになったのは当然のことといえた。

ギー・ドゥボールの『スペクタクルの社会』に見られるように、シチュアシオニストの視野に工場労働者も入っていた。しかし、工場労働者が明確に運動の主体として理解されるのは、マルクス主義の影響がはっきりする後のことだ。むしろ本分冊に収録されている初期の文章には労働者階級といった「労働」を参照点とした人々の分類はそれほど明確には現れなていない。このことは、シチュアシオニストの議論に少なからぬ矛盾を持ち込むことになったと思う。というのは、ドゥボールの『スペクタクルの社会』がルカーチやマルクスに影響されたことをあまりに強調することはかえってこの本やドゥボールのおもしろさを半減させてしまうかもしれないからだ。

『スペクタクルの社会』は、ドゥボールがレトリスト、コブラ、イマジニスト・バウハウスといったシチュアシオニストに先行するいくつかのアヴァンギャルドの運動のなかから継承してきた観点とマルクス主義やアナルコ・サンディカリズムから受け継いだ観点が共存はしているものの両者の有機的な結びつきを実現するには至っていないからだ。とはいえ、ドゥボールのこの本の意義は、従来のマルクス主義者——多分、アンリ・ルフェーブルを例外として——が試みなかった消費社会としての資本主義批判を、アヴァンギャルド芸術運動のなかで蓄積された資本主義批判の方法と観点を継承して展開したところにある。マルクス主義やその運動史の記述は、必ずしもオーソドクスとは言えないとしても、全く斬新なものというわけでもない。この本をこうしたマルクス主義の文脈の部分で代表させるとすれば、評議会社会主義派のマルクス主義という以外に新しいものは見いだせないかもしれない。ところが、すでに今世紀はじめのロシア革命、ドイツ革命やイタリアの評議会運動のなかで繰り返し提起されてきた工場評議会の思想は、当時からひとつの大きな問題をかかえていた。それは、革命の拠点を工場におくことによって、生産的労働者の生産組織と政治的意志決定の組織を有機的に結びつけることを構想するものであった反面、工場の外で主として遂行される〈労働力〉再生産過程を労働者が自立して担い、そこに関わる政治的意志決定のための組織を、工場と同様のレベルで理解することができなかったということである。失業者や子ども、高齢者、病者、そして多くの場合、女性もこうした評議会運動の中心ではなく周辺に追いやられざるを得なかった。こうした帰結は、工場を中心とする労働運動と生産的労働に高い評価を置くマルクス主義の伝統と無関係ではなかった。この意味でも、ルフェーブルが都市という空間に注目した意義は大きいのである。そして、このルフェーブルの観点をふまえて消費社会を全面に押し立てられたのは、最初から工場労働者といった集団性からは除外されていたアーティストという立場にいたドゥボールたちの位置のもつ意義が大きかった。

商品の生産ではなく、消費様式に着目して、スペクタクル化された社会が生み出す受動的な大衆像がマルクス主義につけ加えられたことによって——たとえ、そのつなぎ目が必ずしも完璧ではないとしても——、マルクス主義そのものが変わりうる可能性を示したこと、その意味で、『スペクタクルの社会』は、私には刺激的なのだった。しかもシチュアシオニストは、S Iの解体

にもかかわらず、イタリアのアウトノミア運動とともに、70年代以降のラディカルな思想と運動のアンダーグラウンドを支える非常にユニークな位置を占め続けた。

資本主義が市場経済の「無政府性」と工場内分業における資本家の権威主義的な管理に二分されているというのは、必ずしも正しくない。経済学が長年なじんできたこの二分法は、資本主義が地理的な空間の上に配置された機構であるということをすっかり忘れている。都市計画が近代社会においてどのような意味と位置を占めているのかがこうした空間的な概念の欠如したオーソドクスな経済学——もちろんマルクス主義のそれも含めてだが——には理解できない。シチュアシオニストは、都市批判の方法と実践に関して、いくつかの重要な概念を提起した。「統一的都市計画」「心理地理学」「漂流」そしてスペクタクル批判という観点そのものがこの都市の風景とそこに込められた商品化の意識下での強制への鋭い批判だった。「1950年代末の統一的都市計画」（本書所収）に、シチュアシオニストの都市論の観点が表明されている。「統一的都市計画」は、日本語のニュアンスからすると非常に堅苦しい、計画化の発想をよりいっそう押し進めるような印象——たとえば、資本主義の無政府性を超克する社会主義的な計画経済といった印象——を与える。しかし、そうではない。統一的都市計画は、「都市計画批判」であり、学説ではないばかりでなく、「機能主義の乗り越え」「情熱的な機能的環境に到達すること」をめざす「未来都市の社会空間のための実験場を目指している」というのである。

資本主義の都市は機能主義を追求している一方で、資本主義なりの非機能主義的な側面を常に都市の中に残す。たとえば、教会建築がそれだ。教会は、資本主義的な機能主義にとって無用のものなのではなく、教会は資本主義を、あるいはスペクタクルの受動的な参加を支える「心理的-機能的現実」を体現しているのである。資本主義が必ずしも経済的合理性や近代合理主義の枠組みにがんじがらめに縛られた制度だとはみていないこうしたシチュアシオニストの観点は、彼らの戦略的な対抗領域についての目の付け所のラディカルさと結びついている。つまり、合理主義では処理できない人々の心理的、情動的な諸要素を資本主義はそれなりの方法で——たとえば、教会、映画、ショッピング街、そして現在ならば、テレビやビデオ、そして日本ならば教会の代わりに皇室がその役割を担っているといえよう——処理しているのである。こうした資本主義の「状況」に対して、次のように、積極的、主体的な状況の構築を可能とする実践が第一の課題とされたのだ。「統一的都市計画〔UU〕は、住宅問題と同様、美的問題とも区別される。統一的都市計画は、われわれの文化の原理である受動的スペクタクルに対抗するものである。われわれの文化においては、人間の介入手段が増した分途方もないまでにスペクタクルの組織化が拡大している。今日、ガラス張りの観光バスで遊覧する旅行者にとっては、都市そのものが嘆かわしいスペクタクル、美術館の補足物と化している。これに対してUUは、都市環境を参加による遊びの場とみなすのである」「都市環境を参加による遊びの場」とすることを主張するシチュアシオニストの観点は、単に都市における居住環境の改善といった発想とは根本的に異なったものを持っている。多くの良心的な都市計画家が意図せざる結果として加担する事になる快適な居住環境=資本にとっての最適な〈労働力〉の再生産という結びつきが少なくとも「遊び」というキーワードによって切断されている。

しかし、都市の遊技施設や文字どおりのスペクタクルの装置の蔓延を前にして、「遊び」という概念がはたしてどれだけの有効性を持つものなのなのかという疑問が当然生ずるだろう。シチュアシオニストたちは、資本主義の消費都市の機能としての遊びを無視していたのだろうか。彼らは、都市をもっぱら「工業都市」「生産都市」としてとらえていたのだろうか。いや、そうではない。上の引用でもわかるとおり、「ガラス張りの観光バスで遊覧する旅行者にとっては、都市そのものが嘆かわしいスペクタクル」であることを指摘している。都市がスペクタクルの機能を持つのは、それが消費と結びつく場合である。観光は、観光産業によって組織され、ショッピングと結びつけられる。盛り場で遊ぶということは、金を使うということと同義である。シチュアシオニストのいう「遊び」はこれとは正反対の性格を持つものだ。

「漂流」はシチュアシオニストの重要な状況の構築のための実践を意味している。受動的なスペクタクルに対して、積極的に環境に関与し、環境を変える実践であり、同時に、資本主義のスペクタクルが生み出した労働や遊戯のカテゴリーを異化し、「遊戯的=創造的行動を肯定すること」であった。^{*2}シチュアシオニストたちは、都市の持つ欲望喚起の環境の危険性をよく知っており、「漂流」の実践にいくつかのガイドラインすら設けた。「同一の認識に達した2、3人の少グループが数多く存在する」こととか、「2つの睡眠時間に挟まれた時間という意味での1日」とか、といった注意を与えている。漂流は、「たむろする」という日本語が持つある種のいかがわしさとより目的意識的な都市空間の利用を、戦略的、集团的に組み込んだものといえるかもしれない。

「一貫性に乏しい生活様式、（略）いかがわしいと見なされながらも、われわれの周りで常に人気を博してきたある種の悪ふざけ——たとえば、夜中に取り壊し中の建物に入り込んだり、交通ストの時に、でたらめな方向に車を走らせて混乱を悪化させる目的で、パリの街をひっきりなしにヒッチハイクして回ったり、侵入を禁じられているパリの地下納骨場〔カタコンブ〕の地下道をさまよい歩いたりすること——までもが、まさに漂流の感覚以外の何者でもない、より一般的な感覚に属する行為となりうる」

こうなると、漂流は、ストリートのサブカルチャーと非常に近いものとなる。パンクスや黒人の若者文化のライフスタイルに同様の傾向を見て取ることは難しくない。

都市はパラマーケットの空間的な構築物である。市場経済なるものが流通させる商品の本体や貨幣を取りまく商品に関する情報は都市の街路や都市を行き交う人々のコミュニケーション、マスメディアという情報神経系によって初めて人々の欲望のシナプスを刺激することになる。都市はこの意味で資本主義が仕組んだ欲望の生産工場でもあるのだ。消費は、それ自体としては何も刺激的なことではない。むしろ、商品を取得するために自らの欲望を高め、貨幣を手放す瞬間を迎えるまでのプロセスが重要なのだ。まるで、セックスで絶頂期を迎えたり、射精の瞬間を迎えるために、そのプロセスを楽しむように。欲望の「絶頂期」とは、消費者が貨幣を支出する瞬間である。そして、貨幣を支出し終わった消費者は、都市の街路から姿を消してゆく。都市は、まさにこうした消費のトランス状態を提供する空間である。「漂流」は、この都市に仕組まれたコードから逸脱し、マニュアル化された欲望の高まりと貨幣と商品に集約される行為に背を向ける実践だといえる。それは、消費を制度化するパラマーケットに、対抗的な情報の回路を組み込み

、あるいは自らの身体を駆使して、パラマーケットの回路図を作り替える実験でもあるのだ。

こうしたシチュアシオニストの実践は、心理地理学とともに、ダダイズム、シュールレアリスムやレトリストの試みを受け継ぐものだろう。しかし、フロイトの無意識に依拠したシュールレアリスムによる自動筆記や都市の遊歩に着想の一端を得ていたとしても、最終的にシチュアシオニストが試みようとしたのが、個人の自己変革ではなく、社会そのものの変革にあったということ、つまり、状況の構築にあったということ、この強固な社会性が芸術や文化の領域に意図的に、しかも挑戦的に持ち込まれたために、シチュアシオニストの運動は、個人主義的なアーティストとの対立を常にはらみ、また、前衛芸術も含む「芸術」のカテゴリーとは最初からずれた位相を抱え込みつつ、しかしなおかつ文化・芸術運動であり続けようとしたということ、このことがシチュアシオニストの興味深い点でもあり、戦後の前衛芸術運動の中ですら余り積極的に評価されなかった理由でもあったといえよう。そして、50年代から60年代にかけてのビート族とか実存主義のカウンターカルチャーに対して、そうした都市のボヘミアン的なライスタイルをも脱構築しようとする発想を持っている。多分、こうした「漂流」はドゥルーズ=ガタリが「ノマド」に与えたラディカリズム*3やホームレスやスクワッターによる意図的な街路の住居化とも通底するものだといえよう。

スペクタクルとしての都市への批判が、実践的なレベルにまで高められたのが68年のパリ5月革命だとよく言われる。確かにパリの5月の運動にシチュアシオニストが果たした役割は大きかったようだ。*4だがすでに彼らは60年代のはじめに、今後の10年を見通すような分析を提示している。機関誌の7号に掲載された「不運な時代の終わり」ではスペクタクルの拡大とともに、それに抵抗する運動も拡がり、労働現場では労働の秩序そのものに対抗し、労働者を資本主義に統合する装置と成り下がった労働組合を敵に回す大衆的な労働者が出現しつつあることを、具体的ないくつかの自立した労働者たちの闘争のなかに見て取っている。しかも、労働者達の闘争を単に労働現場における労働者の闘争ではなく、工場の壁を超えた拡がりを含意した社会的な闘争と捉えていた。たとえば、1961年1月にリエージュのストライキの労働者たちによる新聞『ラ・ミューゼ』の印刷機の破壊は、政府や社会主義政党、労働組合の官僚が独占するメディアが山猫ストの労働者達の闘争を歪曲する情報操作が労働者の運動にとって深刻な問題になっていることを背景としたものだった。2月のナポリでの路面電車のストライキに端を発した労働者達の叛乱は、「通勤時間に対する直接的な叛乱」であると捉えられている。シチュアシオニストは、都市やメディアといった従来のマルクス主義が闘争のアリーナの主題としえなかった課題をむしろ全面に据えた。そして、共産主義の構想を単なる生産様式の革命ではなく「実現されたアートの社会」「生活の諸事象の自由な構築」であるとみたのである。これは、ちょうど同じ時期に、徐々に姿を整えつつあったイタリアの非共産党系のマルクス主義者達アントニオ・ネグリやセルジオ・ボローニャ、そして共産党内にいたマリオ・トロンティなどが、党と労働組合から自立した労働者の闘争に注目し、後にアウトノミアと呼ばれるような運動へとつながってゆく思想の流れを創り出した時期と重なる。イタリアでもこの時期、労働の拒否、社会的工場といった概念へと結びついてゆくいくつかの新しい概念が提出つれ、生産的労働者主義を批判するようになっていったのである。

「消費」というカテゴリーが資本主義の転覆と結びつくラディカルな領域を形成するということは、生産点に重点を置く既成の左翼にとってはにわかに肯定しがたい事実であったに違いない。都市の叛乱は常に工場の内部や党、組合の官僚組織によって制度化され、「生活」の革命は、「生産」の革命にとって換えられようとしてきた。この意味で、不定形な都市の路上での叛乱、暴動は、こうした組織された左翼の運動に利用できる限りで評価されたにすぎない。

多分、シチュアシオニストが示したワッツ暴動に対する評価ほどこうした既成の左翼との立場の違いを鮮明にしたものはないかもしれない。機関誌の10号に掲載された「スペクタクル商品経済の衰退と没落」のなかで、ワッツ暴動を「労働者-消費者がヒエラルキー的に商品価値に従属させられる商品世界に反対する商品に対する叛乱である」と述べている。公民権運動の枠を超えて、都市の叛乱に向かったアメリカ合衆国の黒人の闘争の中に、シチュアシオニストは「合衆国の黒人の問題」を見いだしたばかりでなく、彼らがスペクタクルの商品経済の中に置かれた位置を通してはっきりしてきた「アメリカの問題」、つまり「階級的な叛乱」を見出そうとした。

「アメリカの黒人は近代産業の産物である。ちょうどエレクトロニクス、広告、あるいはサイクロトロンのように。そして彼らはその矛盾を体現しているのである。彼らは、スペクタクル的なパラダイスが統合しなければならないと同時に排除しなければならない人々でもあるが、その結果として、スペクタクルと人間的な行動の敵対が全体的に彼らを通じて明らかにされるのである。スペクタクルは、商品と同じように普遍的である。しかし商品の世界が階級対立に基づいているので、商品そのものもヒエラルキー的なのである。商品の必要は——そして従ってその役割が商品世界を周知させるスペクタクルの必要は——同時に、至る所でヒエラルキー的に、普遍的なヒエラルキー化をたらずのである」従って、「これは、人種暴動ではない」のであって、攻撃された白人は、商品のための積極的なしもべである警官たちであり、黒人の連帯は、黒人の商店主やドライバーまで拡がらなかったと指摘している。そして、商店の略奪行為は、ある種の「ポトラッチ的破壊」であり、自然で人間的な豊かな社会ではなく、商品の豊かな社会へのごく「自然な反応」だという観点から支持を表明した。多分、こうした黒人暴動に対して、既成の左翼は「貧困」の問題として理解しようとするだろう。それに対して、シチュアシオニストはむしろ「貧困」という「欠如」の概念ではなく、「商品の拒否」「スペクタクルの拒否」という積極的な意味を与えた。合衆国の白人達がこのスペクタクル商品経済に参加し、その奴隷となっているのに対して、黒人達は最初からこのスペクタクル商品へのアクセスを拒否された存在であった。そのことをむしろ積極的に評価し、そこに生み出されるオルタナティブな生活様式の可能性を最大限に評価しようとしたのだ。ここには、「貧困」と呼ばれるネガティブなライフスタイル——たとえそれが強制されたものであれ——を商品経済の豊かさで解決するのではない、別の道への可能性を見ようとする意志が働いている。

この観点が重要なのは、このワッツの叛乱から四半世紀以上たって再び引き起こされた同じロサンゼルスにおける黒人の暴動の分析にもそのまま通用するからである。マイノリティの黒人がマイノリティのコリアンと敵対したということが暴動の本質なのではない。この暴動の背後にスペクタクル商品経済の構造を見出すこと、あるいは「消費という麻薬」を見出すことが必要であり、シチュアシオニストのこの観点はそのための重要な問題提起となっている。そしてさらに

重要なのは、スペクタクル商品経済のヒエラルキーの最底辺に位置するすべての人々を、人種や性別を超えて連帯しうる観点を提供したことだろう。都市の暴動が必ず商店の略奪、車への放火といったきまりきったパターンをたどるのは、何もそこに商店があり、車があるからではない。いや、都市という空間が商店や車によって支配されていること、人々の生活の空間が、商品と〈労働力〉や消費者の移動の機械によって占領されているということ、普段は意識すらされないこのごく当たり前の風景を都市の暴動は自覚化させるのである。そしてここにも、アウトノミア運動のなかでの集団万引き（インフレによる実質賃金の低下に対して、生活手段価格を「ゼロ」にすることで対抗しようとしたもの）の発想との共通性を見出すことができる。そして、また、生活の基本的な基盤である住宅の商品化に対して、スクウォッターの運動が世界中の大都市で現在まで大量に引き起こされていることのなかにもこのシチュアシオニストのスペクタクル商品経済批判の観点から見いだせる意義は非常に大きいといえる。

こうした労働者たちは、既成の政治的な文脈からすれば、明らかに脱政治化され、あるいは犯罪的な集団であった。シチュアシオニストは、こうした労働者の「犯罪化」を18世紀末から19世紀はじめに出現したラダイトたちが当時被った批判に近いものがあるとみている。ただし、かれらが「人々から仕事を奪う生産機械を破壊することを目的としていた」とすれば、現代の運動は「我々から確実に我々の生活を奪う消費の機械に対する破壊の最初の波」と捉えられている。

シチュアシオニストの思想的な起源として繰り返し指摘されるのは、ダダ、シュールレアリスムの流れをくむアヴァンギャルド芸術運動、ルフェーブルによる日常生活批判としての資本主義批判、そして「社会主義か野蛮か」のグループによるスターリン主義的な官僚主義的社会主義批判と評議会社会主義の思想であろう。これらの異なる出自がシチュアシオニストの運動の中で最初から矛盾なく共存したわけではないし、ルフェーブルや「社会主義か野蛮か」のグループとの関係も決して友好的なものではなかったようだ。遊戯や漂流といったリバタリアン的なイメージの強い概念を掲げながらもシチュアシオニストは必ずしもこの運動に参加する人々を自由なままにしていたわけではなく、商品経済に荷担したと思われる者や、個人主義的でアートの実践を優先させ、状況の構築という課題に必ずしも積極的でなかったとみなされるアーティストたちを次々に除名していった。この過程でドゥボールがふるった指導力——あるいはもしかたらそれは文字どおり「権力」といっていいのかもしれない——は非常に大きなものであったように思われる。

私が興味深く思うのは、こうしたどの運動、組織にもある除名や内部抗争、そしてそれが敵対的な感情を喚起するという決定的な段階に到るといふ政治的な内ゲバ状態が、シチュアシオニストたちの運動の中には比較的希薄であるように見える点である。私が接する情報が一面的なせいもあるのだろうが、批判され除名された人々は、そのことによってシチュアシオニストであることをやめようとはしなかったばかりでなく、本家争いをするわけでもなく、自分なりのシチュアシオニストの道を選択しているのがおもしろいのだ。そして、ドゥボールらによるシチュアシオニストの運動が最も盛んであったと思われるフランスでは、S Iの解散にともなって、運動としては70年代の前半で終止符を打ったにもかかわらず、それ以外の除名者を出した諸国では、多様

な「状況の構築」を試みる自律的な運動が継続する。最も有名なのが、イギリスのパンク・ムーブメントだろう。すでにセックス・ピストルズの仕掛人であったマルコム・マクラレンとシチュアシオニストとの関わりについては幾つかの言及があるので、ここでは詳しいことはのべない*5が、イギリスのシチュアシオニストの運動を理解するためには、60年代の前半からすでに形成されているキングモブなどの除名者たちによる独自のシチュアシオニストの運動の流れがあったこと、その結果、S Iの解体の影響を受けることなく、イギリスでは独自の運動としてその後も影響力を行使しえたということをふまえておく必要がある。イギリスの70年代アヴァンギャルド文化運動は、独自のシチュアシオニストの影響だけでなく、ダダ、未来派、フルクサスからの影響も深く受けていた。パンクムーブメントの中心をなすアーティストたちがおしなべてアートスクールの出身であることの意味は、実はこうした背景と結びついたものだったのだ。*6

アメリカ合衆国では、シチュアシオニストの運動がある種のオカルティズムと結びついているということが当時から批判されていた。これは、アメリカ合衆国のカウンターカルチャー全体がもつ「伝統」のようなものとの関係があるかもしれない。ビート・ジェネレーションからヒッピー・ムーブメントといった流れの中に常に見えかくれするアメリカニズムの極端な合理主義への反発、都市と自然の極端な対立の構図のなかで揺れる社会観、プロテストантиズムに対するマイノリティの民族が持ち込む多様なキリスト教、イスラム教、仏教などの諸宗派。オカルティズムや黒魔術といった非合理主義への隠れた欲望は、個人主義的なアナキズム（それは、日本におけるアジア主義のように、極右と極左に共通する反エスタブリッシュメントの土壌である）とともに合衆国のカウンターカルチャーの不可欠なエネルギー源なのだ。合衆国のシチュアシオニストの系譜は、こうしたカウンターカルチャーの環境のなかで理解すべきである。*7

イギリスも合衆国も、シチュアシオニストの運動は、確実に現在でも一定の影響を持ちつづけている。イギリスでは90年前後のネオイストやアートストライキの運動で主要な発言者でありつづけたスチュアート・ホームや、『スペクタキュラー・タイムズ』をだし続けてきたラリー・ロウらは明らかにシチュアシオニストの立場をとっている。合衆国では、S Iの機関誌のアンソロジーなどを英訳したケン・クナップのビューロー・オブ・パブリック・シークレットが湾岸戦争に反対する声明を発表したし、労働の拒否、投票の拒否、あるいはアナキストであり、エゴイストを主張するボブ・ブラックはまた、シチュアシオニストの積極的な支持者でもある。*8また、アウトノミア運動の紹介でも積極的な役割を果たしているニューヨークの出版社、オートノメディアが積極的にシチュアシオニストの運動を紹介し続けているし、たいていのカウンターカルチャー系の半合法的な書籍、ビデオなどのディストリビューターのカタログには必ずと言っていいほど「シチュアシオニスト」が独立の項目で扱われている。それは、目に見える潮流となっているというよりは、合衆国のカウンターカルチャーの活動家や読者たちにとっては共通の「伝統」として浸透しているといったほうがいだろう。それは、多分、もはやドウボールが納得する形のものではないだろう。しかし、それが合衆国の「状況の構築」に有効な力を発揮するのであれば、その正統性の是非などという問題はどうでもいいことである。

もう1つ、シチュアシオニストの影響として欠かせないのが、アーティストたちへの影響である。皮肉なことに、68年のパリ、5月革命から20年を経た80年代末には、S Iの回顧展がフラ

ンスはじめ各国で行われた。*9 芸術を「状況の構築」のなかに解体しようとしたシチュアシオニストは結局美術館の制度の中に呑み込まれてしまったのだろうか。そうともいえるし、そうではないともいえる。多分、今、そのきわどい綱引きのなかにシチュアシオニストの問題意識を受けとめようとしているアーティスト達は置かれているといえる。ビルボードを用いる政治的、社会的なメッセージアートのバーバラ・クルーガー、ジェニー・ホルツァーやアート・アタックの運動を展開したロビー・コナルなど、美術の制度を超えて、都市の環境そのものを変える実験に取り組むアーティストたちは、彼ら、彼女らの主観とは別に明らかにシチュアシオニストの問題意識の延長線上に位置づけることができる。

こうしてみたとき、シチュアシオニストの影響力は、ポストモダニズムの消費社会批判の言説の世界よりもむしろ、パンクロックやパブリック・アートといった文化的な実践や、意図すると否にかかわらず、労働の尊厳を支える仕組みに背を向ける人々の生活様式や欲望、スクワッターや海賊放送、ハッカーやアンダーグラウンドなメディア・ネットワークといった中に見いだせそうである。日本の70年代以降の運動がシチュアシオニストやあるいはイタリアのアウトノミア運動の影響を受けることが少なかったということは、日本における「68年」の総括が、文化運動の側においてなされておらず、逆に、政治運動は60年の全学連運動にまでさかのぼる「新左翼」という名のマルクス主義のエスタブリッシュメントが引き起こしたスターリニスト顔負けの内ゲバによって、政治と社会の接点を再検討するエネルギーを奪われてしまった。今、シチュアシオニストを紹介する意味があるとすれば、それは、過去の埋もれた運動の「発見」のためではなく、今現在の運動へと連なるラディカリズムの手がかりとしてである。このことは、都市の運動としてのラディカリズムをこの国で展開する上で決して無駄なことではない。

*1: シチュアシオニストに注目したいいくつかの文献として、次のものがある。江口幹『評議会社会主義の思想』三一書房、1977年157ページ以下、海老坂武「〈5月革命〉における表現の問題」『講座20世紀の芸術6 政治と芸術』岩波書店、1989年

*2: ドゥポール「漂流の理論」

*3: 『ミル・プラトー』第12章参照

*4: たとえば、次の文献を参照。Rene Vienet, *Enrages and Situationists in the Occupation Movement, France, May '68*, Autonomedia, 1992.

*5: たとえば、次の文献を参照。クレイグ・グロウンバーグ『セックス・ピストルズを操った男--マルコム・マクラレンのねじけた人生』林ひめじ訳、ソニー・マガジズ、Greal Marcus, *Lipstick Traces*, Harverd University Press, John Savage, England *Dreaming, Sex Pistols and Punk Rock, Fiber & Fiber.*

*6: 次の文献を参照のこと。STEWART HOME, *THE ASSAULT ON CULTURE*, AK PRESS, 1991. JON SAVAGE, ENGLAND' *DREAMING*, FABER AND FABER, 1991.

*7: 多分、合衆国には正統派のS Iといえるグループがあるのかどうかははっきりしない。シチュアシオニストの機関誌の

アンソロジーをいち早く出版したケン・クナップのビューロー・オブ・パブリック・シークレットが最も正統派に近いように見えるが、ドゥボールの主著『スペクタクルの社会』やよく読まれているパンフレット『学生生活の貧困』はトロイトの非常に小さな出版社ブラック・アンド・レッドから出版されている。ブラック・アンド・レッドはアナルコ・サンディカリズム的な色合いの濃い出版物やイタリアのボルディーガ主義者のものなどを出しており、シチュアシオニストというよりはアナキズムに近く、文化、芸術運動よりも労働運動の比重の大きい出版社である。合衆国で最も興味深いのは、出版社オートノメディアの存在だろう。日本でも『GS』のネタ本として知られた『セミオ・テキスト』の発行元であり、イタリアのアウトノミア運動の支援グループや「家事労働に賃金を」のアメリカのグループとも重なる人間関係を持ち、ボードリヤールやネグリらのテキストの翻訳でも知られている。同時にオートノメディアは、シチュアシオニストの文献のひとつルネ・ヴェネットの『68年フランス、5月運動』や合衆国のシチュアシオニスト(?) ボブ・ブラックの著作などを出版している。なかでもハキム・ベイのテンポラル・アナキズム・ゾーン (T. A. Z.) はアウトノミア、シチュアシオニストそしてアナキストの考え方をカウンターカルチャーの運動として提起しており、興味深い。Hakim Bay, T.A.Z, Autonomedia, 1985参照

*8: Bob Black, The Right To Be Greedy, Theses On The Practical Necessity Of Demanding Everything, Loompanic Unlimited.

*9: On the Passage of a Few People Through a Rather Brief Moment in Time. MIT Press, 1991参照。